女鑑

明治三十三年八月五日發兌

第貳百拾號

國光社

女鑑第貳百拾號

目録

にい女



無學なるべからず

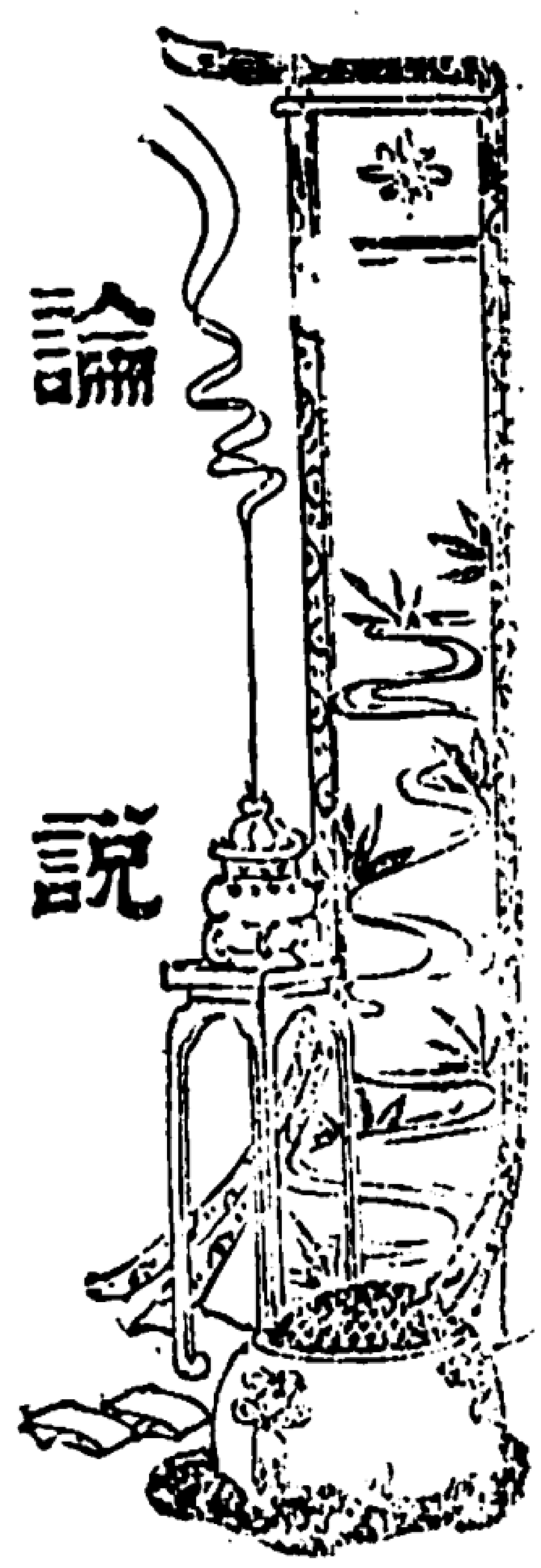
斷崖絶壁の間に架けたる橋ありて、まれ〳〵は、醉漢などの誤つて其の橋を踏み外し、千仭の谷底におつることありと假定せよ。然る場合に於いて、若し、其の危險を豫防せむがために、欄干を設け、鐵柵を附する等のことを爲ずして、直に、總べて人の通行を禁止し、行旅の人をして、徒に數十里の路を迂廻せしめ、或は、遂に、全く彼方此方の交通を杜絶せしめむとするものあらば如何。人たれか其の頑愚に驚かざるものあらむや。

方今、なほ、婦女子をして、適當なる學問技藝にだに近くことを得ざらしめんとする者、之を、是等頑愚の徒輩に比較して、よく、幾許の差あるとを得べきか。彼等の唱ふるところによれば、婦女子は、皆、他人に附和隨從すべきものなるが故に、學問技藝の必要なしと爲るもの丶如し。これ等の説は、其の行はる丶範圍のひろきにか丶はらず、到底勢力を得べき説にあらず。たゞ、先進の士の闡明誘

摧を俟ちつゝあるなり。彼の婦女子に學問技藝を授くるは、即ち彼等をして輕佻ならしめ、浮薄ならしむといふ説に至りては、言ふもの、はなはだ多からずとはいへ、其の人心を腐蝕するとは、前説の比にあらず。蓋し、前者は其の結果曖昧の中に沒了するものなるが故に、注意を傾くるもの極めて稀なりといへども、後者は、現在に其の惡果のみを世間に傳播するを以つて、頑愚なる人々は、之を無上の例證となし、婦女子に學問技藝を授くることを禁止せむとす。而も、それ、頑愚なるが故に、少數の惡果を得たるともがらの、全然改悛して、學問技藝の良果を現在に示すにあらざれど、容易に、彼等をして、頑愚の見をすてしむる能はず。是を以つて寧ろ少數なる頑愚者あることを悲むこと切ならざるを得ざるなり。但し、前者の附和隨從と稱するもの、淑順をはなれ、單に屈從せしめむとするも多きこそ、いと慨しけれ。

曩にも屢いへるごとく、次代の國運の消長を定むべき權力と位置とを持するところの婦女子は、少くとも、皆普通の學問技藝を修めざるべからず。たゞしかしながら、其に先ちて、高尚なる品性と堅固なると德操を養なふことを努めざるべからず。

論説



心術の養成

三輪田　眞佐子

老子は、心を稱して、神谷といふ。そは心なるものは、至妙至靈なればなりけん。近來の心理學者が、心は腦髓中に心ありとするも、果して心は頭腦中に如何なるさまにあるか、亦如何なる所に存するかは、明に言ふこと能はざるが如し。實に心は神出鬼沒の靈妙あれども、その作用は智となりて、現はるゝあり、情となりて現はるゝあり、將た意となりて現はるゝは、人々の自省して知るを得るなり。

右のごとき作用をなす心を修むるために、智育あり、徳育あり。情育あり。蓋し眞の智は徳に欠くべからず。眞の徳は、亦智に戻らざるのみならず、情も適當に養ふは必要なりといへども、實際、人を敎育するに於ては、智育の進歩は著しく、動もすれど、そのため、弊害を釀することあり。情育のごときは、多く勤めざるも、自然に發達する傾きあり。獨り徳育に至りては、最も困難なり。故に、古より、聖賢は、徳育を專らにせしは、史に徴して明なり。

三輪執齋曰く、夫れ學問は、惡人を免れて、善人と爲らんと欲するがためならずや。善人の至極は堯舜にも進むべし。惡人の至極は、桀紂にも陥るべし。その界は、一念の間にありと。これ孟子の學問の道他なし、放心を求むるのみといふに同じ。西洋に於ても、（ソクラテス）の如き專ら道理を解

きしなり。而らば今古東西を撰ばず、徳育は、人の根本ながら、これを養成するの容易ならざるを推度するに足らん。

智に邪智あり。奸智あり。以て人を害せし例あるなり。實際、智は、人に必要なれども、聖賢は、これのみを尊ばず、徳と相待つべしとするが多し。情育も、これに過ぐるときは、家庭を亂し、國家を危くする恐あり。たとへば、支那の墨子が、非樂の説を唱へし如きは、洋々たる盛樂に耽るときは、奢侈に流るゝ結果を慮りてなりけん。されど、徳育に至りては、多きに過ぐることなきのみならず、徳育に伴ふ弊害の來らざるを以て、これを專ら奬勵する人多きは宜なり。

おのれは、今日の女子教育に於いては、身体を養成するため体育の必要あるは、勿論心育に於ても智育徳育、及び情育を適當に調和養成せんことを願ふなり。極端に馳するは、何れも、欠點たるは一なり。

されば茲に心術の養成とは、道徳上より、人生の目的を定め、智も、その目的に向ひ、情も、その目的に對して進行するやう、心の工夫をなし、以て、智多きものは、愈、智光を以て、身を益し、國を利し、情盛ならんも、以て正路を失はず。遂には患難にも、心を亂さず、歡樂にも、心を失はざるごとき心術の養成を期せざるべからず。その養成の工夫は、別に述ぶべし。

女子と衛生（六）

女子の運動の事（つゞき）

永井潜

家庭に於ける運動の一つとして、我は、若し資力も足り、庭も廣ければ、テニスの運動場位は設けれむことを望むものなり。かくして晩餐の后、

老若男女、一家の者、皆集ひて、かたみに、之を遊び、さては、心親しき友達の來まし丶時など、之によりて、無上の樂みを覺え、身神を健かならしむると共に、ゆかしき和合の風を養ひ、相互ひの交情を温むると、果して幾何ぞ。おのれ嘗つて大學寄宿舍にありける時、夕食の后、大抵校内を逍遙するを常としたりしことありしに、其の度毎に、外國雇教師の人達の、夫は夫と伴ひ、婦は婦と語らひつ丶、快よげに散步せらる丶に遇はざるとなく、さても樂しき群ならむと思ひ居たるに、或る雨降る夕まぐれなりけり。ゆくりなく、是人人の館の前を過ぎ行きしことありけるが、けふは外出をうるさしとや思ひけん、例の通り男女打群て、長くはあらぬ館の廊下を、くりかへし／＼、運動さる丶を見し時、覺えず、無限の感に打たれたりき。我は、あながちに西洋を賞むるものにあらず。去れど、かくも規則正しく、かくも衞生を重んずるが如きは、確に吾が邦になくして、彼の國に存する美風にはあらずや。

あはれ／＼、活潑なる精神は、活潑なる身躰に宿るとは、千古の金言なり。活潑なる兒を產み、活潑なる家を造り、活潑なる國を興すは、吾が日の本の良婦たる、賢母たるべき人々の、ゆめ忘れ給ふべき所にあらず。

墨堤十里花雲の如き所、赤と呼び、白と呼び、勝敗を爭ふボートの競爭を見給はずや。世の風波を凌ぎて、之を渡るは、之の競爭の如くして更らに幾百千倍も難きものあるなり。人は、人と競ひ、國は國と爭ふ優れるものは克ち、劣れるものは敗る。他日旭の御旗世界を輝さむ時、よし卿等、自、之をかざし給ふことなくとも、之の旗を造るべき人は、卿等を措き、はた誰にか望まむ。

稿終りて、會々、新紙を披けば、大阪に於て、ペスト再發の報見ゆ。扨てこそ、愈々ペストの魔王は、再擧して、押寄せたれ。いかでためろふべきこととかは。いざ衞生の城にたてこもりて、魔王に一泡ふかし給はずや。昔しは、弦打ちならして、敵を退けし烈婦もありしと聞き侍るものを。（完）

危險なる婦人論

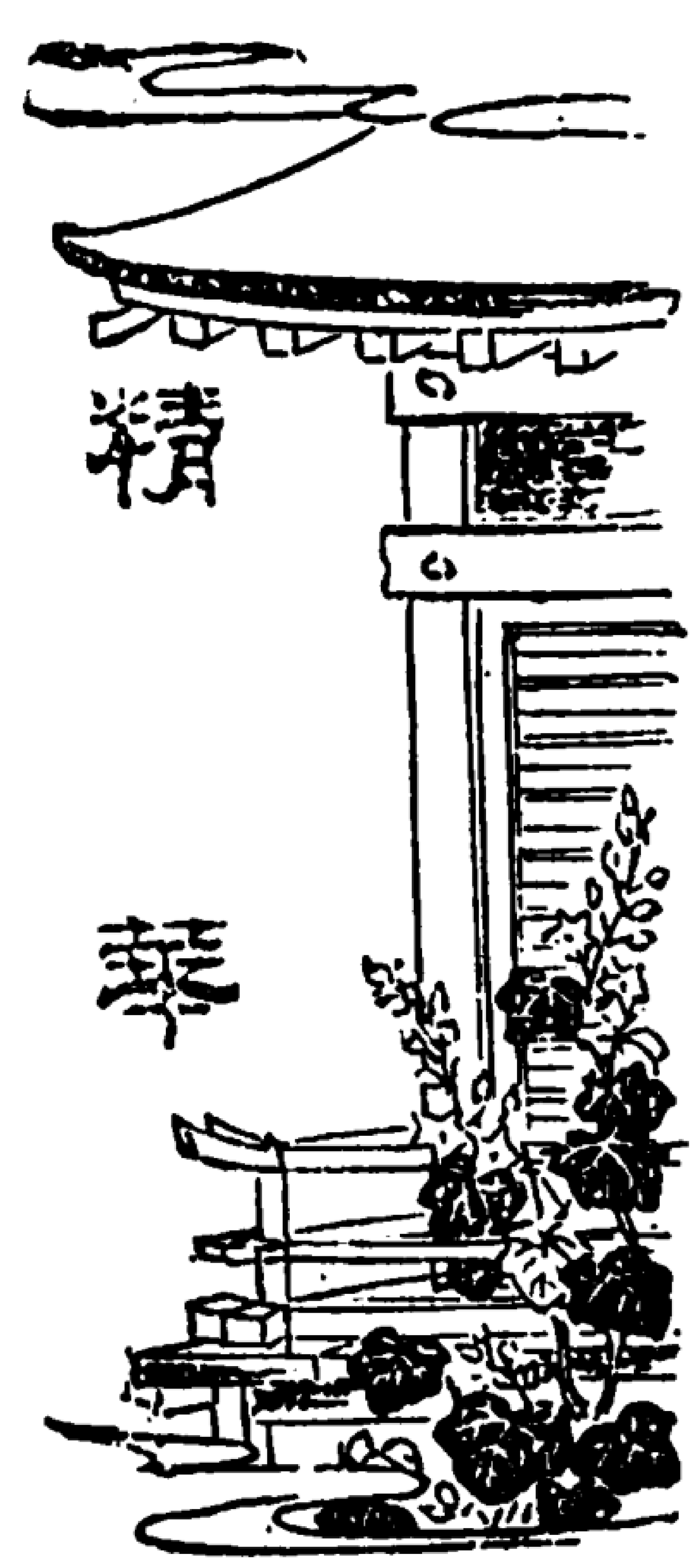
尙古生

維新後、歐州の文物を謳歌する時代、何事も歐州風に倣ふを以て、唯一の文明と心得、田舍の老嫗まで、不体裁なる束髮を結ひ、以て、西洋風を世に衒ふに至れり。實に、當時歐州的外型文明の潮流の甚しかりしは、回想する每に、一場の茶番に類する如きの觀に堪へざらしむ。外形を摸倣する文明と、共に來りしものは、男女同權なる精神的問題なりき。此の問題の盛なるや、男子と共に政治演說をなし、獄中に呻吟せし景山某の如き女子あり。又、此の主義に由りて建てられし女學校よりは、醜聞、屢、社會に洩れ、社會の攻擊、甚しく、社會は、大に歐州的婦人論に異議を唱へ、我が國粹の輕々動かす可からざることを覺り、劇甚なりし婦人論は、失敗の結果を以て終れり。吾人は、絕對的、歐州婦人の習慣を拒絕する者にあらずと雖も、苟も、一國婦人の品性を陶冶する如き、重大なることとは、一朝輕々に流行を追ふて遷る可きものにあらず。其の國家進運の上に、偉大なる關係を生ずる問題にして、最も識者の熟慮を要すべきことを信ずるものなり。

頃日板垣伯等の主唱に係る同氣倶樂部は、現時社會道德の頹敗、益々甚しく、其の醜穢の度、殆んど、底止するを知らざるの趨勢あるを嘆き、大に

社會改良に盡力せられんとの計畫成り、而して、これと共に同夫人等の發起にて、婦人同情會なるもの丶設立を見るに至れりといふ。吾人は、此等の會合にして、我が國固有の婦德に適する秩序ある矯風事業の起らんことは、最も、同情を表する所なり。婦人の社會に及ぼせる勢力は、固より輕視すべきものにあらずと云へども、徒らに、放大なる空論に驅られて、實際の社會を離るゝ矯風事業の如きは、大に注意を要すべきなり。世に一種の論者あり、『日本に在りては、婦人は、今尚社會の勢力なるは認識せらるゝの位地に達せず、日本の社會は、依然として、男子の司配する所なり』云々と吾人は、論者の勢力とは如何なる意味に於ける社會の勢力なるやを解せざれども、日本的家庭を造るに於て、今日の婦人が、一大勢力たることは、慥かなる事實ならずや。又男子が。社會を司配するを以て、異樣に感ぜるが如きは、最も解するに苦しむ處なり。此の種の論者の理想とせる婦人論は、『十八世紀は男子の世界にして、十九世紀は婦人の世界なり』と信ぜる妄想的、歐州の習慣を、其の儘我が國に注入せんとする自由論者の空論に止まるのみ。吾人の憂ふる所は、此の危險なる自由論者の婦人論なり。

（未完）



忠君

肥前鍋島藩の家老に、鍋島平五郎といふ人ありけり。資性豪邁にして、誠實の聞ありき。その家は代々、日蓮宗なりしに平五郎、一日、展墓の爲め、

その寺院に行きければ、寺僧之を迎へて、話次、宗門の事に及び、頻りに、他宗を排斥し、極樂に至る門戸は、唯、我が日蓮宗の一あるのみ。他の宗徒の如きは、到底地獄に入るを免れずといへり。平五郎、乃、問ひて曰はく、果して然るか。貴僧の語る所、實に過なきかと。僧曰はく、此の理、甚昭明なり、何ぞ疑を用ゐんと。是に於て、平五郎襟を正して曰はく、貴僧の言ふ所、眞に然らば吾今日より、宗旨を改めて、禪宗たらんと欲すと。僧驚きて、禪宗は、到底、極樂に往生する道にあらず。何ぞ、殊更に、好みて、地獄に之かんとはせらるゝぞといふに。平五郎、曰はく、足下も知れる如く、我が主鍋島公は禪宗なり。果して貴僧の言ふ所の如くば、我亦、地獄に往生して、我が主公を擁護せざるべからず。假令、我、獨、極樂に往生すとも、主公地獄に在らせ、何を以てか、臣下の道を全うすることを得んと。寺僧恐懼し、語無くして止みぬとぞ。

平五郎の言宜しく、深く味ふべきなり。天下人爲の敎、其の數一ならず。皆その宗旨所說を異にし、而も、各、人心を收攬して、依信を繫ぐ善巧方便を備ざるはなし。故に、その優劣邪正を較計するも、通常人に在りては遽に判斷し得ざるものあり若他の巧辯に惑ひ、幽冥の說を信ずるが爲めに、一心、倫常の外に奔逸して、現在の本分を忘るゝが如きは、世道を害することの最大なるものなり。夫道とは倫常なり。幽界、現界、其の義、二ならず。厚く、倫常を行ふは、是、神に事ふる所以なり。祖宗に孝敬なる所以なり。倫常を離れて、道を說くもの、是虛構の言に非れば、妄誕の敎なり。外敎の所謂神を信ずるが爲に、敢て、尊影の前に禮拜せず、神に忠ならんが爲めに、國家の畛域を脫

却し、其の盛衰興亡をも顧みざらんといふが如き迷想を懐くもの、益、多からば、邦家の前途圖るべからざるものあらん。

楠公曰く、七生㆓人間㆒滅㆓此賊㆒と。君臣の道實に此の如し。平五郎の言、亦、其の意、之に近きものなり。聖諭德を一にせんことを庶幾ふと宣へる大旨、須らく愼思して、肺肝に銘刻すべきなり。

にい女

吉野眞澄

あまざかる飛彈國益田郡、うちそふ尾崎の村に、二村清助と云へるものありけり。なりはひは農の外に、酒造をもかねしものから、召遣の人も尠からず。随ひて、晝夜事わざしけきことと云ふばかり無りき。諸姉は、田家の豪家のありさまを知るやあらずや。主人は正舍の旦那などいはれて、わたりの人々の公事は、皆、依賴せられ、内をかへり見る暇あらず。しかるに下女下男、あげて數十人、所有の田畑、幾百町、その上商賣を營むに於ては、其の混雜たとふるに物なし。之を程よく調へて、みだるゝ事なく守り行くは、たゞ主婦たる人の慮一にあるのみ。あはれ清助が家は、やがてかゝる有樣なりしならん。偖て、此の家に主婦たる人は誰ぞ、これぞなぐはしきえい女なりけり。えい女は、同郡の湯の島村の武川德左衞門の妹にて、今年三十五歳、三人の兒をあげ、長男藤兵衞といひて、ことし十一歳、次は忠七四歳、次は梅吉とて、分娩れていまだ、程なき稚兒なり。こをそだつるのみもたやすきわざならぬに、かてゝ加へて、夫清助、ふと病の床にうちふしけるが、月日經るままに、次第に重くのみなりまさりて、あはれや、遂にはかなくなりにけり。

眼をこそは二ツもあれ。只一人有る夫に別れたるえい女が心の内、いかにかなしかりけむよ。世のつねの女なりせば、ものくるをしうもなりなむ。しかるに、えい女は一度はさもこそあらめ。なかなかに、思を定めて手弱の手よわき心に似もやらで、この混雜きはまれる家業を、わきまへもなき三人の稚兒をそだてつゝ、おのれ獨にて調へ行んとせり。あはれ男にもたやすき業にはあらざるべし。かくていそしみ居る程に、清助が弟の獨身のものありけれど、こを後夫として、子等の成長をまつこそよけれと、親類の强にすゝむるものあれど、えい女、聞もいれずいひけるは「小兒の養育は母たる者の當につとむべき業なれば、申すまでもなし。家業の事如此く、亡夫の取り廣め置きたるを、おのれ女の身を以てたもち侍らんは、もとより大任なれども、夫死して子の幼なきほど、婦の其の家を修むるは、世間一般のならひなれば、おのれ愚なる身にて、行屆かぬがちには侍るめれど、今さら後夫にまみえん事は、父母の敎にもたがひ、世間に對しても耻べき事、なほまた我が心の誠にも耻つる所なれば、これのみは皆の議にも、え從ひ侍らず」と答へけるに親類のもの、なほも外に心ある人のあるにと色々とすゝむれど、遂にきかざりければ、皆々ふかくその節義に感じこの上は、心に任せて、兒等を育て、家をつがしむべしといひきかせければえい女は、こよなく歡び、これこそわらはが願ひなりけれとて、ますますつとめける。かくて一族をつとひて「夫の世にありしほど、凶年うちつゞき、活計にわづらひありて、負債のいで來たるを、此のまゝにさし措かば、家の衰ともなりぬべし。はやく、その返濟の方法をもすべし、といはれしが、不幸にしてみまかられたり。各帳簿につきて



取しらべなば、追て、少しづゝも償ひ侍るべし」といひければ、一族立あひて、點檢するに、おもひの外の大借にて、六百圓にあまれり。これより、えい女ことさらに奮發勉勵し、農桑に身をつくし、商賈に心をくだき、その外帳簿等の事にいたるまで、えい女が手をへぬはなし。かゝるほどに、かせぐにおひ付く貧乏はなしといふたとへにもれず、わづかに十年の間に、のこらず負債を返濟し、其の後は其の家、次第にとみて、小兒も成長して、遂には、近きわたりにたくひなきまでに榮えけりとなむ。



家政

女禮稽古の仕方

有住常子

貴人へ楊枝差上樣

先、小豆打か、又鐶かけに据、御前に持參り、朝の御楊枝は、太き方を御左手になる樣になし上るなり。又、御飯後の御楊枝は、ほそき方を御左手になる樣に差上るなり。

水菓子差上樣

先、手水を遣ひ、小刀を洗ひ、臺に据、其の儘持出で、御前にて一禮なし、皮をむき、又爪は、六刀半に剝なり。又、竪に四ッ割にして、差上るなり。

土用中は、輪切にして參らせてよし。猶、大なるは、二ッにも四ッにもわるなり。

柿上様

先、柿の大小により、手にも餘り候はゞ、皮をむかざる前に、二ッにわり、又、頭の方より剝ものなり。又、小なるは、先へ枝をとり、えたの方より剝く。扨、二ッに割りめを付參らするなり。

梨子上様

先花留の方より剝き、折敷に押當、枝付きなる方は、堅に二ッにも、四ッにも割きて、半月の形に切、扨て皮を剝くなり。如斯は、定式なれども、女子の御方には、なるべく少く切り參らせてくるしからず。すべて、御前にて致す事、法に候なり。

御風呂御供致し様

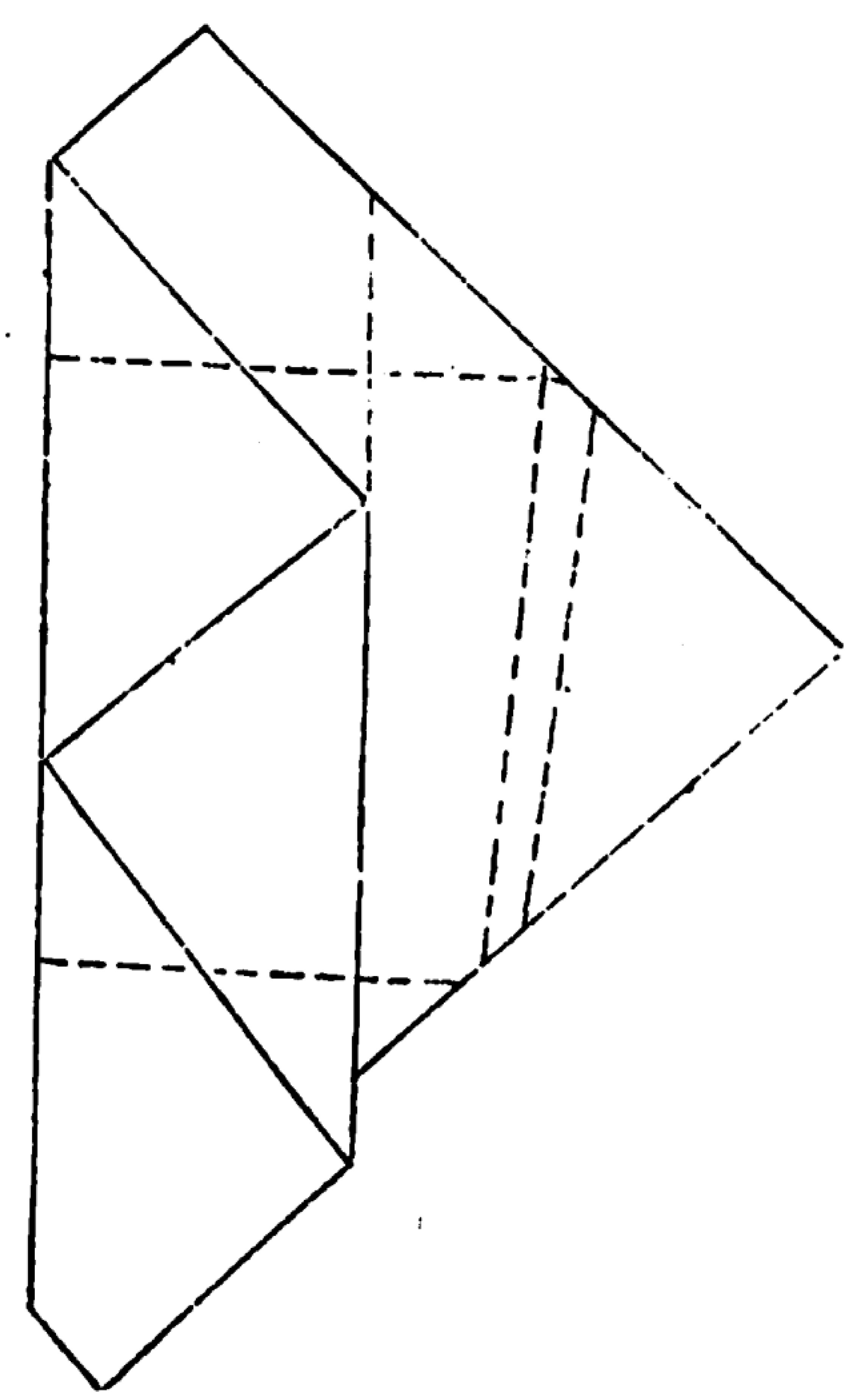
先、風呂場にゆき、立かげんを見るなり。其の時は、躶になりて、浴具致し候儘にて、立かげんを心見、水を天井より四方、悉く打て置き、宜敷由申上げ、すぐに、風呂場に御供申、貴人を入れ申なり。

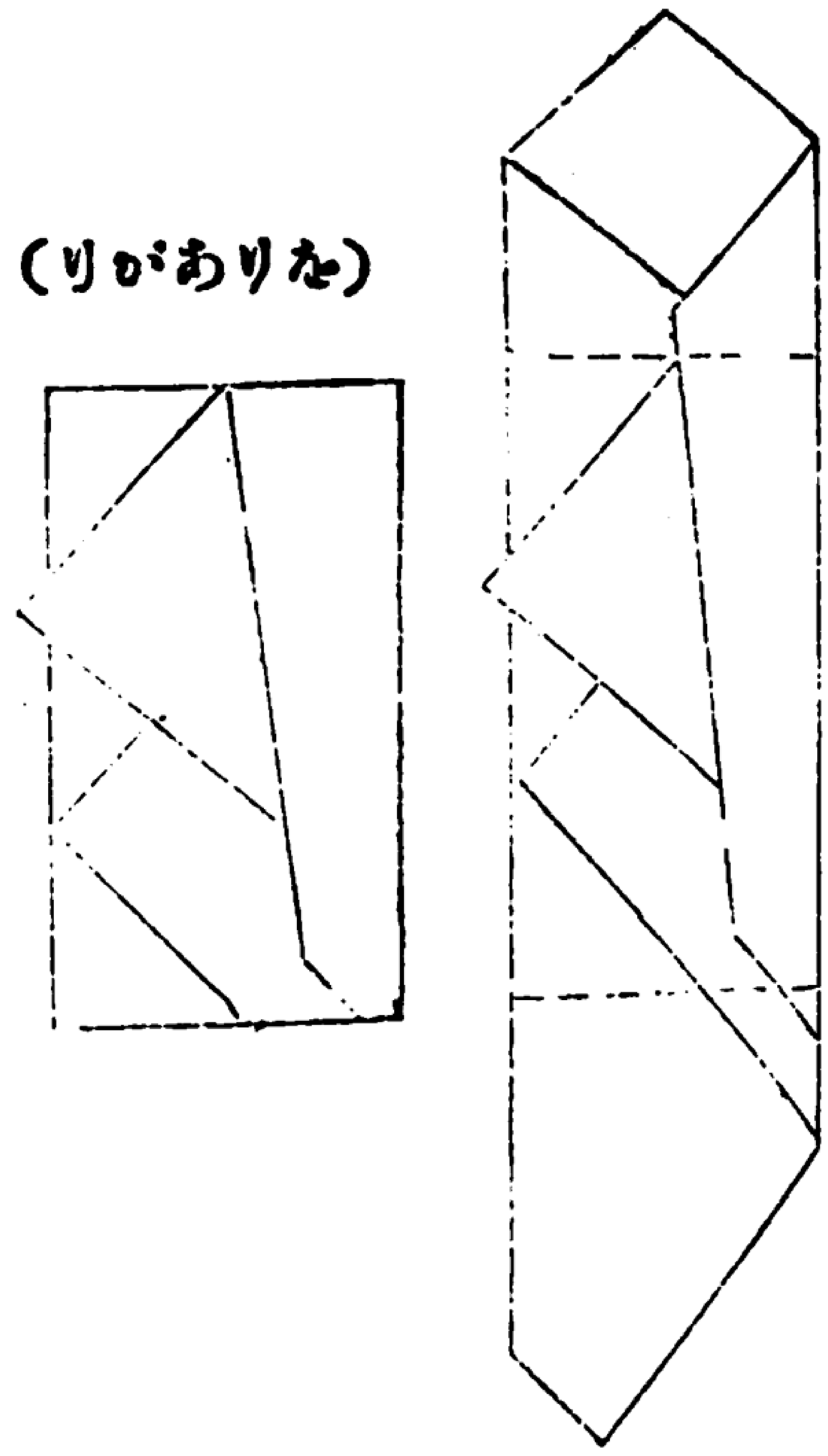
折方

毛抜包

有住くわう子

是はまへのと用ゐる所同じ。但し此の方は、手かるき所に遣ふなり。




(なりあがり)

茶の湯

茶禮初學（承前）

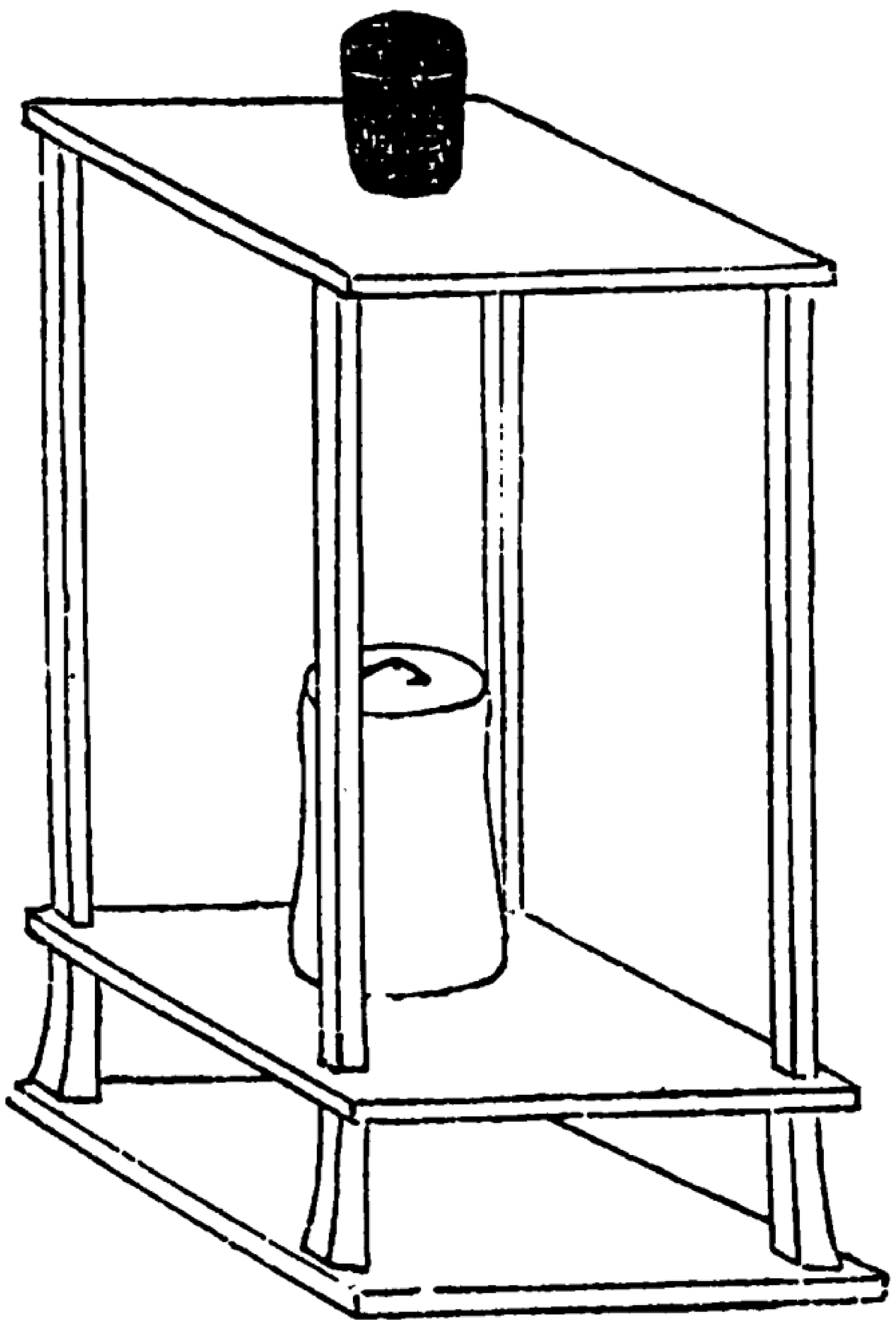
孤峰庵碌仙齋不羨
關　葦雄

桑小卓

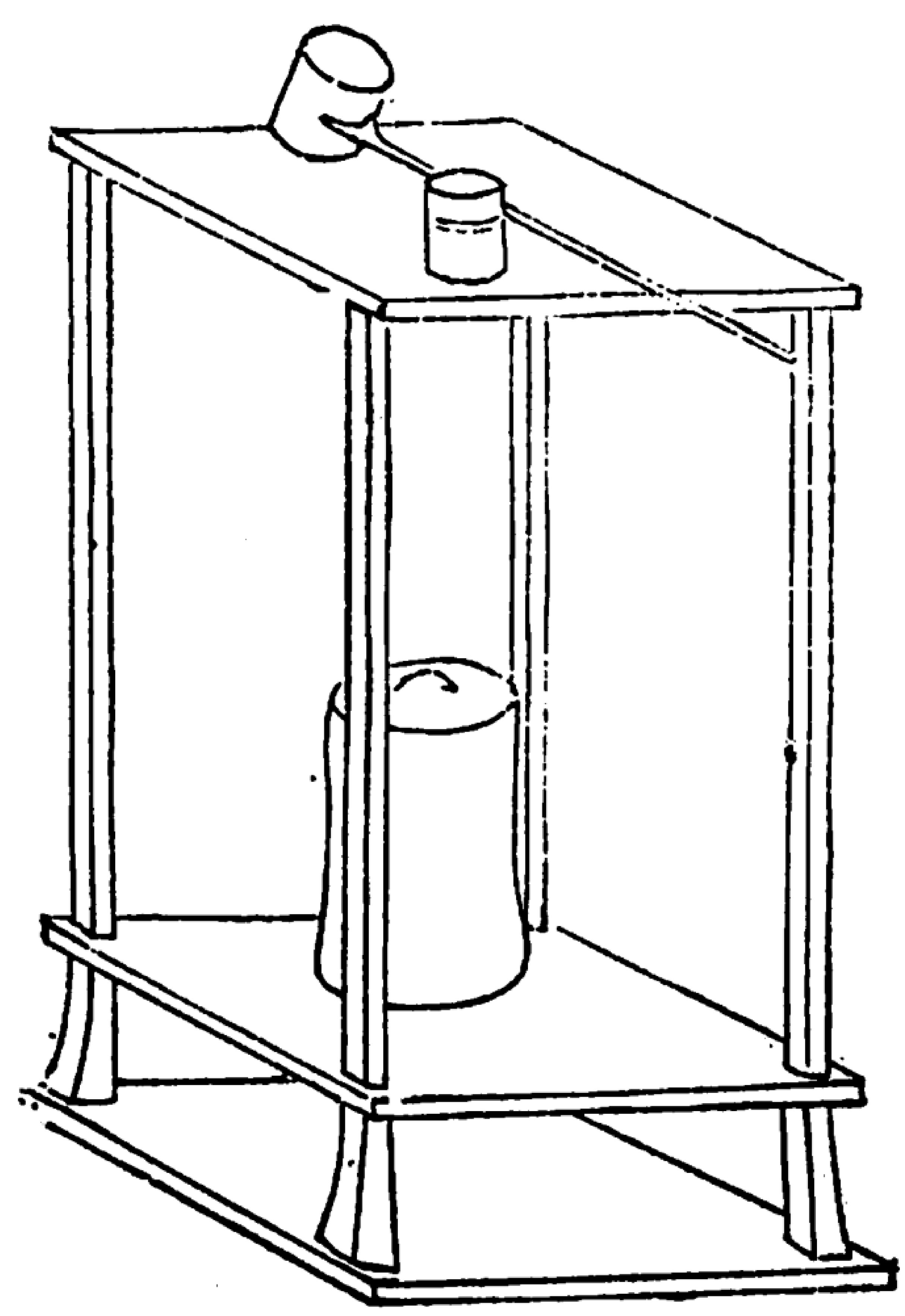
不羨曰此の棚は、名義の如く、唐桑樹にて造り、桑の色を付くる、柱棚段共に小振りにして、炉風炉共に通過して用ゆべし。是は仙叟宗室の好なり。點前茶具の餝式法も、最數種出來得る棚なり。則、左の刺圖に指敎す。近來桐の樹にて造るも有り、是は祥翁の好と云ふ。仙叟は、宗旦の三男今日庵の嗣子裏流の二代目なり。然れども、此の棚を現今の裏流の茶人は、更に不レ用一考するに、裏流は、近來玄々齋宗室といへる人、非常に發明せしもの多く、棚物類も、氣臆に困む程有レ之、自然新形を好の人情より、古きを捨て、新しき方を用ゐるならん。夫を表流にては、能く此の棚を專用す。水指も小形をよしとす。甁は、小卓の甁と云ひて、平形の建水あり。是を用ひざれば、棚の椽下に入るゝこと不レ能、柱と柱へ柄杓を飾も、點前熟煉の人にあらざれば、不レ留ものなり。小卓、最、愛翫多き

棚なり。常に使用して、會得すべし。婦女子等には、最、取合よきものなり。都て、柵或は柄杓建に飾る時は、必ず湯返しをなすべし。(但し湯返しとは、末に水を差して、直に釜の中の湯を汲み、上へあげながら、其の湯を釜の中へ翻すべし。左するときは、湯の温度にて、濕氣の乾き方早きのみなり)

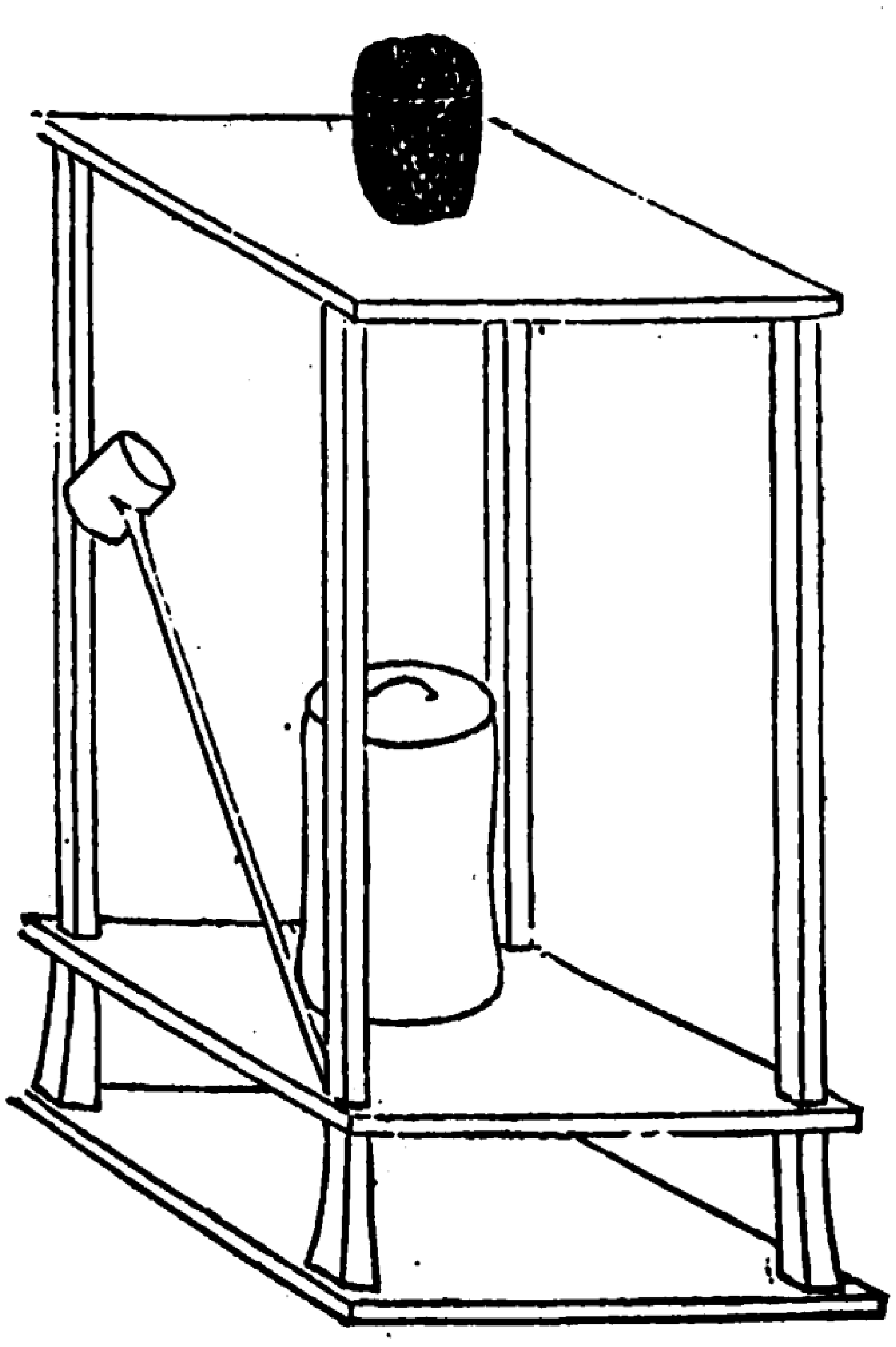
桑小卓
最初器一個飾
但シ水指毛飾有之トモ棚チ置以上ハ水指チ飾ハ勿論ナレハ別ニ不謂以上モ同様ト心得ヘシ

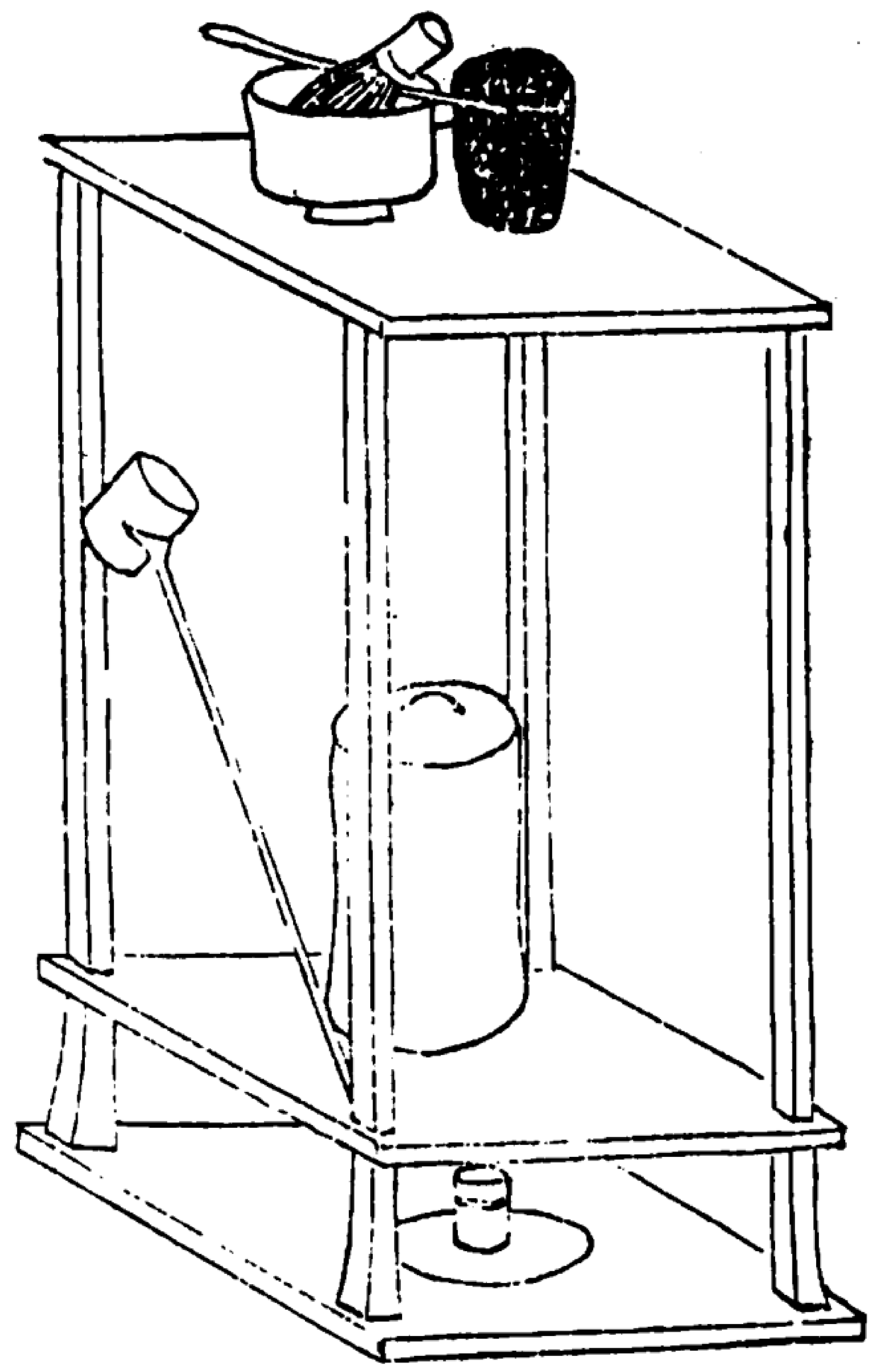


上ノ棚
柄杓蓋置
八ノ字飾



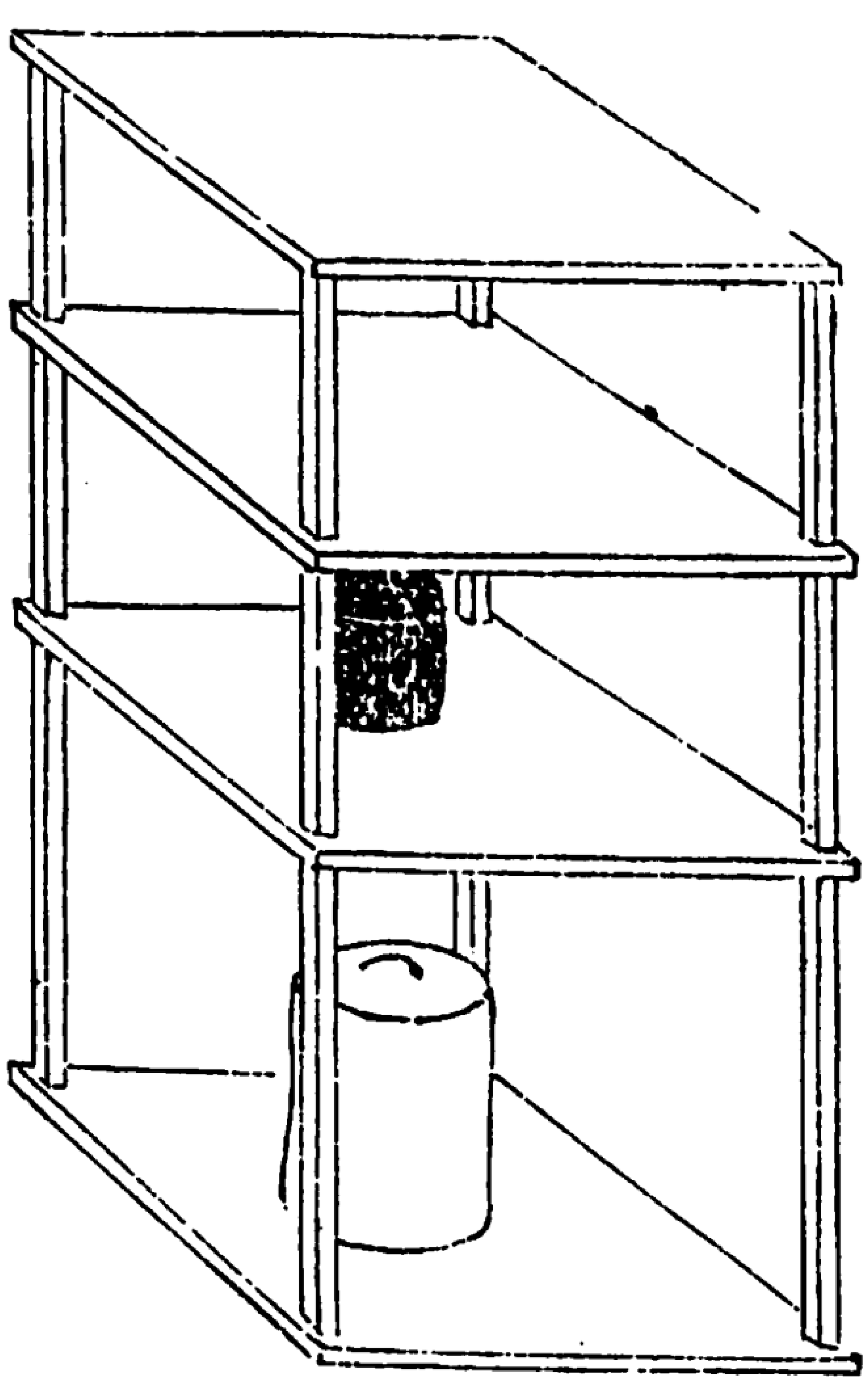
上ノ棚
器一ツ
左ノ方柱ト
柱トノ間ヘ
柄杓建掛下
ノ棚ヘ蓋置





三重棚

棚は覺々齋
一閑張は宗全
桑は如心齋
不美曰、此の棚は、大に立派なる棚なり。重數幾層もある故、大に丈高し。故に、炉の時節には、不好。併し遣ひてあしきと云ふことわらず。天井には、點前にて、遣ものは不レ置。天井には、花入、香炉、硯箱、料紙、或は、羽箒、香合、塲合に依り、見合活用すべし。點前飾方、變化は五種類なり。
第一下の棚に棗一個、
次に上の棚に柄杓、蓋置、
次に下の棚に棗、上の棚に柄杓蓋置、
次に下の棚に、茶入茶碗仕籠て、飾上の棚に柄杓、蓋置八の字、是を總飾と云ふ。
次に下の棚に茶碗斗、上の棚に、左の方に柄杓眞直、右の方、直際に蓋置、些少離れて、茶入、是を三個飾と云ふ。平茶碗の節、する事なり。

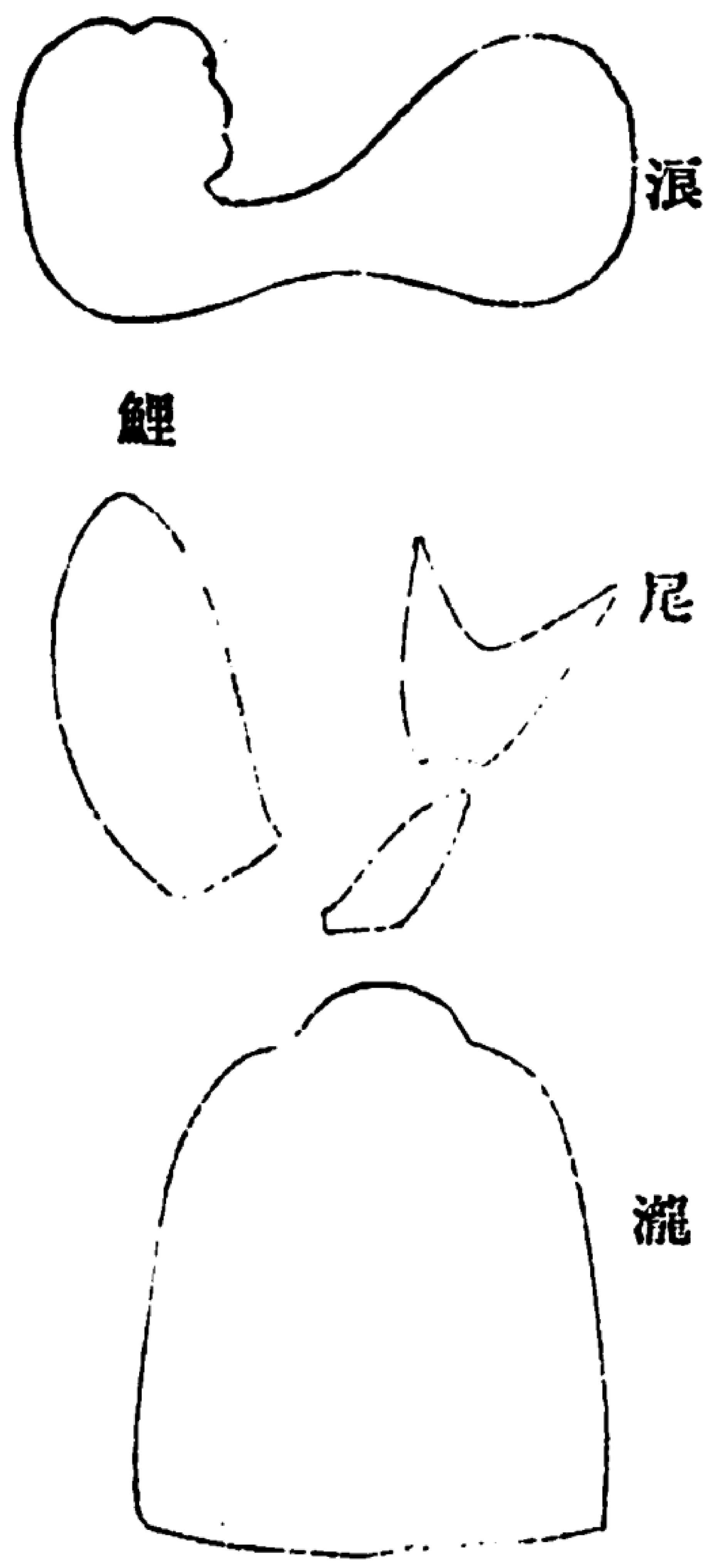


以下ハ省ク此一圖ニテ會得シ玉フベシ飾方ハ前ニ指數ス參考スヘシ

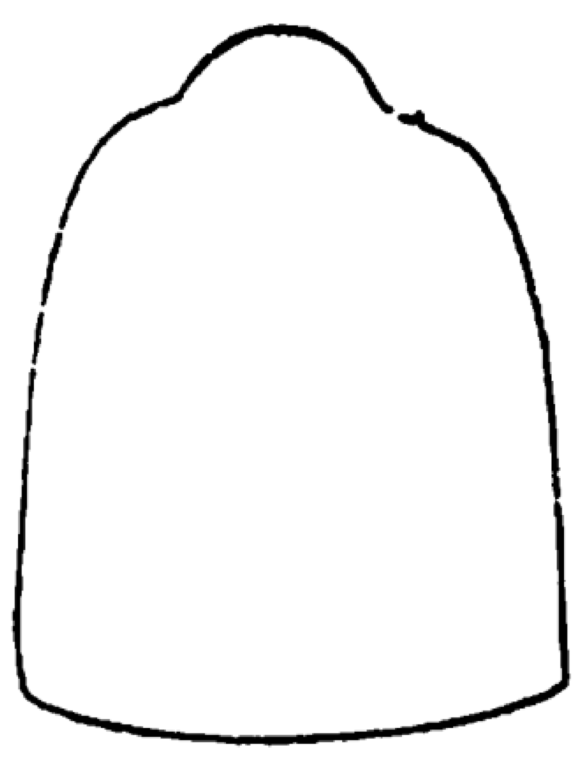
たちぬひ

鯉の瀧上

西山たい子

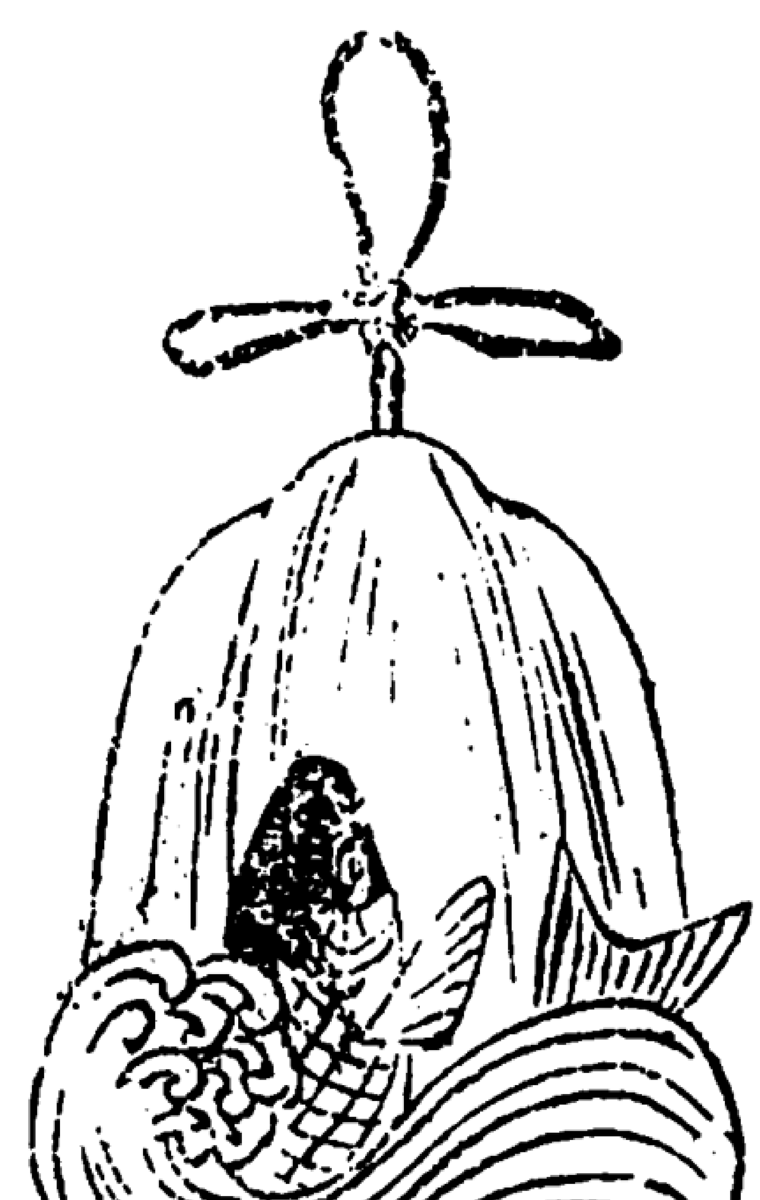


例の通り、厚紙を右の形に切り、これに綿を入れ、切を被せ、鯉の目、鱗、浪、瀧等を畫き、浪と瀧との間に、鯉と、その尾をはさみ、裏をも下の圖の形に厚紙を切り、綿を



入れ、紐をはさみて、裏表をはりつくべし。

（その圖）



但し、鯉は、綿を厚く入れ、尾とひれには綿を入れず。鯉は五月のぼりに立つるもの丶如き色に凡てをそめ、鱗を黒にて、浪、瀧等を淺黄、即ち、水色に色取るべし。

だいどころ

夏向スープ

普通の飯を焚たるもの丶中に、少量の食鹽を交せ、小匙壹杯程づ丶にまるめ、鷄卵の黄身をぬり、パン粉をまぶし、バタを引たる鍋にて、こげざる程に燒き、皿に盛り、上より牛肉の煮汁を注ぎて、

出すべし。好みにより胡椒を添るも佳なり。

馬鈴薯サラド

馬鈴薯を、能く洗ひ、丸のまゝ湯煮し、冷めたる後、皮をむき、薄くきり、皿にならべ、其の上に、焼肉、又は、焼魚の肉を、細かにせるものをのせ、又其の上に、薯の薄片をならべ、交る〴〵に、肉と薯とを能程に重ね、次に、サラド、ドレッシングを、かけて用ゐるべし。

但サラド、ドレッシングの、製方は、鶏卵のきみ三個を、鍋にいれ、砂糖、食鹽を、能程に加へ、かきまはし、更に牛乳壹合五勺を、いれ、火にかけて、絶ずかきまはし、能程になりたる時、温ためたる酢、五勺を、加へたるものなり。これは、すべての、サラドにかけて、用ゐるものなり。

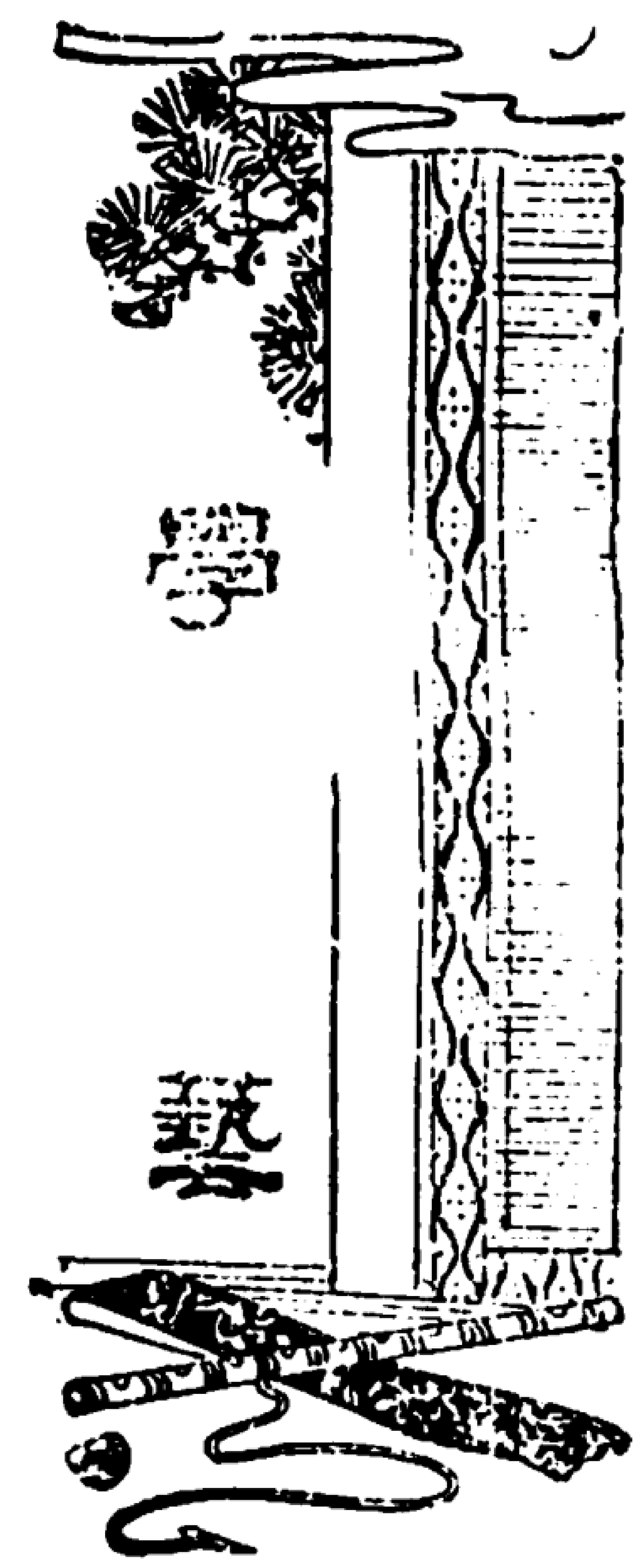
つぶし南瓜

先づ、南瓜を能く洗ひ、ゑんを去り、皮をむき、能程にきり、鹽ゆでになし、裏漉にて漉し、鍋に、バタをとかし、胡椒、食鹽を加へ、其中に、まへの漉したる南瓜をいれかきまはしながら煮るべし。肉類の付合せによし。

焼南瓜

肉厚き南瓜を撰み、能く洗ひ、ゑんを去り、能程にきり、鍋にいれ、バタと、牛の脂肪を溶かし、これに、南瓜の皮の方を下にして、上より、鹽と胡椒をふりて、蒸焼にするなり。





漢文學講義

佐々木天游

茗黌廿勝小記

鹽谷岩陰

櫻埒高柳　記の第十五

櫻埒今爲二鑄熕區一。區中有二高柳二三株一。前與二駿岡一對。二三月間。紅白黃綠。南北映帶。使レ人顧眄賞レ之。

櫻埒今は、鑄熕の區たり。區中に高柳二三株あり。前駿岡と對す。二三月の間。紅白黃綠。南北映帶し。人をして顧眄之を賞せしむ。

櫻埒(埒は字書に畫レ界分レ程云レ埒とあり。矢來とか、柵などを立てゝ、外の地所と區劃を分ちたる所を云ふ。俗に馬埒など謂ふ程の意なり。)は櫻馬場と謂ふことなり。偖唯今では、櫻馬場は、火熕を鑄造の場所となりてをります。(區は區劃區域の義なり。)其の區域中に、丈高き柳が、二株三株栽りてをりますが、前の方は、駿岡の駿河臺と相對して、打向合てをります。そこで春の二月三月の交間になりますと、駿岡の花木の紅白と、櫻埒の高柳の黃綠(柳の初めて芽を出します頃の色を鵞黃と申します。)と、南(駿岡)と北(櫻埒)と互ひに相映り合ひまして(映帶は、映り合ふこと(花紅に柳綠に、人をして南を顧りみ、北をふり向き(眄は眼を轉ずることなり。又流目に物をみることを云ふ。)て嗚呼よき景色ぢやと云うて、之を賞めでしめます。(之の字は、南北映帶の景色を、指したものであります。)

礫川晩靄

水道橋以北爲二礫川一。橋之東黌之西。西崖竹樹灌莾。日未レ落而晩靄已浮。秋色從レ西來。蒼然滿二關中一。觀二於是景一。方可レ悟二此句之妙一。

水道橋以北を礫川となす。橋の東黌の西両崖竹樹灌莾。日未だ落ずして、而晩靄、已に浮ぶ。秋色西より來り。蒼然として關中に滿つ。是景をみて。方に此の句の妙を悟るべし。

礫は小石のことでありますから、小石川と云ふべきを、雅に礫川と申したのであります。晩靄は、夕方のもやのことであります。(字書にも靄氣也とあり、俗に謂ふもやのことなり)

偖て水道橋より北の方を、小石川となしますが、橋(水道橋なり。)の東の方、學黌(茗黌なり)の西の方、即茗溪の少し西より、水道橋に近き邊迄の所は、川の南も北との両方の崖に、竹や、樹やが叢り生じ、繁りてをりまして、(灌は木の叢り生ずることなり。莾は、草などの深く繁りたる貌なり。)蒼々と致して居りますものだから、煙靄がかけ安う御座りまして、また、夕日が西山に落ちて、暮れませぬ内から、暮方のもやが、已にはや両岸の竹樹に浮び懸けまして、蒼然と田名引、ひきはへてをります。唐の岑參と申します人の詩句に、秋の景色が、西の方より來りきまして、(秋は金氣と申しまして、金氣は、西方を司どるものでありますから、從レ西來と申したものであります。秋の風を、西風と申しますも、矢張同じ起りであります。(蒼然と、すゞやかに氣色だちて、關中(函谷關より西、散關より東、嶢關より北、蕭關より南の地を總稱して、關中と云ふ。)の函谷關より西の方の關中は滿ちて、秋景色になりて來た、(岑參が與二高適薛據一同登二慈恩寺浮圖一の詩に曰く、

秋色從レ西來蒼然滿二關中一云々。)と云ふ句がありますが。今、此所の景色、即どこともなく、夕方のもやが、蒼然として、兩岸の竹樹に浮びかゝりて、秋景色が動き見ゆるの、此の光景を觀たところで、初めて方々に、此の岑參が秋色從レ西來蒼然滿關中と云た二句の、巧に妙なることを悟り知るべくして、此所の景色が、宛然此の詩句の景色であるから、此所の晩靄の景色をみれば、此の詩句が、寫し難きの景色を、巧妙に寫したと云ふ味が知られるのである。

台丘夕陽

茗黌舊在二忍岡一。爲二林氏家塾一。元祿三年移二今地一。陞爲二大學一。乃與二台丘一有二因縁一。地勢亦頡頏。夕陽懸二聖林一。餘靄曳二台丘一。有レ色有レ情。

茗黌は舊忍か岡に在り。林氏の家塾たり。元祿三年今の地に移し。陞せて大學となす。乃ち台丘と因縁あり。地勢も亦頡頏す。夕陽聖林に懸るときは、餘靄台丘に曳く。色あり情あり。

丘は邱に同じ。陵のことなり。台丘は、東台、即上野のであります。

偖て茗黌、即、此の昌平大學は、元來は、東台忍が岡に在つたもので御坐りまして、林家の私塾でありましたが寬永九年に、林信勝が、孔子廟を上野忍が岡に建てまして、先聖殿と名けました。是が茗黌の起り、抑々の初めであります。)元祿の三年に、其の私塾を、唯今の土地、即茗溪の上に引移されまして、舊林家一人の私塾でありしものを、其の位置を陞せ進められました。陞は上し、進なり。のぼせすゝむることなり。)昌平大學と致されましたもので、御坐りますからして、乃ちそこで、台丘の上野とは、本々因縁で、ちなみゆかりが御坐りまして、余程關係が深き所であります。さうし

て、土地の形勢も、亦互に張合うて、同じ高臺でありまして、自然に因緣がある樣に見えてをります。(頡頏はもと鳥の飛ぶ貌であります。詩經に燕々于飛頡レ之頏レ之とありて、傳に飛而上曰レ頡。飛而下曰レ頏とあり。鳥の飛上り、飛下るの貌であります。それよりして、互に對抗うて相下らざるを頡頏と申します。今此所では、忍ぶ岡も、今の黌舍の在る所も、地勢が共に高地で、互に相讓らざるを指して、頡頏と申したのであります。)さうして、夕陽の夕日が聖廟の四方に、植りて居ます所の聖林(聖林のことは上の聖林夜雨の條に見ゆ。聖廟の四方に在る、樹林を名けて、聖林と云ふ詳しきことは、前條をみて知り給ふべし。)に懸りまして、入合の時になりますと。其の聖林に懸りましたる、夕日の餘りの光が、(餘靄は、餘光、又は餘氣など謂ふに同じと知るべし。(遠く台丘の忍が岡に、曳はへ懸けまして、何となく、舊の因緣を忘れぬ樣に見えして、中々に色あり情ありで、樣子があります。(有レ色有レ情とは、情致かあると謂ふことにて、俗語の樣子があると謂ふ程の意なり。)上の因緣と云ふ字に呼應して、有レ色有レ情と云ふ情致ある文字を以て、此の篇を結びましたもので、因緣の二字が、全く此の一篇に張本骨子であります。さうして、此の二字よりして、四十有六字が生出された樣なものであります。



漫録

童女教(其の六)

一　よろづに、いみじくとも、親に孝なき心あら

ば、禽獸にひとし。孝は衆善の本なり。是よりして、德ばんじに渡と云へり。論語に、みな人類の口を養ふを孝とす。親ののぞみをかなへ、よくやしのふべし。されど敬なくば、犬馬をかふにひとしと。また、貧窮ならば、親の望にかなひがたからん。只、その程にしたがひてやしのふべし。たゞ子たるものは、親のこゝろさしをよく、知りて、心にかなふやうにつかふべし。此の身は親の身をしばらく預りたるごとくおもふべし。指のさき、髮すちまでも親よりわけえたり。しかるに、あやうき所に身を置て、そこなるいやぶり、あしき食物としりながら、口腹のために、身をあやまり、煩ふこと不孝の至なり。この時親いかばかりのおもひ成らん。聖人の敎にも、父母は、只、子のやまひを思ふ。愼ずんばあるべからず。明暮、こゝろをつけて、

親にもの思はせぬやうにすべし。諺にも、子を持てはじめて、親の恩をしるといふは、宜なるかな。子をやしなひ、長となるまでの我がおもひ、いかばかり、心をつくすことぞ。此のとき親のわれをやしなふとき、千々に心をくだきぬらんと、はじめて、思召さらるれ。父母なき跡には、おのれが、生れし日には、ひとしはかなしみ、いたみて、親の恩をかんじ入れと、程伊川といひし人も、をしへられたり。誠に蒼海よりもふかき恩、死の後いかにして報すべし。せめて我子をたも、よく、そだてゝ、子孫のするに名字を殘せんとおもふべし。然らば。子は母のそだてによるべし。父は、つねに内にあらず、朝夕は、にそうて養るゆゑなり。孟母が、三度所をかへて、孟子といふ賢人の子をもち、崔母は、子の杜華をして、王翰といふものゝ隣にう

つらせて、文道の名をもえたり。また、孟子のいとけなき時、父まつし人に頼れて、猪を殺す。孟子のいはく、父猪をころして、何にしたまふぞととふ。母たはむれて、汝にあたへんためなりといひしが。もとより、そらごとなれば、心うき事におもひ、子に僞ををしふると同じとて、市にてかひ求て、あたへ侍りしとかや。かゝる孟母の有がたき心ゆへ孟子といふ賢人を子に持たり。今の世の人を見るに、小兒のなくをすかしては、得させぬものをえさするやうにいひしまゝ、しばらくなきやみぬれども、度々たぶかされぬれば、小兒のこゝろにもいつはりと知りてなきやまざるは、尤なり。是、おやの身として正直なる子にわざむき僞ことををしふるは、淺ましきわざなり。子を養て敎ざるは、親のあやまちなりとあるに、いつはりを敎ることそ、返す

返すも淺ましかゝることゝろにて、養ひ長なりしのちに、不孝不義不禮なりなどゝ、子を折檻することそ心えね。いとしとおもふ子ならば、幼少より、ものまなばせ、よろづにつきて、しつけはよいかくかせさるぞ。子を愛するばかりにてなくそたてぬるは、畜類のことし。數ならぬこころのとがになしはくししらせてこそは身をもうらみめと、よみし歌の心に、恥給へ。小學には、胎敎とて、みごもりたる腹の子さへ、敎ふる道あり。今こゝに畧す。文のごとくにてこそ成まし。せめて、懷胎のうち、身持よろしく、たちふるまひも正しく、心に惡念なく、柔和にしてはらたゝず、身を淸くもち、耳に古人の金言をきけ。かぶき狂言の座へ行くべからず。口に惡言をつゝしみ、すべて、油つよき魚鳥、又、香のあしきもの食ふべからず。大かた、かくのごと

く、心得まもるべし。母の食事あしければ、産る丶子痘瘡腫物のうれひあるべし。かくいひつくれは、濱の眞砂の數おほく、野心のかつらのことのはも、しげければ、こゝにもらしぬ。此のたぐひのさうしあまたあるべし。目に及ぶものは、なほ求て、見給へ。これは、たゞ、ふとおびつけしことを、あら〳〵述べ侍るのみ。されど、心の善惡をわきまへ親につかへ、子をやしなふ道をしらば、ひとつの角をあげて、三のすみもしらるべし。かたちと鏡をとりて、彰にしる心のあやまちは、人の敎に直すべし。鏡を見れども、見にくき姿をなほさず、人をしふれとも、心のあやまちを改めずば、鏡を取て、裏にむかふがごとし。いとけなき心に、よく讀みおぼえてひと丶成りし後、辨給へ二三の童女

（完）

日本將來の國民（四）

肝付兼行

又現今、英國が海王の全權を掌握し、三億八千萬の人民を支配して其の領土に日沒を見ないと云ふ全盛を極めて居るのは、是抑も何に因て然るか。則ち、世界に九箇の艦隊を配備して、其の制海權を張り、殊に世界海上の中原ともいふべき地中海に、其の制海權を占有して居るが故であります。其の艦隊は、第一が自國の所謂海峽艦隊で、海外に在るものでは、第一地中海艦隊、第二東印度艦隊、第三支那艦隊、第四濠洲艦隊、第五太平洋艦隊、第六喜望峰、及、亞非利加西岸艦隊、第七北米西印度艦隊、第八南亞米利加艦隊、でありまして、地中海艦隊は、モールタを以て、其の根據地とし、東印度艦隊は、ボンベー支那艦隊は、

香港、濠洲艦隊ば、シドニー、太平洋艦隊は、バンクバー、喜望峰及亞非利加西岸艦隊は、ケープタウン、北米西印度艦隊は、ベルムタ、南亞米利加艦隊は、フオークランドのスタンレーを、各根據地として、居るのであります。さうして、地中海は肝要な海區だけに艦隊も、最も精選してあつて、其の艦數も多いが、此の海區に英國が、制海權を得て居るのは、艦隊のみの、力ではない。即ち、此の海區唯一の門口たるジブロルタル海峽該海の心臟と迄異名のある所のモールタ島、東西洋交通の咽喉にして、歐亞の關鑰たるスエス運河の三大要關を以て、已がものとして居ることに、多く基くのである。扨、其のジブロルタル海峽は、地中海唯一の海門で、最も樞要の地であるは勿論、其の北側の一部を西班牙より割かして、根據地として居るのであります。さうしてモールタも、亦小島ながら、其の地位と良港のある天賦天形は、軍事上樞要の地點たるを以て、心臟に譬へてある位な要地で、其の面積は近傍の屬島を併せて、百十七スクエアマイル、即ち我、約二十方里に過ぎませむが、地中海を通過するには、是非とも、其の南北側の何れかを經過せねばならぬ。それ故島周皆壘壁ともいうてよい防禦工事が施してあるが、其の位置は、伊太利のシヽリー島と亞非利加大陸のチユニスとの中間に當ります。又スエスは英國直接の領地ではありませんが、英國は、埃及を保護國となし、其の政治に干涉して居るのみならず、又スエス運河會社株は、英國官民の手で、其の七八割を占めて居るのである。即ち夫の英國近年の宰相故ビーコンスヒールド伯が、方寸の獨斷で買入れ、事後承諾を國會に求めて滿場一致の贊成を得たといふ、世に顯著なる快談は、全く、

此の株四千萬元の買入であります。即ち、此の運河の航通權の英國に歸して居ることは是で分りませう。されど英國が、地中海の三要關を己がものにして居るといふことは、不十分な説明ながら御了解を得たと信じますが、二十世紀の活劇場たる東洋の地中海は、即ち東海黄海日本海であります。(東海とは黄海の南面我が九州と臺灣との間を連串する諸島以北の海面の稱呼であります)そこで、此の地中海の三要關は、何處々々であるかといふと、津輕海峽、對馬臺灣海峽で、即ち津輕海峽がジブロールタル海峽、對馬がモールタ島、臺灣海峽がスエズに當るのであります。この彼我對照の説明は敎育公報にも載せておきましたから、御參照あらんことを希望します。

さて英國は、地中海の三要關を占め、之が基となつて世界の海權を掌握して居ますが、本國と一千海里を隔絶するのみならず、其の三要關の間は皆己が主權の及ばない外國であります。然るに東洋の地中海と、我が日本帝國との關係を論ずるときは、國に居ながらにして、其の海區の大洋側を成して居るのみならず、三要關皆、我が領土(但し臺灣海峽の片側は、淸國の福建省であるが、是は彼の國と他國に不割讓の約束をしてある我が勢力範圍である)で、且つ、其の間だも、亦、一側は、皆、我が國土つゞきである。又海區の一側、即ち、大陸の海岸に目を注げば、西比利亞鐵道は遠からずして、旅順口、大連灣、浦潮斯徳に出でむとし、又、此の鐵道は、支那の幹線鐵道たる北吉林より奉天、海城、牛莊、山海關、欒州、開平、太沽、天津、開封、南陽等を經て漢口に通ずる鐵道、及び、韓國の鐵道に連絡するものと見て過ちないものである。されば、前途實に多望で、西洋が老人

なら東洋は少年、西洋が正午若くば午后なら、東洋は午前、勿論蓋夜明といふも適當でありませう。乃ち自國、及び、四隣の文化の未だ進歩せざるが爲めに、識者外には、甚だ見えにくいが、我が帝國の地位地形の價値は、實に非常なもので、英吉利どころではありませむ。東洋が例へば、東京市なら、日本は日本橋區で、而かも四日市、靈岸島邊の四方河岸の町地面で、土一升金一升ともいふべき商業の中心地である。又亞米利加大陸の中央にニカラグワ運河が開通すると益價値を增すので、その方面から來ても、我が國内を通らないでは、東洋の地中海に出入する船舶の必經地たる地位に當つて居るのであるが、又現今は帆前船の時代、既に過ぎ去つて、滊船の時代である。然るに滊船も、今は機關の進歩した結果、軍艦は勿論商船でも、皆滊鑵には、淡水を用ゐることになつて來て居る。即ち艦船に淡水の需要の增したことは、以前に數倍して居る。さうして、此の淡水は海洋では決して得られない（但し飲料に供すべき少量の蒸溜水位は、船中でも得られるけれども）ものであるから、淡水と石炭とは、廣い海洋を經過する、最初最後の港では、船舶必需の要品である。されば外に太平洋内に東海、黄海、日本海を控へたる、我日本は、自然にして、東洋の地中海へ出入する船舶に、此の必需品を供給すべき幸福を得て居るのである。又船舶の寄港にして、多からむ乎。商業の繁盛を促すは勿論、常に風浪を朋として居る船員の多數に入込むことなれば、一時快樂を買はむが爲めに、彼等の費す所も、亦決して少なからざることゝ思ひます。實に我が日本は、東洋に於て世界の問屋たるべき位置を占めて居るのでありますが、惜むことには、此の貴い

商業地が、殆ど皆、田畑になつて居ります。是では、いつ迄たつても、其の地の富みやうがない。例へば、東京市の而かも、日本橋區の中央ともいふべき處に、若し、田があり、畑があつたらどうでありませう。それでは決して、日本橋區は富まない。又日本橋區を田畑にしておくことは、恐らく誰も譽めはしまい。否馬鹿な地主もあるものだとあざけりませう。此れ殆ど田畑になつて居るといふことは、後に、其の證據を擧げてみませう。偖、地位地形の話しは、是迄に畧しまして、是よりは、國土の廣袤と人口のことについて述べませう。



他山の石

岐蘇 小東洋子 譯

（一）ナポレヲンの母（ツヾキ）

ナポレオンの出産前數ケ月前は、夫と共に危險なる戰爭をも共にし、其の間の忍耐剛毅は、彼女の著しき克己の精神を顯はすと同時に、此の事情は疑ひもなく、此の偉大なる子息をして、大膽剛毅の品格を養成せしめしならん。千七百八十九年ナポレオンがパオーに書きて、「余は我が國の將さに滅亡もんとせし時に生れ、死の聲、壓制を受くる者の苦痛、敗北者の涙、は余の生まるゝ時より余の周圍を圍めり。」と佛蘭西の歴史家ランフレイ氏は「幼兒アキールスの如くナポレオンは三途川に沈められたり。」と謂へり。幼年時代に於て、斯の如き經驗をなせし事は、彼をして早熟にも危險を冒

さしめ、英雄、戰爭等の書籍が、彼の最も愛讀するものとなれり。シーザーの「コンメンタリー」記錄プライトーの「ライブス」人物は、困難の時に彼の離る可からざる侶伴たりき。

幼少の時、彼は、コルシカの危急を沈思し、實に慷慨家の一人なりき。遂に十六才の時揚言して曰はく、「如何に人間は壓制せられ、如何に人間は怯懦なる卑屈なる者なるか。我が國の現況は如何。憐れなる我が國民は、壓制者の手を接吻し、今や勇偉なるコルシカ人にあらず。一度は一偉人の感化により、道義的の愛を以て立ち、執政者の殘虐、奢侈、惡德に就き罵倒して止まざりしコルシカ島人は、已に去れり。佛蘭西人は吾人の全所有を奪ふを以て滿足せず。汝佛蘭西人は、吾人の品性をも腐敗せしめたり。嗚呼余は感ぜり。人間生命ありて、一つの快樂をも受くる能はずば、實に生命は、此の世に於ける重荷にして、萬事、之れ苦の種なり。余と共に此の世に生活する人々は、月の光の大陽の光と異なる如く、其の感する趣味、各各、異なるものならん。左れど例へ、此の世の事多くは忍ぶ可くあるも。斯の如き境遇は、實に余の忍びざる處にして、余は嫌惡の情を以て滿つ云云」と言ひしは、慥にナポレオンの一方に跳躍し、他方に雄飛せんとする自尊の大望の前驅なるを知る。

ナポレオンが生れし時、母の一の被覆は、ホーマーの「イリアッド」中の英傑を畫がきし掛毛氈なりき。之は第二のシャーレマン歐州大半の君主となりし一英傑の誕生に就き、豫言的聯想なくんばあらず。ハンボルトの言に據れば、歐州が百八十三萬の全人口を有せし時、ナポレオンは八十五萬の人民を支配し、其の管轄は、緯度十九度、經度三

十度に廣まれり。彼は、兄弟をして、皆王たらしめき。然し、母は何故、此の殷富、光榮の境遇に於いて、左樣に儉素に經濟的にあるかを問はれし時、彼の女は謙遜して「此等の諸帝王も、或ひ不幸に遇ひて、パンを我に求むる事無しとも言ふ能はじ」と、言ひし事に依り、如何に謹愼にして、先見の明ありしかを知るに足る。

チャールス、ボナパート夫人と小兒等に向ひて、最も閑靜喜樂の避暑と見なし、夏時の家庭に就き、ワルター、スコットは、一つの記錄を殘しぬ。其の都府より殆ど一里隔たりし、アジャシオよりサンジィニャの方の海岸に沿ひ行き見れば、二箇の石柱建てり。門の殘趾を辿りて、荒癈せる別莊に達す。此處は一度はボナパート夫人の異母弟の家宅なりしが、温暖の時節に繁茂する麗はしき神仙掌及び、他の灌木に依りて圍まれ蔽はれたる通路によりて、其の家に至るを得。庭園草園あれ共、只、過去の美の跡を殘すのみ。家は灌木の叢に據りて圍まれしも、今は荒野となれり。是はボナパート夫人、及び其の家族の夏時の住居にして、凡て橄欖シャボテン、其の他の木にて鎖され、ナポレオンの洞と呼ばれたる、甚だ奇妙なる花崗石の岩あり。其は風雨、其の他の變に據て一つの動搖も無き如く見えたり。夏時穴に遊びし遺跡は、岩の下に見られ、入口は繁茂せる無花果の樹にて蔽はる。此處は、ナポレオンが學校の休暇に、家に歸へりし時の寓所なりき。此の寂寞なる小說的の場所に於て、此の數百戰を嘗めし英雄の眼前には、如何なる偉大なる觀想の起りしかを、想像する豈容易の事ならむや。」

彼等は、コルシカより逐はれし如く、此の快樂なる隱處より、不幸にも逐はれ、千七百九十三年即

ち、セントヘレナにてナポオンの悩みし胃瘍により、父チャールス、ボナパートが死せし八年後に於て、争亂相繼でコルシカ島に起れり。ボナパート家は佛蘭西に賛成せしも、パオリーは追放の許可を得て、歸へり、コルシカ島を英國に譲らんと奔走せり。數千の農民はアジヤシオの諸山より降り來り、ボナパート夫人の家は强奪せられ、家畜葡萄園は荒らされたり。ナポレオンは、佛蘭西より、母、及び、兄弟ジヨセフと、ルシアンを訪問せんため、玆に來り居りしが、彼等の故山なるコルシカ島より退去すべき命令に服從し、此の三人の子息の保護の下に、レチチア、ボナパートは、小兒の如く涙ながらにゼロム、及び三人の娘等と共に、以太利に向ひて出立せり。一時ナイスに落付きしが、其の后マルモイルスに移り、其處にて非常の艱難を甞めたりき。

（未完）

漢山のさきは木

高雄の松

召南申女

唐山の青葉かくれの撫子も色はかはらず咲きにはひけり。召南申女といへるは申と云へる國の某が女になりけるが、桃の葉の夭々たる二八の年頃ともなりぬれば、鄷といふ所の某が妻に娶らるゝ事となり、一日千秋の思ひにやう〳〵、其の式をわぐる日とはなりぬ。然るになにごとぞ。夫が家いとも重うすべき禮をはおろそかにして、たゞ飛ぶ鳥をかふが如く、はしる獸をむかふる有様なりけり。こゝに申女人に云ひけるやう、夫婦は、人倫の始めなり。いかで正しうせでやは。さるからに古の聖も、先づ其の本を正しうすれば、萬從ひて調へ、こをいさゝかも差へなば、いはゆる千

里の差ともなりなむ。本立て道生ず。源清ければこそ末の流も濁らざらめ。抑々嫁娶は、先祖の身をつぎ、業を承けて、萬世に、其の祭を絶たざらむかためなり。さるに、今夫の家は禮をかろくし制に違へり。わらは何とてかゝる所に嫁くべきとて、ねきかざりき。さてはと、夫の家は、こを理に訴へ、獄にまで幽せり。されども申女は、節を守り義をふみ、わらは死すともいかでしたがふべきとて、詩をつくる。其の詩「我を獄に速くといへども室家たらず」と、その心は夫の家の禮のそなはらざるを云ふなり。

今の世より、之を見ば、少しくかたくるしきの感なきあたはず。なほさら、ときめきてひたびるに西洋風をしたひ髪をも心をもねぢりたるをみなに云はせたらんには、たゞ頑強と一笑するにとゞまらむ。しかれども、其の禮の重さを知りて、敢へて非禮にしたがはず、從容、以て死を必す。獄に繋がるゝもおぞろかず、詩を作りて、其の意を明にする如きは、蓋し千百歳一人のみならん。

斧のに

松竹莊主人寄贈

荒木田麗女遺稿

荒木田麗女が、才學文藻に富めりしよしは、曩に井上賴文ぬしが、本誌に寄せられつる、傳に於て詳なれど、今復いはず。この物語は、同媼の遺稿にして、よみもてゆくに、始めのほどは、中昔ふりのなまめきたる作り物語の如くなれば、終りにいたりて、大に爲にする所ありて、かゝれたるものなること明らけし。閲む人、猥りがはしきものとて唾棄てたまはず。その蕉境

に入るを、まちたまひねかし。
ときき世のことにや、三位中將なりける人ありけり。親王の後とて、いとやんごとなく、からやまとのさえかしこう、たぐひなきかたち人にてさへあれば、帝の御おぼえめでたくて、世中はなく〳〵しう、ことに時めきたまへり。はた、いみじきいろこのみにて、心ばへたはらしう、わかきほどのあやなさは、あいなきあだ名もつゝみあへず、ほのかに見し所にはかなくきゝわたる垣ねまで、くまなき心のすさみにまかせて、かならずたづねよりけるほどに、うちかよふ所もおほく、物いひふるゝかたもあまたになり行きて、げに大癡なる名の、世にながるゝは、忍ぶのみだれもなべてならずかし。さるは、心たかくゆゑつきたるほん上にて、おぼろげのことは目につかずやありけん。これこそとあながちにれりたちて、心をつくすわたりもことになく、おほかたなほざりごとのさまなり。すべて、なんなくすぐれたるを見んとするほど、いとゞそこはかとまどひありき給ふことたえずなん。祭の頃は、なべてわか葉の色のさかりなるに、雨をさへかけて、ことに見どころある夕暮れいのまつすゝむおもひもせんかたなく、物哀にたゞひとり見いだして、

雨かゝるこずゑ〳〵はさもなくて、わが袖のみぞぬれまさりける」思ひおもはすとて、左の大殿のうへの御かたなる辨の君のもとに、文かきたまふ、

身をそほつ雨にみかさの増りつゝ、わた瀬もしらぬ淀の川舟」雨にしほれたる若竹につけたまへり。たゞこの思ひひとつのみなん、忘れがたくつと身にそひて、おきふし心にかゝれど、いとかたはらいたくまばゆきすぢにて、世のきこえもつゝま

しう、色にもいでじと忍ぶれど、枕よりあとよりせめくるもせんかたなく、物やみにさへなるぞかりにて、この頃は心ちもまどはれ給ふ。くらうなりて、おほとのあぶらまゐるほど、ありつる返りごともて來れり。辨ぞきこえたる。

水まさるなかめとしらば川舟の、わたせをしひてたつねすもかな」れいのことなれど、いとつらう、此の人の口こはきも、御前のけはひを心得ればなめり、と思ふにことわりとは見れど、かうおぼつかなきに、いとゞまけじ魂たゞしうあながちなる身のくせそひて、此のまゝにてはえやむまじうひたぶる心さへつきて、れし返しつかはす。いとあさはかなるが、ことに、袖のみぬるゝと思しないつるかいふがひなく、おりたつ田子のみづからのうさもまいりて、うれへ聞えんと思ふたまふれど、雨さへひまなくて、まことに身もそはつまでにて、心地のかきみだり侍れば、おきあがることもし侍らで、之なん今ためらひて、とこまかにかきて、又

たのむべきよるせも波の早川に、身をうき舟そいとゝこがるゝ」とてちいさくひきむすびてなかにいれたまふ。かくひまなう聞えわたり給ふは、左の大殿わたりのことよ。去年の春はなのもとの夕鞠の庭などにや、殿のうへをはつかに垣間見たまひしより、にはかにわらぬ思ひつきて、わすれがたうまどはれ給ふなりけり。殿は中宮の御せうとにて、世のことをしたゝめたまへば、天の下こぞりておぢおそり、したがひなびくさまおぼろげならんやは。上は内の大臣の御女にて、そのいもうとの姫君に、三位中將むことられたまひ、女君のかたちもすぐれてものしたまへと、日比うゝはしうて、すみわたり給ひ、忍びありきもひまある

やうにて、いみじう思ひつきたまひ、おのづから心もをさめらるゝやうなるを、世の人もめやすくあらまほしきことにし、内の大臣も、思すさまにうれしう心おちゐて、三位の君をもおろかならずもてかしづき給ひしに、やくなき垣間見の後、又心うかれて、内の大臣にはまちとをになりたまひ、かよひ給ふ所々もをさ／＼音づれたまふことも無ければ、何かたにも月草に思ひなして、今はかぎりと見なしては、こと人にうつりゆくもあり、又ねんじかねたるは、うらめしげにおどろかすも、折にふれておほかれど、たゞ今はすべて目にも耳にもつかず、みなわすれたるやうに、つれなくもてなして、殿のうへにつかふまつる辨のおもとゝいへるわかうどは、三位の君のめのとのめいたつ人なればなん、うとからぬゆゑをかこちたるやうにて、わりなうせめわたりつゝ、しば／＼文きこえたまへど、いかゞは御らんじもいれん。しるべする辨をさへうしろめたくうちとけにくきものにし給ひ、やう／＼へだて多くなり給ふを、此人もことわりと見まゐらせて、いとはつかしうまばゆくて、心つよくいひかへすとすれど、中將にむかひてはさしもらう／＼しうなよびかにえんなるさまして、あはれにうちなきつゝかきくどき、又しる人もと涙せきあへたまはぬが、かぎりなう心くるしういとをしけなれど、われもゝよほされて、心のまゝにあはめなどもえせず、ひだり右にわりなき思ひして、まめやかにわぶめり。長雨すこしひまありて、雲間をもれいづる月のけはひをかしき夜、殿にて中將君達もろともにあそびし給ふ。宵すぐるほどまかづるとて、辨がつぼねにたちより、おなじことゝくり返し聞えつゝ、たゞ塵ばかりのしるし見せたまはゞ、それをなぐさめにすみや

かに思ひたえなん、としうねうかたらひて、文さし置とて、

をりて見ぬなげきとしらであやなくも、月の桂に心かけくる」手にはとられぬ、とおしのこひ給ふ手つきなど、似るものなくなまめかしう、心あらん人に見せまほしきさまは世にたぐひなけにて、かうおほけなき心つかひたまふとも、人はさらなりおに神といへどかならずつみゆるしつべく、いといたう心くるしう見えて、辨、

久かたの名をしたのまばしばしなる、なげきに朽んものとやは見る」といひなぐさむるに、中將さちはいとうれしかりなん。かならずわすれ給ふなよと、なつかしげに聞え置て出たまひぬ。

（未完）

大和めぐり（承前）

井上頼文

頼文いはく。泊瀬列城宮（武烈天皇）の宮址は、出雲村の右の方、泊瀬朝倉宮（雄略天皇）の宮址は、黒崎村と岩坂村との間なりといふ。今、出雲村、黒崎村、慈恩寺村など、朝倉村と改め、金屋村を三輪町と改めらる。

三輪の大神神社

官幣大社にまして、大穴持命の和魂を祭る。これを大物主神と申し、また倭大物主櫛𤭖玉命と申す。はじめ、大穴持命、天神の詔のまにまに少彦名神と、共に、此の大日本國を作り堅め、大功績を建て給ひて後、その幸魂、奇魂を、倭の青垣の東の山の上に齋き奉る。これ、御諸山の上に坐神、即ち、この大神神社にましませ

り。されば、朝家の御崇敬最もあつく、御祭もいとおごそかなりき。されば、大和の都にて、大神としいへば、三輪神社なることと説明をまたずして明かなりき。あだかも、山城の都にて祭としいへば、賀茂祭なることと誰れも知れるが如く、そのさかりなりしことと思ふべし。

道の幸に、廿八日（寛政四年十一月）本社にいたれば、高宮神主とかいふ社家、引つれて案内し、拝殿にのぼり、南の間に坐せば、あやしの乙女、鈴とりて舞ふ。社家神酒さゝげて出ぬ。土器をみれば手捏なり。是は、なにといふにやといへば、赤土器といふとこたふ。社のさまよりはじめて、思ひしよりも、故實も見えず。かゝるもの、名も、とりうしなへる、いとあさまし。されど、御臺に手捏すゑたるあまたみえて、日毎の神供も、それにて備るよしいふ。かゝることにひまとりて、寶物一覧をば、いかにするにかと思ふに、熊澤了介が寄附せし、大塔宮の箭田衣といへるもの、外は、さらに、古物もなしいとおぼつかなきものなり」と見え。

齋藤彦麿ぬしの、傍廂後編に、三輪神社にて、右の肘にて、左の掌の土を、牛つく如くにすれば、深き土器となる。

土器の中には、肘の筋骨の跡あり、底には、左手の掌の理文みゆとなり云々。

觀鵞百譚に、神代の文字とて、三輪大明神の額といふあり。今は、興福寺の庫中に在り。今ここに小書す、滕公石槨の銘の字と、甚似たり。世に、叔孫通なき故にしることあたはずと見ゆ。

頼文案ずるに、此の額、今は興福寺中に在りとしるしたれど、屋代翁が、幕府の命をうけ、古書

畫寶物ども取り調べられつる時、興福寺にて、此の額の事尋ねとはれしかど、あらざる由答へたりと、道の幸にしるされたり。むかし、大鳥居にかゝりたりといふ神代文字の額は



三輪町

近松門左衛門の、梅川忠兵衛冥途の飛脚に、奈良の旅籠屋、三輪の茶屋、二十日あまりに、四十兩つかひはたして、二分のこると、見えたる如く、いと、にぎはしき町なり。こゝの名產とて、三輪素麪をひさぐ家あまたあれど、冬がれなれむかひなし。

櫻井町

こゝより、右の方へすこし行けば、外山村なり外山は、かの長髓彦が住めりしとみの地なり。こゝには鳥見丘もあり。こゝより、またすこし行けば、鏡女王の御墓、大伴御墓、舒明天皇の御陵あり、されど、豫定の道路ならねど、いと口をし。

阿部村の石窟

安部山に、發掘せられたる古墳の、石窟三あり。されど、石棺の今に殘れるは、たゞ一のみなり。この石棺の存在せる石窟は、案内者なくては、たやすく知られ難き故にや。この石窟につきて、考古學者、人類學者等の評論を試みたるものあるを聞かざるは、いと口惜きことなり。さて、かくあばかれたるは、天保年中の事なりとか。あはれ高貴の人の墓ならんを、むげにあさましくもうちこぼちたるしれ人のふるまひこそうたてけれ。金環銀環、曲玉、管玉、祝部土器の類をかすめ取り。大阪にもちゆきて、多くの黄金にかへたりとぞ。當時は、神社佛閣陵墓地の寶器を盜む盜人流行したりしが、その取締法も手ぬるかりつと見ゆ。されば、神功皇后の御陵の朱をぬすみて、渡世とせる南都の筆墨商あれば、石上神宮の寶庫より、數多の神寶をぬすみ出して巨利を得たる神職もありきとぞ。

さて、大塚氏の日記に、第二の石窟を、琢磨彫鏤はどよく石を疊み積める云々と、かゝれたるは、第三の石窟とあやまられたるなり。今つくられたる時代の新古を、おほよそに定めて、順序を三等にわかちたれど、當れりや否やは、専門の博士につきて、猶推考すべし。ゆのづかりに、石棺の存せるを甲とし、晴明の祉の傍のを乙とし、文珠堂の邊なるを丙として、その構造の概

要を記してむ。

（未完）

曲亭馬琴が眼中に映ずる女性を論ず（其の九）

白松園主人

松浦佐用姫石魂録も亦、馬琴が傑作中の一なるべし。今煩を摘みて、少しく語る處あらんとす。人皇八十九代、龜山院の御時、肥前の國松浦郡に瀬川健三道孝といふ武士の浪人あり、といふより、事おこれり。健三、年四十に餘りて子なし、乃ち、其の妻と共に、松浦郡なる鏡の神社とて、佐用媛を祭れる社に、祈りて、其の示現を蒙ふり、妾玉島といふを納れて、二子を生めり。兄を松太郎、弟を浦二郎と名づけぬ。その子三歲になれる頃、健三鎌倉の執權に召されて、新地百貫を宛て行ふべき由の御教書を下されぬ。健三乃ち肥前をうち立ちて、鎌倉に赴むかんと、妾玉島をば、弟の浦二郎を添へて殘し留め、妻と兄の松太郎とを伴ひて行くことに決しぬ。其の妻、心愛憐に富みて、玉島をかなしみて、倶に具せんといへれど、色を好むに似たりとて肯せず、分れてはいつを會ふべしとも定めざれば、寡にて暮すとも、人の妻となるとも勿論勝手たるべし。屋を潤はすには足らずとも、之を遺はさんとて、所持の田園を半とらせぬ。その順風をまちて、纜を解くといふ處、例の筆つきいとうるはし。

玉島は浦二郎をかき抱きて、涙打際までおくり出で、さすが別の惜しければ、綱手にすがりて泣きにけり。かくて船子どもは、追手よしと罵りあひ、碇を引きあげ、帆を立てゝ、海原遠く漕出せば、いとゞ涙の玉島は、稚兒もさも音なく、纜を引き放され、撲地と倒れて又身を起し、澳の白帆の波間がくれに、みいずなるまで目送れば、船の内にも健三夫婦、遙に浦曲を見か

へりて、眼もうち曇る潮けぶりに、霧たち人となり行くにぞ、思ひ堪へても絶にかれて、玉島は聲をあげ、いひ殘しつることもあり、その船しばしかへしてよ、と呼べば共に浦二郎が、父と兄とが跡を追ひ、さゝやかなる手をあげて、招きつ呼びつ母と手が、まつにかひなき松浦潟に、打よする波はかへれども、歸らぬ人を思ひわぶる、數行の涙やる瀬なし、げにや悲しきは死してわかるゝ今般より、生別こそ悲しけれど、昔の人のいひけむを、わが身ひとつの秋にして、蘆が花散る浦風に、招き盡してふしまろべば……。

かくて健三夫婦、鎌倉にありて、松太郎が十歳の頃續いて身まかりぬ。健三の若黨に村澤俊平といふ者あり、幼きより仕へて肥前より從ひ來れる者なり。之のみまめやかに、主家に仕へて、松太郎をもりたてぬ。かくて松太郎元服して瀬川釆女吉次といひ、鎌倉隨一の秀才なりしが、年二十に足らずして、全じ武士なる博多彌四郎の娘秋布といふを娶りぬ。秋布の母、黄菊白菊咲きこぼれたる野にそゞろありきして、俄に產氣づき、菊の花を折り布きながら生みたる女兒なれど、秋布とは名づけぬ。秋布は、菊の異名なりとぞ。此の秋布並びなき美人なるがうへに、比類なき文學の才あり。年十六にして吉次に嫁ぎぬ。琴瑟相和するといふも僅七日にして、睦びもあへぬ二人が中には、轟然たる雷霆の音は落ち來りぬ。そを何ぞといふに、平經高鎭西に亂を起して、九州爲めに動亂す。よりて執權時宗、北條實政をもて鎭西の守護となし、瀬川釆女吉次は、年未だ若しといへども、忠義拔群にして、智勇双なき者なればとて、之れをば軍監とすべきよし定められぬ。之によりて、今夜船を出さるべければ、いそぎ乘船の用意せよと使者は來り傳へたり。吉次これを承つて、近臣外樣多かる中に、弱輩の某かゝる仰を稟くる事、身の面目なり、時を移さず用意いたすべし、と回答

するに、秋布忽ちうちしをれしが、又思ひかへしけむ。はからざる仰を稟け給ひて、いとよろこばしくこそ」口にはかくいひたりしもの丶、一世のうちにかくばかり、樂しく嬉しきことはあらじと思へりしに、忽地別離に及ぶこと、誰かは悲しとおもはざらむ。武士ほどつらき者はあらじな。釆女吉次は取る者も取りあへず、若黨俊平に家事一切を頼みおき、猶も舅の博田氏にも托して、さて妻に向ひて曰く、

火急の仰をうけ給はれば、心いそがはしくて、細しうは問ひおかず。おもひ決せざる事もあらば、俊平に相談ひて、爹公の判談に任せ給へ。云々

婦人別離の悲みは、いかばかりならむ。その心になりても見たまへ。腸はちぎる丶ばかりならむ。

秋布は涙さしぐみて、わらはが事は露ばかりも思ひやらせ給ふな。申すまでには待られど、一日〱に肌寒し、遙けき船路は苫に寢れ、鉢を枕にし給ふとも、自ら愛して身を保ち、逆臣を滅して、母御弟君にも環り會ひ、凱陣し給はんことをのみ、ねがはしく侍りとて、名殘をしさも云へばさらに、云はねばさすがに武夫の、妻とし見ねであはれなり。

身を忘れ、家を忘る丶武士の、猶豫すべきにあらねど、準備に時も移りければ、總州實政促して、とくうちた丶しむ。

か丶りける所に雜兵一人、喘々走りきつ、門内より呼はりけるは、總州は今夜月と共に、船を出して西國へ赴き給はんとて、只今由比が濱に軍兵を集合へ給へり、瀬川氏いそ遲し、とく參り給へ、といひも果てすもさの道へ走せ歸れば、吉次遙に之れを聞きて、さては實政今夜鎌倉を出で給ふなり、やは後れじとて衝と立ちあがり、日來床に飾りたる、父が紀念の黑皮縅、鎧を取つて投げかくれば、秋布はかひ〲しく、挙手たゆげき星兜を、雄手の脇よりさし出す、吉次兜の緒をしむれば、また秋布がさし出す、ほどもあら長き旅路やさ、思はず見あはす妹と脊の、別れの鐘はならで、入相の聲さやかなり。そのひまに俊平が、月毛の馬に鞍おいて、椽づら近く牽き出す、ほどもあらせず吉次はひらりと乘りて手綱かいくり、秋布無事にといふ

ぐれの、入日と共に、西の海の、出船にあはんと馳せ去れば、末におくれし馬飼戟持、腹巻に小手脛當し、跡に跟きてぞ追ふたりたる。

事の急はしきあり様を、見るが如くにかきつけてよむ人さへ心せわしき思ひをなさしむ。かゝる折にはいふべき事も云ひ果てず、聞くべき事も聞き得ざる習ひ、年若き秋布は、名殘のいとゞ惜まれて、只玉なす涙にむせぶのみなりしが、折しも月明き夜なり。龜谷の石切山は、由比が濱を眼下に見るべければ、いざや、切めては夫の船出し給ふを見んとて、女のわらは一人と、俊平にしるべさせて、彼の石切山へ走り行きぬ。妻女の愛、誰もかくこそといとあはれなりや。

既に彼の山の巓にもなりにけり。盛り久しきむら菊の、花の香はいと濃やかなれど、主從露を拂ひもあへず、由比が濱の方を見渡せば、浦ふく風も長月の、十三夜の月さやかにて、金波長く流れては、玉兎の走る事はやく、瀟濱近くうちよせては、鷓鴣の飛ぶこそ稀なり。

眼睛を定め、小手をかざして、夫の船をあれかこれかと、苦しき思ひに見やりけむ、その人の胸中萬斛の涙、量らんとするは蓋し吾人の誤りなり。

(以下次號)

盆

山岡愛操

盆とは、昔、平瓫とて、土器の平形なる、淺き鉢などを云ひつれど、今は、專ら、木材にて、圓く四角く、或は、六角にも八角にも、さま〴〵の形に製り、漆など、種々の色に塗りて、象眼もし、蒔繪もして、最麗はしく、總じて、縁あさく扁平なる器にて、物を載するに、用ふることは、人の能く知る處なれど、今も、猶、神、佛に物を供ふ

るに、用ふる器の一種に、カハラケとて、小き盆形の土器の存するは、之ぞ、平瓮の遺物ならむ。

左れど、カハラケとは、漢字にて、土器と書き、即ち、瓦笥の義にて、土燒の釉を用ゐぬ、陶器の總稱とは、知らるゝなり。

かゝる事ども、深くしらべたらんには、面白きふしも、深にあるらめど、己がものせんとするは、同じ盆とは言へど、夫とは、月鼈の差にて、實に、一年の中、僅に一度の七月十五日の、盆にぞありける。抑、盆とは、盂蘭盆の略にて、字音、ボヌと云ふや正しからんを、昔は、ボニと轉じて、用なしたるものゝ如く、古き書に、

　ぼにの頃、佛の御前に候ひて、

　ぼにする程に、なりにけり、

などゝあるを、いつしか、再轉して、ボンとぞ言ひ習ひける。

　七月十五日、ぼん持たせて、山寺に詣づる所、

　七月十五日、ぼんを奉るとて、急ぐを見給ひて、

などゝあり。

さて、盂蘭とは、佛書に傳ふる如く、彼の、天竺の波羅門教にて、能生萬物の主と稱ふる、婆羅賀磨天、すなはち、梵天王の作りたる文字とて、毋字即ち韻字をば、一切の事言、文字に因て、成就すと云ふ意より、悉曇といひ、發聲の字を、體文と云ひ、體文に添ふる韻の點畫を、摩哆と云ひて、今、天竺（印度）語てふ、所謂、梵語、解倒懸の義にて、陰暦七月十五日に行ふ、佛事の名とて、百味の飲食を盆に具へ、佛及び死者の靈に供し、倒に懸けたらん、苦患をも救ふべき、意なりとぞ禁裡公事年中行事、七月十五日の條にも、諸寺盂蘭盆、法勝寺自恣などゝ見えたり。

鶯立の句に、

　盂蘭盆の見しりはつきぬ人の露
と、曉臺は、
　草まくら故郷人の盆會かな
と、あはれ、故郷人の盆會のさまは、如何に。
今年の盆も、都は、陽暦に皆行へば、早や、過去とはなれど、田舍は、今も、陰暦にて、七月一日より、高燈籠などつるし、祖先の爲にとて、施餓鬼てふ佛事を懇に營みなどして、十三日に至れば、生靈祭とて、毎戸棚を設け、それに、蓮の葉を敷き、茄子若くは、胡瓜などに、四本の足をつけ、南蠻黍の苞の上に生ずる、紅絲を取りて尾とし、あやしげなる形を造り、なにくれと、珍しきものども打ち供へ、今宵は、死者の精靈の、來たれると、言ひ傳ふものから、夜更るまで、香を焚き燈火など獻じ、棚經とて法師の讀經を奉るを、例とすと。

　魂棚やともせば外へ草のかげ
とは、涼岱の句にて、蕪村は、猶、
　味氣なや蚊屬の裾ふむ魂祭
と云ひ、曉臺は、更に、高燈籠に目を注ぎて、
　つく〴〵と雨見上るや高燈籠
と、口吟み、成美はさらに、
　高燈籠見まじとすれば目に掛る
と。さなり。見まじとすれば、猶更に、目にかゝるもの哉。
今、茲に多少世に知られたる、俳家の近詠につきて、見れど、格堂子は、
　棚經の僧に參らす饂飩かな
と、梧月子は、
　棚經の少し話して去りにけり
と云ひ、柳家子は、
　棚經の早く參りし小僧かな

と、又さらに、

油さして臥處に入るや魂祭

と、五城子は、

魂祭るまうけや狹き臺所

と、華園子に至りては、

吾妻となるべかりしが魂祭

とは、悲みの極みなる、誰はか袖をしはらぬ。猶又、

聖靈や思ひ出されぬ母の顔

と、云ふ句に至りては、我も、十年餘さきに別れたる、故父母の顔も思ひ出されて、悲みがぎりなし。去る程に、十四日も過ぎ、十五日となれば、此ぞ盂蘭盆の當日にて、何處の寺にても、大施餓鬼會の營あれど、各々打ち集て、寺に詣で水たむけなどし、死者の冥福を祈るべきなり。孤堂子の近詠に、

盂蘭盆や百年後の今の人

と、殊にいつ見ても、月とし云へば、哀れなるものの、盆の月ほど哀れ深きはなからむ。午心の句に、

死たしと思ふ日はなし盆の月

と、有妻は、

盆の月更けて實にもと思ひけり

と、更に、華園子の近詠に至りては、

亡き母に似た人も無し盆の月

と、子規子は猶、

盆過の月明かに雨の音

など丶、あはれ、昔も今も、かはりなきは、人々の赤心にこそ。

古は、靈祭を、特に、師走晦日に行ひたる者なるに、何の御代よりか、中元の生靈祭には合さりたる。古歌に、

霊祭る年の終になりにけり
今日にやまたも逢はんとすらむ

とぞ見ゆ。

借て、十六日は、閻魔王の前に、施餓鬼を營む日にて、朝まだき、家々にては、生靈棚をこぼちて、皆、川に流し、先登第一に、閻魔王へ詣でたるものは、夏痩せぬとて、まだ東雲の空のうすらがぬ頃より、わめき立つる、迷信者こそ、最、をかしけれ。

そは、兎に角、此の祭の前後數日の間を、民間にては、盆祭とて又一年の中の暮と併べ、一年二季の期と云ひて、商家など、わけて、忙しさとかや。

附記、前號七夕の文中、所謂、棚機津女は、機織る女の略さ、したるは、所謂、機織る女は、棚機津女の略の、誤につき茲に、訂正す。

茶話うれ〳〵艸（承前）

故木崎得玄述
寄稿人　孤峰庵不美

一茶事ほど面白きものはあらず。ふつゝかに作りなせる器物も、小座敷へ持出て面白く、政宗の砧の花入ふたつにわれ、はなれたるはかすがひにて直し。耳は飛龍とておそろしきやうなれども、青磁の花入といへばやさしく聞ゆ。茶の湯は、一ふし面白くみゆるはあれど、古人などやうにおはれにけしきれはゆるはなし。曾呂理はいにしへの名ある人の中の茶のくづといひ傳へたれど、今の世の人の眼のつけ所とは違ふらめ。此の人に限てかくいひたてられたるも知りがたし。淺野長政につかへし、上田宗古はくだけたる事もやみぬらん。されど此の人も風雅あればこそ、書殘して名をとゞめぬれ。金森宗和のいひ

殘し丶、茶の道はいにしへにかはらぬやうにはあれど、其の趣意の事はしらず。近來茶事に、遊べる人をみるに、むかしの茶人の趣意は同じものにあらず。やさしくしてあはれも深くみゆ。

不羨曰く、此の一章は、本篇中の眼目にて、茶道の本分、能も論究せられしものなり。實に茶事ほど面白きものはあるべからず。ふつ丶かに作りける器と云へば、縦へば自ら造りなせる赤樂燒の茶碗も、組合によりては、珍客の招待もなしえらる丶ものなり。

政宗の碪の花入と云ふは、伊達政宗の所持砧の花入ならん。砧はかたちを云ふなり。ふたつにわれたるに繼てかすかひにて直したるは侘て、面白かるべし。

耳は飛龍とて、おそろしきやうなれども、青磁の花入といへど、艶に高尚に聞ゆ。其の手

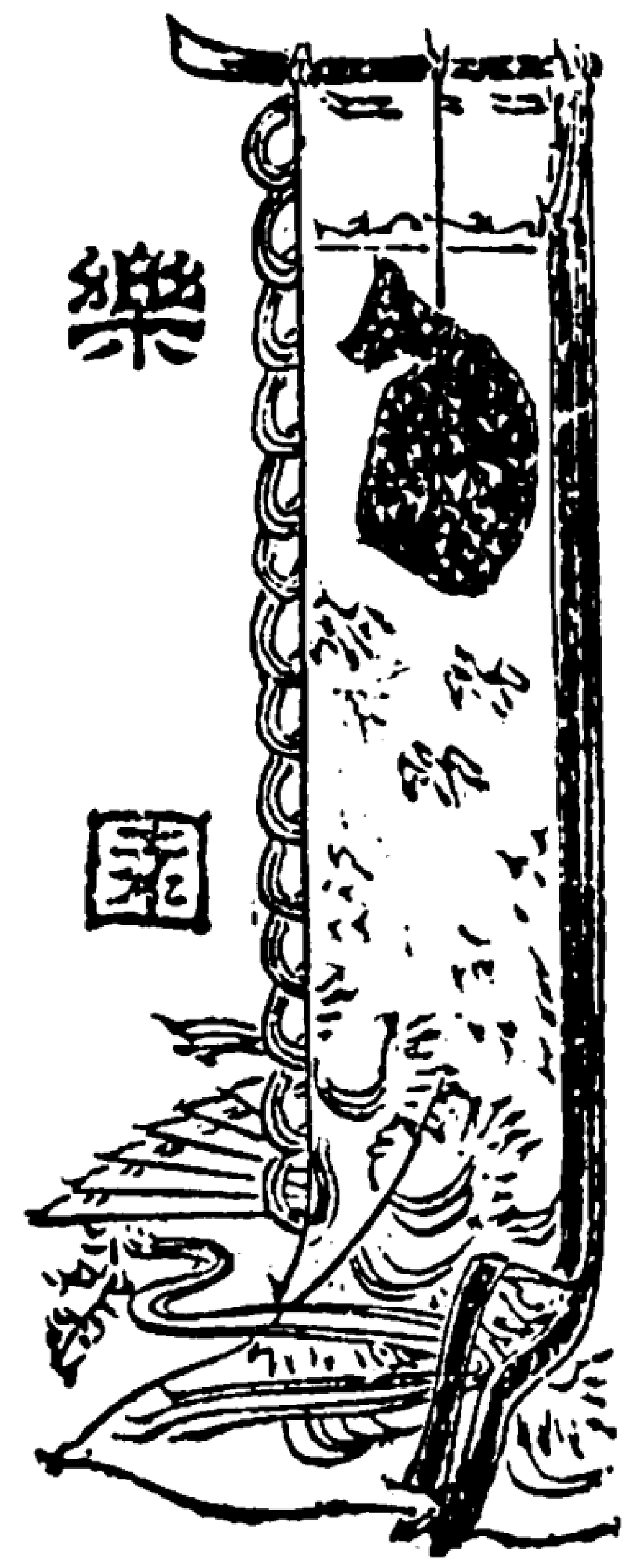
の種類又多し。天龍寺、手砧手、浮牡丹、七官、南京、形も又多し。耳の名稱も、管耳昇鯉、遊環等なり。可レ愛所持すべきものなり。

近頃の茶の湯は、一ふし面白くみゆると云ふ章は、大に古の茶の湯の仕かたを賞賛し、今の茶の湯の仕かたを戒められし文なり。昔は人の心、眞直にして、敢て不レ飾、又不レ惜、其の身其の人相當にして、こひへつらひ等の念もなく、愼で茶の道をたしなむ故、茶道の本分に適當せり。

曾呂理は、此の人豐太閤の臣下にして、頓智奇才のある人にして、利休居士の門下なれど、屑と云ふ、異名は、今始めて聞けり。され共、本文の如くなるべし。

上田宗古は藝州にのみ被行し人にて、今に流名を存す。

金森宗和は、飛弾守長近の事なり。剃髪して、宗和と云ふ。古田織部の門人なり。此の文に至りては、昔は質素節倹にして、茶に遊べる人も誠の道を行ふ。今の人は奢侈いはんかたなく、立派なる故、茶の道の大體には、背きたりと云ふべしといへるなり。



消夏雜話

夏の樂　（樂訓の一節）

水長廬

一寸こゝよんでごらんなさいな。

夏も、やう〳〵ふかくなりぬれば、木さしてしげらざるはなく、草さしてまかはざるはなく、日々に物を引きのぶるやうに見はて、ひたすらに、緑のいろふかき夏木立こそ、花にもをさ〳〵おさるまじけれ。春の花は、さころ〳〵にまきてまれなり。夏は、山も里も、ありさしある草木ごさに打はへて、皆、緑のいろなれば、春にこさなるながめなり。やちくさにうゑあつめてなづさひし前栽の草木ども、雨をおびて、各其の梢をあらはし、得がほに、心にまかせておひしげれるも、うれしさ見ゆ。むかしおぼゆる花たち花のかほれる夜は、おひかぜもいさなつかし。早苗さるころ、田家は、雨をまち得て、いそがはしくにぎはし。此のごろやり水のほさりにさぶ螢の、おさもせですだくを見れば、なく虫よりいさあはれむべし。夏山のけしき、青みわたりたるたかき峯おほそらにつらなりて雲の外にそびねたるをあくまで見るこそ、ことにすぐれて、心を快くするながめなれ。白樂天が、眼を放にして青山を見るさいへるがごさし。

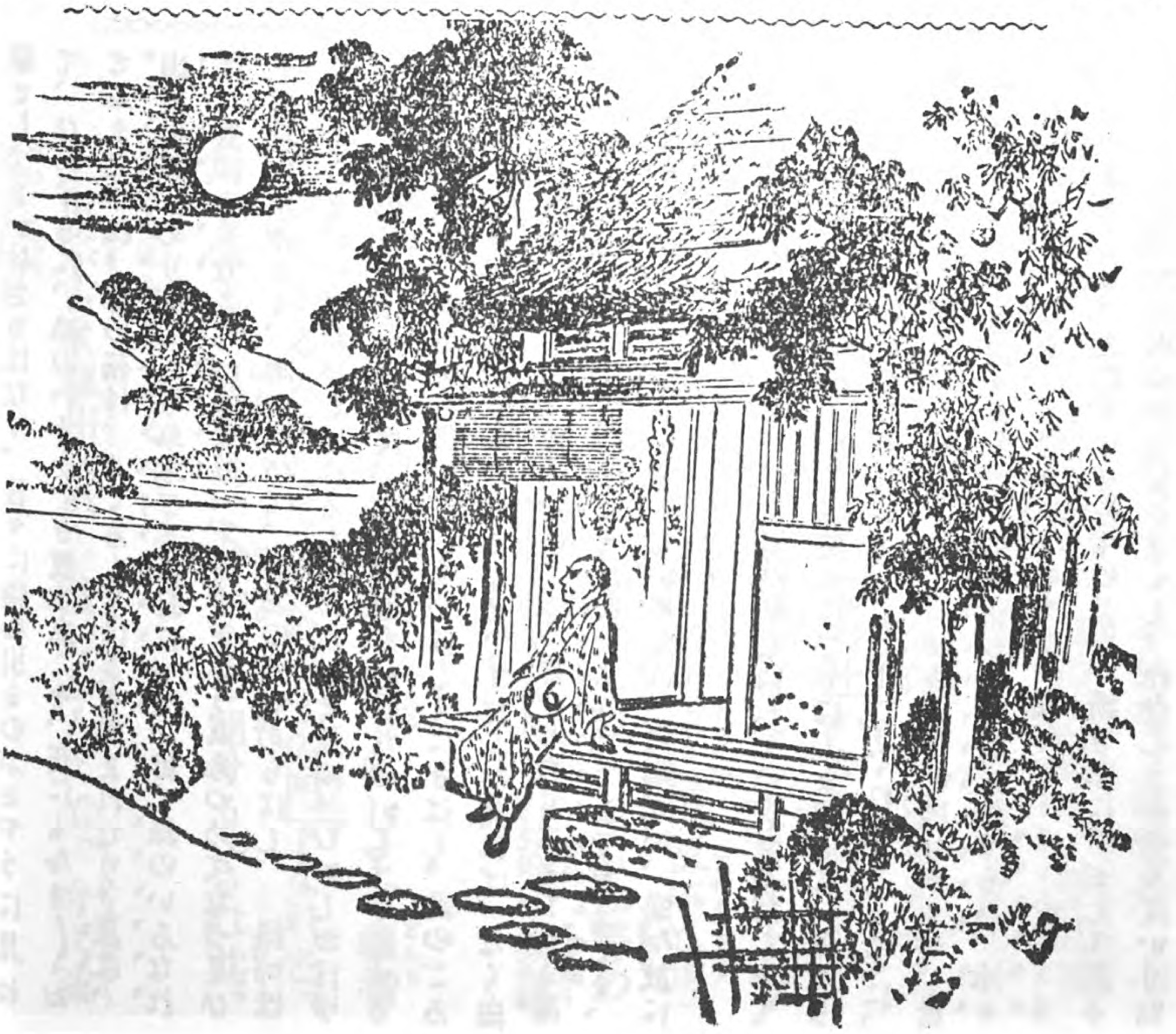
みな月の北になりぬれば、はし居の風したしく、わらふだしきて、花ならなるも心よし。池の心ふかく蓮葉のにごりにしますして、花ならて、夕かぜににほひわたるだにも、こと草にすぐれたり。ことに、花のゑみのくちびるひらけたるは、所せきまでかほりみちて、世ににたるものなくきよらなり。涼を逐ひて木陰にやすらひ、木々の下風のなつかしきに、清き泉をむすび、夏をわするゝ心地するも、いさきよし。光明らけき夜半の月を、清き水にやごして見るはさらより、やり水のおさなごきくも、いみしう心ゆくばかりな

り。日ごろへて、あつさたへがたきに、夕立のしぐれわたりて、なごりすゞしきも、いと心よし。清少納言は、夏は夜といひつれど、ゆふべは蚊と云ふ虫、人をさして、年老いては、ことさら、いみじくたへがたければ、只、このねぬる朝けの風のすゞしきこそ、きよくして心にかなひ侍りつれ。

志士は惜二日短一と傳へいへり。然れば、人皆苦二炎熱一我愛二夏日長一と柳公權がいへるも、うべなるかな。くれがたき夏の日は、ものまなび、わざをつとむる人のために、まことに愛すべし。されども、炎暑のさかんなる時は、萬國紅爐の中にある如く、すゝろに汗あゆるばかりにて、身にちからよわりて、いとたへがたければ、夏のすぎゆくは、春秋の盡くる月、冬のをはりなど、名ごりをしむにはかはりて、みな月ばらひする比になれば、心よし。只、年の中すでにすぎゆくこそ、いとをしむべけれ。

私は、此の節、毎日、此の一節を讀むで居りますが、何時讀んでも、幾度讀んでも、飽くことの無いのは、この貝原先生の樂訓でございます。ほんとに讀む度毎に、氣分が、せい〳〵致します。結搆な文章でございますことね。………

此は、文章がよく出來て居るといふよりも、貝原



先生の思想が、斯云ふ思想であるから、夫で格別にかざつた譯ではなく、此の通りにすら／＼と出來たのであらうと、私は思ひますよ。………此の文章に書いてある景色や、書てある事柄は、誰でも平生見て居るのであるけれども、此を、夫程面白く感ずる人が少ないと云ふのは、甚だ遺感な事であると、思ひます。

私は、此の文章が善く出來て居るから、どうか、斯様な文章を書く樣になりたいと思ふよりも、寧ろ、かやうに、自然を樂んで、此の天地を面白く思ふ思想を得たいものと思ふ人が多くありたいものと、つく／＼考へて居ります。心こゝにあらざれば見れども見えずとか申して、是程美しい天地の賜を受けて居りながら、これを見ても何とも思はんと云ふのは、丁度、目が明いて居つても、盲の死んだ目と同じ事である樣な者で、文章は、兎も角もであるけれども、うらやましいのは、此の貝原先生の眞樂高尙なる樂、即ち萬物、自然を樂しんで、いつも／＼面白く、一つの石も、一つの草木も限りなく面白く觀じて居られますことで、他人から見れば、意味も何にもない、水の流や、雲の行く所や蛙の鳴く聲などが、非常なる美しい面白い事であつて、此の世の中に居りながら、仙人の世界に住んでをるやうな氣持であるといふ事は、なんとうらやましい事では、ござりませんか。御同樣は、本當に盲で御座りますね。………

私が平生愛讀する本は、全く此の貝原先生の樂訓で、此の本位面白い本はないと思つて居ります。本を讀むといつても、氣が淸々として、此の世が非常に面白く、此の世界が、實に有難いといふ事を、いつも感ずるのでございます。

今日でも、文章に巧な人は、幾多もあつて、中々

美しい文章を書く人も少くござりませぬ。美しい新體詩とか、美文とか色々の書物が、澤山出來て居りますが、成程、其の言葉は如何にも巧で、文章としては立派であるけれども、其の思想の點に至りては、樂訓の眞似事程にも、至らぬかと考へます。

さて又、此の頃修身に關する色々の書籍が、世間に出來ますけれども、むしろ倫理の理屈を書いた本よりも、人の品性を高尙にし、常々起り易き鄙吝の念を打消して、精神を爽かにするには、から云ふ本に勝つたものは無いと、平生考へて居ります。

夫で、私が平生考へます所では、誰でも、毎朝、此の樂訓の本を一頁づゝ讀む事にしたら、餘程品性の修養上に力ある事であらうと思ひます。今日の社會はあまりに、物質的にばかり傾いた、人間ばかりが多くありますから、斯樣な本を讀むことを勸むるのは、餘程の功能があると思ひます。殊に、婦人だちの讀みものには、此の本が最も宜しからうと思ひます。猥雜な小說や、新體詩などよりも、幾ら宜いか知れませぬ。

螢

螢雪

螢來はたると里の子が
いと睦じくうちむれて
うたひ連れつゝ行く野邊の
檜扇咲けるいさゝ川
渡る夜風もこゑすみて
もすそを輕く吹き返し
汀のあしの葉がくれに

水鶏なくなり宵やみ夜
柳にすだく螢火の
やがてとびかふ西東
流るゝ水にかげおちて
底にも玉のしづくあり

我が方に來と乙女子が
招く團扇の
數ごとに
散るか葉ずゑの
つゆのたま
二つ三つ四つ
五つ六つ

更けゆく夜半にいさり火の
またゝく影と見ゆる迄



よるべもなみにきらめきて
みぎはに茂る夏くさの
露をよすがに聲もせで
身をのみこがす思こそ
實に鳴く虫の夫よりも
あはれ深しと思はゆれ

學のまどの
ともし火と
集めし人の
いにしへは
知るや知らずや
うなゐらの
我もくと
ほこりがに



打ちて拾ひてつゝみ來る
暗路をてらしまばゆきは
たもとに充つる嬉しさの
あまる光りと見ゆるなり

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊



深山瀧　東久世通禧

世の塵を隔てはてたるおくやまの
瀧のひゝきそさやけかり鳧

遠時鳥　鍋島直大

ほとゝきす影は見えねと月の夜の
雲間はるかにこゑそきこゆる

夏露　津輕承昭

庭にさく小百合なてし子朝の間は
露すゝしくも置わたしけり

山寺時鳥　竹屋光昭

なにとなくあはれをそへて山寺に
山ほとゝきす聲のきこゆる

夏山　長谷信成

夏くれはかすみもはれてなか空に
つねより高くみゆる富士の峯

梅雨晴　水野忠敬

さみたれはおとなく晴て吹わたる
風こゝちよきをかの松はら

蚊遣火　諏訪忠元

をり〳〵にむせる翁の聲すなり
たつる蚊遣の風にいるらん

竹燈臺のもとに鏡あり　宮地嚴夫

ともし火に照して見れはます鏡
さかきにかけし神代覺はゆ

夏雲　北郷久政

夕立のあめにやならんをつくはの
峰にひとむら雲そかゝれる

夏夜雨　坂正臣

稀に飛ふほたるの影もうちしめり
かと田のおもに小雨ふる也

旅梅雨　千葉胤明

さみたれにぬれそほちたる旅衣
只しはしたにほさん日も哉

里夕立　三輪義方

なる神のおとそきこゆるうりつくる
こま野のさとやゆふたちのふる

黄金　井上頼文

とこやみも照すこかねの光こそ
さやけき物のかしこかりけれ

日野阿新丸　蜂須賀随子

茂りあふ竹のはやしにかくれすは
あやふき橋も逃れさらまし

禁苑新樹　近衛貞子

御園生のわか葉をおのかものにして
かけに戯るゝ蝶もありけり

獨待郭公　鍋島榮子

友はみな聞つといふをほとゝぎす
ひとりむなしく待ち渡る哉

螢　前田朗子

夕月のいりたるまとのわかたけに
かけあらはれてとふ螢哉

望遠帆　南郷柳子

沖遠くかもめたつかと見えつるは
ゆきかふ舟のしら帆也けり

柳風になひけり　松平多鶴子
吹き渡るかせのまに〳〵涼しくも
とけてはむすふ糸やなき哉

團扇　保科侚子
これなくは何をたのみに水無月の
照る日盛りをわれは過さん

蓮池に水鷄たてり　鶴久子
しけからぬ蓮の若葉のつゆ見えて
涼しきゆふへくひななく也

夏草しけれり　服部磯子
山かけのあさ澤きしのよもき生は
芦の葉ましりもえいてにけり

草籠に姫百合挿せり　宮地小東洋子
優しくも牧のはらへのくさかこに
さしそへてけり姫百合の花

月前水鷄　増山喜三子
水きよきかとのせゝらぎおとふけて
すゞしき月にくひなゝく也

仝　大河内一子
まきのとをさゝてながむる月の夜に
いつこを叩く水鷄なるらん

垣夕顔　増山三雲子
を車をとめてこそみれたそかれに
ひかりすゝしきかきの夕顔

仝　諏訪晴子
われはてし賤かゝきねにしら露の
光をそへてさけるゆふかは

撫子露　南部銈子
朝夕は一しはいろのそひてけり
おく露みゆるなてしこの花

仝　土屋理子
朝かをもよきてふかなんとこ夏は

露にそ花の色もまされる

扇風　　大田原千秋子

いとせまき扇のうちにいかにして
冷しき風やたゝみこめけん

仝　　南部明子

夜もほほうちすてられすたのむ哉
扇ぎの風をいのちにはして

名所夕立　　溝口久爾子

なるかみの響のなたをくもすきて
とはさかり行ゆふ立のあめ

仝　　南部麻子

しなかとりゐなの笹原かせたちて
やかてそかゝるゆふ立の雨

瀧下螢　　安東菊子

落たきつ瀧のほとりにうは玉の
よるちる玉はほたるなりけり

雜報



●御慰問　御慰問使井上侍從武官はいにし十六日午前十時服部長崎縣知事の案内にて、露西亞領事館に至り、先づ御思召を領事に傳へ、夫より領事の案内にて露國海軍病院に趣きたり。病院長以下、正裝して、門内に迎へ、病室へ案内し、入院の將校はとこなから服裝を改め、御慰問使に對して敬禮を施こしたり。斯くて御慰問使より、將校負傷の事を聞し召され、深く御心に掛けされられ、慰問として侍從武官を差遣はさる」といふ意味の勅を傳へたるに、重傷者の外は、恭しく直立して、恩命を奉謝し、領事よりは「負傷將校の名

響此上もなく深く心底に銘し奉る」旨を奉答し病院長よりは、「負傷將校一同　陛下の御心厚きに感激し奉る　陛下が、此の如く、叡慮なやませられ玉ふことを承りては、小官に於ても、一層力を用ゐ、速に全快せしむるを期し申すべく、宜しく御執奏を願ふ」旨を奉答したり。井上武官は、更に温言を以て、負傷者を慰め、告別したるに、負傷士官より病院の寫眞に、美麗なる裝飾を施し、各自金文字にて署名したるを呈し、叡覽に供し玉はらばこよなき幸なりと申出でたりと。　皇后陛下の御慰問使、北島權掌侍は、萬里小路式部官同行、十六日午後二時、先づ領事館に赴き、領事の案內にて、病院に至、「皇后陛下の御沙汰により、遠國に於て、不幸の負傷をなしたる士官の症狀を問ひ、貴官の見込により、面會差支なくは、親しく病狀を視察したし」と告げたるに、醫官は仁慈の御思召に感激し奉る旨を奉答し、病室に案內しまつれば、患者等、深くよろこびて、敬意を表すること午前御慰問の時の如くして、權掌侍より「一日も早く全快舊に復せんことを希望せらるゝ」意味の御沙汰を傳へ、尋て恩賜の團扇卷煙草を、各自に賜りしに、一同感激の樣子著しく病院長より、一同を代表して、

露國海軍病院ありて以來、かゝる光榮を荷ひたるは、空前の事にして、本病院の歷史に於て、永久紀念すべきの光榮なり元來傷病者は、普通人の好意を以て、訪問するに對しても、大に其神心を快くするものなるに、今回の如く、　兩陛下の御慰問を忝くするに於ては、一同の感佩は、勿論負傷者にて於ても、必ず、大に全快の期を速にするの洪恩に浴すべし。謹んで、感謝の意を表し奉る。此の段御執奏を請ふ。

との意味を奉答し。別室にて、シャンパンの饗應あり。其節御慰問使に花束一個を呈し。御覽に供せられむことを乞ひたり。其の花束には、三旒の絹布を垂れ、一は海軍病院の全圖を寫し、一は聯

合軍進撃の狀を寫したるが、兩樣とも負傷士官の一人が數日前より丹精を凝して、畫きたるものなりと。

●佐世保病院　井上侍從武官は、十七日午前十一時佐世保に着し、鎭守府の波止場にて、鮫島司令長官以下、將校高等官民間有志の出迎を受け、病院に至り、石黒病院長の案内にて病室に入り、負傷者に對し「今回の負傷に付ては、陛下、痛く御心に掛けさせ玉ひ御慰問として、自分を差遣はされたる」旨を傳へたるに一同感泣して、聖恩を奉謝したりと。侍從武官は、武光少尉の病床に就きて、戰況、及、創傷の經過を尋ね、石黒院長よりは、一同の經過を詳細に説明したる書類を呈し、一同は、又御慰問使の注意行屆かぬ隈なきに感激したりとぞ。

●在清本邦婦人　いにし六月十七日を以て、天津の戰爭開始せらるゝや、天津在留の本邦婦人の一時英國工務廠の穴藏に潛みて、其の危難を避けたりしが、戰爭は日を重ねて、更に已むときなく砲聲轟ろき銃音たゆる暇もなければ、流石婦人は、大に決心する所あり。いかにたをやめなればとて、かゝる穴藏にのみ潛みてやまんやとて、自から進んで街衢に出で我兵士等の奮鬪傷を負へるものに對して、滿腹の熱誠と愛情とを以て甲斐甲斐しくも、看護の任に當り、不熟の看護婦等は到底及ばざる程の手腕を揮ひつゝあり。若し天津いよ／＼危急にして、他に逃るゝの途無き時は、一口の匕首、我が呼吸を絶ちて、敢て清國人等の虐殺に逢はざらんとの決心を爲しつゝありといふ。又た、今に倘は消息知れざる北京にありては、在留本邦人は、男子より婦人多し。此の婦人等も、亦た同一樣の決心を爲し居れりとは、日本

婦人の健氣なる、以て見るべし。

●女丈夫　天津にこもれる、大和女のこゝろがけは、まへの如くなりしに、こゝにひとしほ秀しにほひゆかし女郎花こそあれ。そもそは誰ぞ。天津領事鄭永昌氏の婦人はま子なり。はま子は、日本郵船會社芝罘支店長、竹野虎雄氏の妹にて、今年三十五、いにし年鄭氏の後妻となれり。

其の氣質　はま子は鄭氏の夫人となりしより良人を助けて三人の先妻子を可愛がり、召使をも目をかけて、使ふに、子供等も能くなづき、召使等も命を惜まず仕へ居たり。鄭氏の令息は、三人の中二人は女子にて、十才と四つ、一人は男子にて十になれるが、同地は、日本語の學校といふものなく、兒童の教育に不便なれば、昨年一月鄭氏は、年上の二人を、東京四谷愛住町なる母堂の宅へやりて、麻布小學校へ入らしめ、殘の一人には、乳母をつけて手許にて育て居れり。

はま子は天性慈善の心深く、居留地にて事あれは自ら先にたつて周旋し、各國の婦人とも、廣く往來して、交際社會にても、非常に尊敬されしが、其家丁なる庭丁といふ支那人は、異國人ながらも、深く其德を慕ひて、夫人の仰には、何事も逆はず今回の事變起りてより、總ての支那人は、皆逃げ去るに、此者一人止りて、まめ〳〵しく立働けり。

はま子は今回の事變起りて、土匪が攻め寄せしより、深くも覺悟を定め、自ら先にたつて、女中を指圖し負傷人の看護兵器の持ち運び、抔、凡て男子を助けて彼此と力を盡すにぞ、女中等も、其差圖に從うて、必死と立働くにぞ、男子の人々も之に力を得て、心強く防戰ひ居るとなん。

はま子が、去る六日、同地を差出せし書簡、同じき十四日、四谷の母堂の許に着したるが、其中に

は、良人は、此頃忙しくて筆を執る抔の事出來ず、自分は、已に覺悟を極めて、人々と生死を共にする積なるが、御許に預けし二人の兒童は、何卒及ぶ限り養育して、成人の後、さるべき者とならしめ玉へと記し、其後へ、兄虎雄事、此度歸國したれば、是より萬事を聞き取り下されとありし由にて、決心の程は、筆の跡にも表はれ居たるが戰爭の模樣抔については、少しも書きてなかりしとか。因にいふ虎雄氏は、去る九日肥後丸にて、太沽を發し、十二日夜、長崎に着したるよしなり。

●武久大尉未亡人　去る九日天津にて花々しき戰死を遂げたる歩兵第十一聯隊武久大尉の履歷等をくはしくかゝげまほしけれども所せかれは、畧し。たゞ其の未亡人の事を聞きつれば、こゝにかゝげぬれば大尉が上をも想像したまへよ。

大尉が未亡人は、今廣嶋市鐵砲町に住み、名は富江といひ、大尉との中に、當年五歲の女子と二歲の男子とあり、今年二十三、其父はもと、紀州和歌山藩士にして、太田行則といひ、後備陸軍少佐なり。未亡人は、今回、大尉が遠征に赴きしより、二人の子供を教養して、良夫の武運を祈り居りしに、去る十三日、大尉逝きぬとの悲報に接したるも、電報なれば意味充分に判らず。されど、歸らぬ人となりしことを知りたれど、已に覺悟を定めたりと。

夫人は、心竊に思ふやう、良人は、常に胃を患ひ、先年出京の際にも、石塚軍醫の診斷を受けて、歸りての後も、服藥を廢せざりしに、忽ち出師命の下りて、遠征の途に上りしことなれば、或ひは飮食物抔の爲に、劇症の胃患を發し死したるにてはなきかと、案せしに、其後間もなく、新聞紙の

名譽の戰死なりしことを報せしかば、初めて憂き中にも、其の心を慰むることを得たりと。されど、夜半の寐覺めに、良人の事を思ひ出づる時は、涙雨のやうに湧き出で丶、座に夜具の襟を霑す事もありとか。良人を思ふ至情の程、實に左こそと推せらる。

大尉は、渡淸後、去月二十三日、太沽より一片の書信を寄せしのみにて、其の後更に音信なかりしが、今より思へば、是ぞ渡淸後、最初の手紙にて、又最後の手紙なりしと。其中には、大沽に着きし事を知らする序に、飮用水の缺乏の事を報し、尙生きて還らぬ覺悟の程を告げて、女子の敎育は和女の心に任するも、太郎は、必ず我志を繼がせて、軍人となさせよと、懇に後事を囑しありしと。

大尉の訃音達するや、夫人は父行則氏の伊豫松山に居るを訪ひ、同伴して十六日、廣嶋市に歸り諸事を斡旋して、後を片付けたるが、夫人は哀みの中に、雄々しき處ありて、流石に庭の敎の程思はれしとぞ。

●孝子　孝心ふかく、もろびとの鑑となりぬとて、曩に勅定の綠綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰されし、富山縣越中國、下新川郡、石田村中村吉之丞の人と爲りを聞くに。天資溫順にして、品行端正、嘗て人と爭はず。又克く父母に事へて、未だ一たびも疾言遽色せず。父母命ずるあれど、直ちに膝下に赴き、顏を和らげ氣を下し、愼みて、其の敎へを聽くを常とせり、父某、明治十二年二月六十七歲の高歲を以て、肺患に罹るや、吉之丞は、職業とせる大工の傍ら、親から湯藥を煎じて父に進め、百方看護に手を盡し、尙且つ自から嗜む處の酒、煙草を禁じて、産神に病氣平癒を祈願

する百日間、一日も參詣を缺きし事なし。又母某は、老耄して、同十二年四月より、座作進退自由ならざりしかば、其の躓き仆れんを慮かり、自から脊負て歩行を扶け、又廿七八年日清戰爭の時は、己れ目に文字なきより、村役場、若くは新聞購讀者の許に往きて、戰爭の模樣を聞き歸りて、其を母親に語り聞かせ、或時は、戰爭繪を買ひ求めて、母親に見せ其の喜ばしき顔を見るを、此上なき樂みとせり。同廿九年、母の病むや、晝夜帶を解かずして、看護に努む。吉之丞、恒に孝道を重んじ、村民集會の席には往きて、孝行の物語を爲す。若し村内に父子兄弟の口論するあれば、必ず往きて孝悌の道を說き、次ぐに涙を以てす。左れば聽く者も、其の至誠に感じて、遂に緝睦するに至ると云ふ。

●女學校

△成女學校課外講義は例によりていにし八日校内に開かれたり。講師は、後藤牧太氏、父音母音といふ題にて、音は物の振動に因て起るといふ事より說き初め、音韻學の大要を極めて、平易に講じ了りたりと△京都同志社女學校は、過日同社公會堂にて、第二十三學年卒業式を擧行したり、卒業生氏

專門部文學科　秋山寅子

普通科　八藤富子、西澤愛子、小川恭子、古川信子、（以上全科）岡田長女子、辻岡萬子、井口安子、（以上邦語科）

△名古屋市東片端町清流女學校生徒の組織せる清流文學會は、去る六日午後七時より同校にて開く、來賓は濱野視學官、甫守高等女學校長、及び、教員百餘名にて、頗る盛會なりきと△愛媛縣師範學校女子部生徒は、過日溫泉郡、高濱に運動會を催し、海岸にて魚貝海草類の採取をなしたりと△鳥取高等女學校にては、近來生徒の咽喉カタルを病むもの多きを以て、其原因を調査せしに、學校醫吉田久治氏は、生徒の帶上の餘り、大きく高くして、椅子にかゝる時、背部を厭迫し、呼吸器に障害を與ふるためなりと斷ぜしを以て、各生徒に訓諭し、成るべく帶上を小さくせしむる事にせりと△奈良縣高等女學校は、去月初めて、割烹科を置く、教師は、赤坂青山手藝學校割烹科修業の菅沼やす子氏にて、赤堀峯吉氏の紹介なりと△獨逸伯林大學にては、女學生の入學を園用的拘能を授けんとて女子育成所といふを設けたる由。

●華族女學校卒業證書授與式

は、いにし十三

日、同校にておこなはれたり、當日は、皇后陛下臨御あらせられ、依仁親王載仁親王博恭王各妃殿下も御臨場あらせれ、來賓は、田中宮內大臣樺山文部大臣以下五十餘名にして、式後立食を、饗し、正午十二時退散せり。式の次第、並に卒業生徒氏名および校長の式辭左の如し。

午前九時三十分、皇后陛下御臨校諸職員生徒門外に奉迎（此時奏樂）次御休憩校長第十五學年生徒成績表を奉獻す同十時生徒式場著席次參觀人式場著席次來賓式場著席次　皇后陛下式場臨御（此時奏樂）次生徒唱歌（唱歌皇后陛下御製金剛石水は器（式場一同起立）生徒全員）次校長全科卒業生に證書を授與す次中小學各級及第生徒總代に證書を授與す（此間奏樂）次校長式辭（校員生徒起立）次全科卒業生總代謝辭（卒業生起立）次生徒洋琴箏唱歌「ピアノ」連彈ツーヴェルチツル、シューベル、オベール、エリザベート」生徒二人、箏姬小松生徒二人、唱歌秋の宮居生徒全員）次皇后陛下入御（此時奏樂）次來賓復席次參觀人退場次生徒退場次　皇后陛下還御諸職員生徒門內に奉送（此間）奏樂次來賓食堂著席

全科

石橋登美　伊東美世子

岡田みき　河村すみ　薄井せん

細川淑子　德川國子　佐々木孝子　關花子　閔秀子　鈴木りう

別科

明直枝　佐野貞子　德大寺治子　德川芳子　芳川富子

細川華族女學校長式辭

謹みて按するに、明治四年十月二十二日、我か　天皇陛下華族の戶主を召して、優渥なる勅諭を宣し給へり、其の中に曰へることあり、我國女學の制未た立たさるを以て、婦女多くは、事理を解せす、殊に幼童の成立は、母氏の教導に關し、實に切緊の事なれは、今海外に趣くもの、妻女、或は姊妹を挈て、同行する、固より可なることにて、外國所在女教の素あるを曉り、育兒の法をも知るに足るへしと、此れ陛下の女子教育に軫念し給へる端緒にして、其の翌年學制を頒布し、男女就學の制を定め給へり、爾來文運隆盛、女教竝み庠序の設遍からさる所なし三十年來の結果、此の如し、或は以て、大御心を安し奉るに足らん、只恐くは、各學校生徒の卒業したる者、悉く良妻となり、賢母となりて、以て學校教育の、果して完全なることを證明することを得さるものあらんことを、本校は　皇后陛下の直轄し給へる唯一の女學校なり、之れか生徒たる者、卒業の後倘智を研き德を修むることを怠らすして、以て　兩陛下の期望し給へる所に副ひ、由りて以て大御心を安し、奉らさるへからす、諸氏旃を勉めよ。

●婦人會　宮城婦人會は、去十四日、午後二時より、宮城縣高等女學校にて、常集會を開きたるが、當日は同縣書記官、平岡定太郎、及ひ、米國文學士鈴木懸太郎氏の講話あり、了つて別室に於て、岩井吳服店の寄附にかゝる、瀬茶の饗應あり、餘興として、薙刀鎖鎌音樂等の催もありきと△京都大谷本願寺の婦人法話會は、去る十日例會を開き、韓國語學校長奥村五百枝子氏の講話ありたり△印度大飢饉救濟音樂會は、東洋青年會の發起にて、鍋島侯爵夫人以下、貴紳夫人令孃の贊成を得、去る十四日、上野公園音樂學校に開かれたり△伊豫松山市の女教員二三十名相會して、教授上の事を研究する事としいにし七日第一回松山高等小學校に開く、△相愛婦人會は、北海道小樽港の婦人によりて組織せらる・毎月例會を開きて、有益なる講話演説ある事なるが、熱心同會のために盡力したりし、堀川學校教員、佐久間慶太郎氏の、この程死去せしより、其の紀念のため、同校へ時計一個大日本地圖一軸を寄附せりと△仙臺女學校にては、去月末第十六回文藝會を開きたり。同會は生徒の文藝を奨勵する目的にて、設けられたるにて、當日は點茶、作文朗讀、習字、圖畫、漢文朗讀、和文暗誦、記事文、裁縫、唱歌、佛文朗讀等あり、餘興には、ヲルガン合奏彈琴等ありきと△去十六日、仙臺市片平町神宮奉齋會本部内に婦人講話會を開けり、初席は長我曾部一等軍醫にて、婦人衛生に就き、姙婦の心得と云題にて、姙娠中の心掛にて、生るゝ兒の強弱に關係する理由を説明し、後席には、清水本部長四方拜元始祭の二節に就き、日本國體の本源より、日本人の覺悟に就きて、演説ありきと△瓜生四恩會は、去る二十日例會を小石川區大塚辻町發育院内にて開き、兼れて清國戰死者の法會を營みたりと△女子同情會は、過日の例會に於て左の件を決議したりと、一、本會員は、營業の關係及、特別場合を除くの外、年始、歳暮中元暑寒、見舞等に於ける物品の贈與を廢する事、二、會員相互の訪問は、質素の服裝をする事▲山梨婦人會は、去る八日相生教場にて、例會を開き、高橋病院長の看護章、心得平山眼科醫のトラホームについて注意等、有益なる講話ありきと▲日本赤十字社篤志看護婦人會は毎週、金曜、午前八時より十時まで集會、看護の練習をなし、總會の節の演習に加はる事となりし由▲新潟婦人慈善會は、去る七八の兩日、西堀通六番町、長善寺にて慈善市を開きたり、當日の販賣店は吳服、小間物、洋物、玩具、煙草、菓子、ラム子其他新潟女子工藝學校生徒の製作品等にて、收入は、諸般の慈善事業に寄附する筈。▲下總國香取郡佐原婦人會は、創立一週年の祝意をかねて、去月末、臨時總會を開きぬ、千葉縣高等女學校教授、小池民次氏の演説（婦女の心得、婦女の地位婦女の特性等につき三間餘）あり來賓は、唐橋判事、江口郡長、海鹽佐原中學校長等、十數名、尙同會現在會員は、七十六名なりと▲上野國多野郡鬼石町なる女子蠶業勞働會社は、此度、其組織を改めて株式とし、名稱をも、女子勞働鬼石社とかへて、益す發達を圖ると共に、女子の職業を供給する筈なりと▲宮城縣三陸海嘯慈善婦人會

は、近來加盟を申込むもの頗る多く、其同向院、即ち六角榮螺堂は、松島に建立する筈にて、費額は、二萬五千圓の豫算なるが、尙、其附帶事業として、育兒院をも設立せん計畫ありと、△鳥取婦人會は、會員五十餘名あり、毎月一回集會して、學術、衛生、道德等の講話を開き、會員一同市婦人の女德を修めしむる事に勉むるの由なるが、鳥取高等女學校の、早く設置せられしも、この會の盡力與りて大なりと。

●美擧　中山信安氏の妻幸子は、豫々婦人共立育兒會の幹事となりて、貢献する處少なからず。存生中、是非同會附屬の病院を設立し得るまでに、其の事業を發達せしめたしと言ひ居られしが、先つ頃夫信安氏の逝去するや、葬儀を質素にして、諸家の贈りたる香奠五百圓を取纏め、之を其の病院設立費の中に寄附したとぞ。

●よきこゝろがけ　難波新地五番町、十四番屋敷、中山お秀(三十)は、子は死に果て、孫のお半(十三)虎太郎(十三)の二人を、老の伴侶として、近所の娘を集め、三味線師匠に多からぬ禮を一家三人の糊口に充てしかも、孫の敎育は貧しき家の育ちと言はれぬやう、あつぱれなる人となりなんは、私への何よりの孝行、名僧の讀む經よりは、死後の成佛、此上無しと、朝暮の敎訓怠らず。しかも、其の日の費を節して、少しづゝの貯蓄を爲したる金の中より、此の度の淸國事件出陣の海軍兵に謝せんとの志より、海軍軍事費へ二百圓寄附致したしとて、南區役所へ願出で、役所にては、其の志を賞し、手續中なりといふ。富者の萬燈貧者の一燈といふことあれど、これは貧者の萬燈といふべきか。

●外國婦人の寄附募集　本邦駐剳の英米兩公使夫人は、北淸事件に付き、難を本邦に避けたるものを憐れまん爲めに、寄附金を募集せんとて、兩夫人發起となり色々手つゝき中なりと。

●玩具と敎育

前號の誌上、玩具と衛生と題し、時事新報より轉錄するところありしが、同記事に對し、高島平三郎氏のものせるところなりとて、左の、批評を、同紙に揭載せられたれば、前に因みて、又、此に轉錄することゝなしぬ。

小供に玩具のなくて叶はぬは、大人に日用の器具のなくてならぬと同じ事で、若し之を與へなければ、自分で土や木の葉などに天然物も玩具にする之がその天性であるとすれば何うしても玆に玩具を與ふるといふ必要が生じて來る、何故必要かと云ふに、小供はその玩具を弄んで居る中に、自然に物を工風することや、搆造すること等の力を開發するのでありますから、苟も家庭教育に從ふ者は、成るべく小供の天性を導きその發達を助くる通常な玩具を撰んで、之を小供に授ければなりません、扨此に示された玩具は、果して此目的に適つて居るか何うか、是少々述べて見やうと思ふ。

第一　太皷

元來太皷は耳覺を養ふに適したるのである普通世間の親達は一向に此耳に重きを置て居ない樣子ですが人智の開發は耳から這入つたものに依るが中々多い、即ち聽き覺の力によることが多い、而して此玩具に其耳を習練するに必要のもので小供に取つて實に無くてならぬものであります、能く小學校などで見受る事がありますが、大勢の小供の中には例も茫然として白痴では無いかと思はれるやうなのがあるものです、不注意な教師は之を性來のとのやうに思つて、別に理由を調べずに仕舞ふやうですが、是れは外でもない耳覺の惡るい故で、言ひ換へれば感覺が鈍いからの事であります、斯樣な次第であるから、母親なり保姆教師なりは、常に耳覺の上に注意し、耳を習練させる爲めには、必らず此太皷を授けるが好いです、外に鳴り物もありませうが、太皷の音は太く鈍く、小供の腦神經を柔かに刺戟するのだから、玩具として最も適當のもの、又使用時限の最も永いものであります。

第二　でん〱太皷

是は聽覺を一緒に習練することの出來る玩具です、何故なれば振り廻すとカラ〱音響を發する故に、小供をして其の音のする方向と距離とを判斷させることに用ひて最も宜しいので、其結果小供は外物の有る處を正確に知ることを得る習慣を養ふことになるから例ば小供に對して玩具を使用するは一所で用ゐないで、方向距離種々に變へ、カラ〱鳴らすのが必要であります、即ち此玩具は滿二年迄の小供に適當のものと思ふ。

第三　槌

第四　眼鏡

第三の槌は振ると矢張り音を發するこれで主として聽覺を感發せしめ、又觸覺の習慣を養ふに適當です、即ち之を手に握む時は、眼ないでも何物を持つて居るかを覺ることが小供に出來ます、又第四は柄を以て振れば廻轉するやうに出來て居ります

から、是は視覺の習練に適して居る、何れも二年前後の小供の玩具です。

第五　鯛

鯛の形を模造したもので、一は豆大鼓になり、一は釣り竿に付したるものです、玆に注意すべきは以上第一より第四迄の玩具は、全然人工の形狀であるのに此第五は天然物を形取つたものであるといふことです、總て玩具は人工と天工と此二物體を適當に配合して小供に與ふるの必要で、例ば山間に住で居る小供には海中に棲む鯛の形狀を示し、教育上智識を開發させるのが誠に有益なことであります、それで鈴の附いて居る方は、聽覺の上からして小供の注意を鯛の形に誘ひ、又釣竿の附いて居る方は、泉水或は園の水に浮べて鯛の活動する實際の有樣を見せ魚の常に水中に棲むものであるといふことを覺らせる、此等の玩具は滿二年から三四年迄の小供に適當であります。

第六　達摩

蓋を開ける達摩が出る、又開けると出ると云ふ趣向に出來て居る、是は小供の好奇心を喜ばせるやうに尤も宜しい、但し出るものも〳〵達摩では面白くない、今少し工風して小供の好奇心を利用したならば、頗る利益の多い玩具となるでせう、例ば果實の梅なり、桃なりと形取つて、其外皮から次第に剝くと最後に種が出ると云ふ趣向見せたならば、一層興味を添へ教育上にも適當して、開智上利益を與へることであらうと思ふ、此玩具は滿六年から四年前後のものに適當して居ります、

●某女の義捐金　前號に印度國の飢饉のあはれなる有樣のべていさゝか、これが、奬勵をなせしに、速に同情を表せらるゝ人ありて、過日左のごとき文をよせられたり。

(前略)さて私事、此度新聞雜誌にて、印度大飢饉の事承知致し候處、誠にあはれなる樣、他國の人にても、新聞雜誌を讀みて涙こぼれ候程なるに、まして同鄕人なる、ロマカントナイ氏は、如何に悲しき事ならんと、すゐしまゐらせ候。金一圓、誠に、少許には候へども、義捐金の内に御加へ下され度候。私事もいまだ親がゝりの身にて、思ふ樣に義捐も致かね候へども、我身に及ぶかぎりは、義損致し度と存居候。されば、誠に御手數樣ながら御願申上候。あら〳〵かしこ

七月廿二日　某女

國光社　御中

金員は速に每日新聞社に託したりしに、いにし廿六日の同社紙上に、芝區某女として記載せられたり。

●福嶋少將の軍歌　福島少將は六月二十六日臨

時北清派遣隊(第一回)第五師團第十一聯隊の兵士を率ゐて、威海丸に乘込み、征途に上られしが、かつは同船の甲板上にて、兵士の志氣を鼓舞し、かつは聯合軍に加はる心得の爲めにとて、自ら右の如く軍歌を作りて與へられたり

明治三十三の歳、夏の初の月の夜に、黑雲西に表れて、事やあらなん支那の空、忽ち告ぐる警報に、北清稱號義和團匪、初は義民と稱しつゝ、尊王攘夷の旗を立て、耶蘇教堂を燒拂ひ、外國人を打殺し、猛り狂うて北京の城門近く寄せ來る、支那の政府の頑固黨、反て之を愉快とし、鎭撫の沙汰を取らぬ故、兇民益々はびこりて、義民は變じて賊となり、亂暴狼藉極れり、爰に至て列國の、軍艦太沽に集りて、水兵俄に上陸し。公使の護衛居留地の、保護怠りなかりけり、去れど淸廷手を下さず、官兵加擔の樣子なり、鐵道電信破壞され、京津連絡斷絶し、公使居留人民の、危險は日々に迫り行く、如何で猶豫のなるべきか、列國益々兵を増し、變に應ずる準備せり、我第一の陸兵は、實に臨時の派遣隊、名譽を荷ひ歡聲の、中に宇品を解纜し、渤海差して踊り行く、今や彼の地を見渡せば、英吉利佛蘭西獨逸國、露西亞伊太利墺太利亞米利加加へて七ヶ國、何れ劣らぬ丈夫が、精兵競ふ晴の場所、其數假令少なくも、今陸軍の代表者、我國固有の精鋭を、世界に示す時なるぞ、名譽極り貴重し、共に陣地にある折は、國に歐亞の別あれど、同じく守る時なれは、禮儀は人の華なるぞ、つゝしみ讓り堪へ忍び、些々たることを爭うて、紛を釀すことなかれ、大事を誤ることなかれ、共に戰地にある時は、只一筋に國の爲め、此處ぞ命の捨處、此處ぞ名譽の揭げ處、勇進奮鬪第一と、敵の陣地を蹴破りて、神州男子の功を、五大洲中に輝かせ天皇陛下の御威德を、天地に響かし奉れ、

◎日本赤十字社看護婦願書および履歷書式

準備看護婦生徒願

某 儀

日本赤十字社準備看護婦生徒志願候間試驗ノ上御採用被下度別紙履歷書相添此段相願候也

年　月　日

何府縣華士族平民
戸主某何女姉妹
本籍何府縣郡市町村番地
現住何府縣郡市町村番地(寄留)
何　某　印
何年月日生

前書之者性質淳良品行方正ニシテ曾テ不正ノ行爲ナキヲ保證候也

東京府郡市町村番地　(寄留)
何府縣華士族平民
保證人　何　某　印

日本赤十字社長　爵何　某殿

履歴書

何府縣華士族平民
何某
何年月日生

一普通學（裁縫等）研修ノ始終年月日及學校（又ハ教師）名
一外國語學ノ同斷
一專門學ノ同斷
一公務從事ノ始終年月日及俸給報酬等ノ額
一賞罰ノ要領
一日本赤十字社救護員從事ノ職名及始終年月日並ニ從務ノ梗概

右之通相違無之候也

年月日　　何某印

●米國婦人の職業　「大日本」かゝげたる統計表左の如し

新聞記者	八八八人	醫師	四、五五五人
美術家	一〇、八一〇	建築師	二三
齒科醫	三三七	技師	二〇六
教師	一、二三五	獸醫	二
機關師及火夫	四七	大工	一〇一
獵師	二一	馬丁	二四
寺小使	三〇	滊車機關師及火夫	四
煉瓦及石工	四二	樵夫	二三
車匠	一	屠殺人	一二九
御者	二三七	水先案内者	一
請負人	八三	鍛冶師	五九
糴賣人	二	堀石者	三〇
裁縫師	六八、一五五	石炭採堀者	二一九
旅館番頭	五三一五		

●諸國鷄小兒を殺す　大和國山邊郡福住村溝口平太郎方にては、農業の忙しき折からとて、生後二箇月ばかりになる女兒を、箱の中に入れ、座敷に置きて野仕事に出でたる不在中、同家に飼ひ置ける一羽の諸國鷄入り來り、羽二重の如き頰の肉を啄き咬ひ、遂に眼球をも抉り出したる爲め、幼兒は、忽ち死亡したり。其後へ歸りたる平太郎夫婦は、狂氣の如く泣き悲み醫師を招きて、治療を加へたれど、其効無かりき。鷄は、活きながら皮を剝ぎて、我兒の爲に仇

を報いたりとぞ。子を持ちたる人の油斷ほど、恐ろしきは無し。

●北京の女風俗　所變れば品變る、北京婦人の風俗こそ面白けれ。同地にては、女兒は生れて三日目に父親が名を命け、十四五歳迄は、此の乳名を呼ぶが、十五六以上になれば外にまた名をつけて夫よりは此の名を云はず、唯姉妹幾人もあれば姉を大姑娘（長女といふこと）妹を二姑娘（次女）其妹を三姑娘（三女）と順に呼ぶもの丶由。總じて支那にては　小間使、妾、或は藝妓抔迄皆夫々の名がありて、其の名をいふ故、これらの下等の女と別つため良家のお孃さん方は、十五六歳以上になれど其の名を呼ばぬ譯なりと。扨夫より人の妻となりて、結婚が濟めば其の夫が官吏なれば夫人を大々、商人なれば、奶々といひ、其の舅姑は長男の媳を大媳婦、次男のを二媳婦といふなりとぞ。頭髮は十五六歳迄は、男子のと同じけれども、顏に白粉を施け、耳朶に環を下げ、衣服、及び、服裝の色模樣抔が、男子のと違へば、是にて男女の區別が分るよし、夫より十五六歳以上になれば、上頭といつて、始めて髮を結ふ。又上流の婦人は容易に内に閉ぢ籠りて、外へ出ることなく若し外へ出ることあれば、必ず馬車か、轎に乘りて決して街上を歩くことなしと。往々驢に乘りて行く婦人があれども、夫は皆田舍の婦人にて、北京市中の者にてはなく、又此頃馬車が出來て是に乘るものあれども、夫も市中の婦人にてなき由、纏足は人の知る如く支那婦人の弊害なるが、上流の夫人はこれがために、意ふやうに歩くことならず、室内にてさへ六づかしとか。されば、臺灣及び南清地方の婦人が、天然足會に熱心するも無理ならぬことゝいふべし。

●二百里外の演說を傍聽す　五月二十四日米國紐育府に、一倶樂部の年會ありし時、上院議員デピユー氏は、此處より二百四十哩を距つる華盛頓の自宅に在りて、此會の爲に、食後の長演說をなすを以て會長を滿足せしめたりと云ふのみにては實に不思議の事と信を置き難きが、其方法を聞けば、成程、尤も器械工業の驚くべき進歩に感心せざるは無けん。即ちこの演說は、長距離電話器を用ゐたるものにして、聽衆は、銘々小さき受話器を耳に、附して一語一句、頗る明瞭に聞き取るとを得たりといふ。かゝる工夫にて、演說を遠地に達せしむるとは、將來大に流行すべく、デモクラツト黨の大統領々袖者、ブライアン氏は來るべき選擧競爭にて、大に此方法を使用せんと云へり。

●日本女學校　入學志願者非常に多かりし由にて來廿五日に入學試驗を施行し、九月一日より、授業を開始する筈なりといふ。

女鑑歌文月次兼題

八月廿日
- 歌　船納涼
- 文　歸省中同窓の友におくる文

右八月八日〆切

九月五日
- 歌　旅立つ人をおくる
- 文　わが地のうるはしき風俗

右八月廿三日〆切



地方ニ於ケル婦人會ノ規則

有馬亮吉

地方に於ける婦人會の組織

本會設立ノ主旨

本會ハ小學校卒業以上ノ女子及ヒ一家ノ主婦タル人々ノ爲メニ德風ヲ奬メ日常必須ノ智識ヲ得セシムルヲ以テ目的トス我國ガ歐米諸國ト交ハリテ以來文物ノ進步ト共ニ婦女子ノ教育ニ關シテモ亦在來ト大ニ其面目ヲ新ニセルヿ明ナリ而シテ之ニ件フ婦人會モ種々ノ名稱ノ下ニ起レリト雖モ或ハ遊樂的ニ或ハ交際的ニ或ハ上流社會ノ婦人競爭交際會ノ如キニ失シ貨利的ニ德育的ニ婦人ノ智識道育ヲ發達セシムルノ一助タル婦人會ノ存在スル或ハナシト云フモ不可ナカラン本會ハ之ニ鑑ミ將來ニ向テ歐米人ト相對シテ其競爭場裏ニ立ツ男女ノ母ヲ本會々員中ヨリ出サンコトヲ希望スル所ナリ。

本會ヲ組織スル人

會頭　一名　幹事　三名

會計　二名　名譽會員

通常會員

本會ヲ組織スルニハ先ツ發起人タル者其地方ニ於ケル名譽アリ地位アル人々（縣知事書記官警部長參事官代議士新聞記者、村群ナレバ其々ノ議員其他一地方ノ名望家等高等ナル學校ノ校長教員等）ノ夫人ヲ說テ入會セシメ是等ノ人々ト本會ノ爲メ盡力セラルヽ男子教育家等ヲ以テ名譽會員トシ他ハ悉ク普通ノ會員トス而シテ會員ノ募集ハ新聞紙ニ廣告スル等ノ方法ニ由ル而シテ會員タラント欲スルモノ本會規則書ニ定ムル願書ヲ本會ニ差出スニ由テ手續ヲ終ルモノトス

入會願　（書式）

何府縣何郡何村
　　　何區何町何番地
族籍　何之誰
　　　年月日生

私儀御會ヘ入會仕度候ニ付御許可ナシ被下度願上候尤モ御許可相成候ハヾ御會則堅ク遵守可致候依テ保證人連署ニテ此段奉願候也

但シ萬一故障有之候節ハ保證人ニ於テ一切引受申ベク候

右

年月日

何之誰印

保證人　何之誰印

何會御中

（但シ保證人タル人ハ其地方ニ於テ一家立テ居ル自活者ニ限ル）

本會事務所ニ於テハ會員名簿ヲ調製シ會員ノ性名ヲイロハ順ニ記載シ其性名ノ上部ニハ保證人ノ性名ヲ、其右側ニハ宿所ヲ記入ス可シ

本會ノ主眼トスル婦女子ノ德風ヲ奬メ又日常必須ナル智識ヲ得

セシムル方法ハ大略左ノ如キモノトス

婦女子ノ德風ヲ獎ムル方法トシテハ倫理道德宗教等ノ教理ヲ以テスルコトハ何人ト雖𪜈爭ハザル所ナリ而シテ又此外ニ善良ノ方法ヲ發見スル能ハズ然レ𪜈其實際之ヲ人々ガ行ヒツヽアルヤハ之ヲ知ルコト難ク又一方ニハ何人ト雖𪜈必ズ其行爲心掛ケ等常ニ此教理ヲ守ルヤモ知ルコト難ク法律等ノ如ク人ヲシテ强行セシムルコト難シ之レ他ナシ是等ハ各人ノ心內ニ屬スルコトニシテ外觀上之ヲ知ルコト難キニヨル此教理ヲ說クト同時ニ一方ニハ强制的制裁的ニ其德風ヲ高ムルニ一助トナルベキ方法ヲ採ルヲ可トス而シテ其方法タルヤ投票函ヲ市中(村ナレバ村中ノ或所其他ハ之ニ準ス)所々ニ設ケ又本會事務所ニモ設ケ何人ト雖𪜈廣ク婦人ノ善行惡事ニ關スルヿ等一切ノ事ヲ此函中ニ投票セシムルノ方法ヲ用ユベシ是ノ方法ハ薄弱ナル制裁ナル如キモ社會的ノ性質ヲ帶ブルモノナレバ本會員タル如此事アルヲ知レバ自ラ其行爲ヲモ愼ムニ至ルベシ而シテ是等ノ善行惡事ハ之ヲ或ハ本會發行ノ機關雜紙ニ記載スルモ可ナルベシ

婦女子ニ日常必須ノ智識ヲ得セシムル方法ハ他ノ所ニ於テ記スレ𪜈亦無記名投票ノ方法ニ由リテ何人ト雖𪜈會員タル者ハ其知ラント欲スルコト疑問アルコト又ハ知レルコト又ハ新ニ新聞雜誌等何ニモアレ得タル新智識ハ紙片ニ記シテ出席ノ當日會場ニ備ヘ付ケアル投票函ニ投入シ又ハ其他何レノ日ニテモ所々ニ備ヘ付ケアル投票函ニ投入スルヲ要ス卜開會ノ當日幹事三名立合ヒノ上ニ於テ其函ヲ開キ其中ニ投入シアルコトヲ會員ニ告ゲ知ラシメ疑問ニ對スル答ハ其專門家ニ尋ネテ之ヲ會員ニ報告シ後本會ノ雜誌ニ出ス、然ルトキハ何人モ無記名ナル故耻ヅルヿナク投票スルニ至ルベシ即チ日常ノ料理法ニ關シ衣服裁縫ノ方法子供養育法等ニ付テノ實歷及ヒ意見或ハ美術的技藝等ニ就テモ亦此方法ヲ採ルトキハ或ハ會員中ニテ知ラント欲スル者又知レル者ハ投票ニ由テ有無相通スルノ便ヲ得ン之レ大ニ會員相互ノ利益トナルヿ多カルベシ

會場ニ揭グベキ教訓

女子ノ愼ムベク愼ムベキハ節操ニアリ節操ナキ女子ハ人ニアラズ人ニアラザル者ハ人ト交ルベカラズ又一家ノ紛亂ヲ來ス一家不整ナレバ樂ミナシ一家ノ團欒ハ樂ノ最ナルモノナリ

女子ノ守ルベキハ嫉妬ナリ猜忌ナリ己レ善キヲ欲セバ己レヲ正シ婦德堅固ニシ學ヲ勵ムベシ、己善キニ人ノ惡シキハナキモノゾ

女子ハ言葉ヲ少クシ身ヲ愼メ言葉多ケレバ過失ス口ハ過福ノ門ナルコトヲ忘ルベカラズ

女子從順溫和ニシテ高慢ナラザルコトハ見易ケレ高慢不讓ナルホド見惡キモノハナシ又少シモ奥床カシキ所ナシ

女子ハ禮節ヲ遵守シ長幼ノ序アルコトヲ常ニ注意シ行フコトヲ勉ムベシ父ヲ敬スル天ノ如ク母ニ仕フル地ノ如クセバ汝ノ子孫亦復如此ナラント古人ノ金言アリ又

樓の上もはにふの小屋も住む人の心にこそは高き卑き、
古の道なきひても唱へても我が行にせずは甲斐なし、

會合ノ場所、時日、刻限

會合スベキ場所ハ其地方ノ中心トモ稱ス可キ町(或ハ村)ヨリ餘リ一方ニ偏セザル所ニアル(成ルベクバ市中ヲ避クルヲ可トス)寺院又ハ校舍ヲ以テ之ニ充ツルヲ便トス校舍ナレバ疊ヲ布キ得ル便利アル所ヲ撰ブヲ可トス、之レ婦女子ハ多ク座スルコト今日ノ有樣ニ於テ通例ニシテ男子ノ如ク社會ニ出テ事務ヲ執ルモノニアラズ從テ禮式ノ點ニ於テモ椅子ハ不便ナルヿ多ク又實際ニ適セズ故ニ座スルヲ便トス然ルトキハ既ニ一家ノ主婦トナレル

人ノタメニモナルベシ而シテ之ヲ完備スルハ寺院ナルヘシ寺院ハ多クノ場合ニ於テ多數ノ人ヲ納ルヽニ適當セルコト多ク又何人ト雖モ婦女子ノ如キハ寺社佛閣ノ如キ所ニ至レバ平常如何ニ生意氣ナル者ト雖モ少クトモ其所ニアル時ノミハ幾分カ眞心ヲ恢復スル者ナレバ無形上精神的教化ヲナス一助トモナルベシ然モ校舍ハ如此コトアルコトナシト雖モ書籍機械等ヲ借ルノ便アルヲ以テ此點ニ於テハ前者ニ勝ルベシト雖モ書籍等ニ關スルコトハ無形上ノ教化ヲナスヲ得ル便利ニ比シテ稍々輕キモノナレバ先ヅ寺院ヲ撰ブヲ可トス若シ寺院アラザレバ勿論校舍ヲ以テ最トス而シテ寺院ニ於テスルノ便利ナルハ普通書籍書藏等ノ點ニ於テハ校舍ト同等トスルモ料理法ノ研究ヨリ禮式或は美術上ノ研究等ニ至ルマデ校舍ニ勝ルヿ實際ニ於テ見ル所ナリ又衛生上ノ點ヨリスルモ然リ尚ホ一方ニハ宗教上信向上ノ點ヨリスルモ人ヲシテ良心ヲ刺激スルヿ多カルベシ之レ實ニ大ナル教化ノ一助ト曰フ可シ

會合ノ時日並ニ刻限中前者ハ多キニ過グレバ欠席者多ク少ナキニ失スレバ本會ノ目的ヲ達スル能ハズ故ニ中間ヲ採リテ月ニ二回トシ第二日曜ト第四土曜トシ而シテ刻限ハ第二日曜ハ正午第四土曜ハ午後一時半ヨリトシ何レモ四時間トス而シテ斯ク日子ト刻限トヲ定メタル理由ハ、凡テ婦女子ハ夜間ノ外出ハ不可ナルヿ勿論ナリ故ニ夜間ハ之ヲ除キ晝間ニ於テ如何ナル時カ可ナルト考フルトキハ是等ノ時ヲ以テ適當トス何トナレバ女子ハ平常家ニアリテ家事ヲ取ルモノナレバ朝早ク或ハ夕刻ハ家事上其人アルヲ要スルヿ多々アルベシ故ニ是等ノ時ヲ除ケバ即チ右ノ刻限ヲ可トス然ルトキハ主婦ニテモ兒女ニテモ學校ニ行クモノト否トヲ問ハズ必ス出席シ得ル都合ナリ之ヲ四時間トセシハ時間上前ニ言ヘル便利ニ加フルニ講義談話等ニ必要ト認ムルニヨル

又第二日曜第四土曜トナセシ理由ハ他ノ日ナレバ或ハ主婦ニハ便利ナル日アル可ケレド講師及ヒ子女ニシテ學校ニ行ク者ノ爲メニハ不便ナルベシ故ニ土曜ト日曜トセシナリ、而シテ日曜ト土曜トセシハ日曜ノミ又ハ土曜ノミトスルトキハ常ニ其何レカノ日ニ用事アル人ハ欠席セザル可ラザル如キ　アルニヨリ之等ノ不便ヲ避クル爲メ何レカ一日ハ必ス出席シ得ル樣ナル期會ヲ與ヘ置クナリ

講師招聘ノ方法

時間ヲ定メテ特定ノ人ヲ聘シテ講義ヲ擇任セシムルヲ可トス臨時ニ教師ヲ聘スルハ策ノ得タルモノニアラズ若シ其教師ニシテ非常ナル學識アルモノトスルモ尚ホ且ツ然リ之レ會員タルモノヲシテ一貫セル智識ヲ得ルニ乏カラシムルニヨル特定ノ人ヲシテ一科又ハ數科ヲ擔當セシメテ講師責任ヲ重シ又一括セル學理ヲ數回ニ分テ講義シ從テ其言ハント欲スル事ヲ充分ニ述ベ又會員モ時々熟慮考案シテ次回ニ之ヲ質問シ得ノ便益アリ、而シテ教師タル者ハ其地方ニ於テ高等ナル教育(普通學ニテモ專門學ニテモ)ニ從事セル人々即チ高等女學校或ハ師範學校中學校等ノ教員ヲシテ本會名與會員トシ義務的ニ出席講義セシメ唯報酬トシテ若干圓ヲ給與スルヲ得策トス其ノ發ニ至ラシムルニハ發起者宜敷之ニ說カバ何人ト雖モ教育者タルモノハ公共ノ利益トナルヿナレバ進ンデ一致セザルマデモ其言ニ贊同セザルハアラザルベシ之レ講師招聘ノ最良法ニシテ現ニ東京ノ某中學校ニ於テ實行セラレタル所ナリ又時トシテハ學識アル者高僧等ヲ招待シテ臨時ニ講演ヲ依頼セバ歐米ノ新智識ヲ得又德風ヲ獎ムルノ一助トモナルベシ

講義談話ノ要目及ヒ其仕方

講義ス可キモノハ如何ナルモノヲ如何ニシテ講義スベキカト曰

フニ或書籍ヲ用ヰテ講義スル如キハ會員ヲシテ學校ニアランムルカ如キ感ヲ生ゼシメ樂シンデ覺ユルヿナリ又一方ニ偏スルニ由リ其書外ノ事ヲ知ルヲ得ズ又書籍購求等ノ點ヨリスルモ或ハ僅小ノ出費ニテモ實際上一家ノ關係上或ハ自己ノ經濟上等ヨリシテ求ムルヿ難キ人ナシトセズ故ニ用書ハ之ヲ一定セズ講師タル者諸種ノ書籍中ヨリ本會員ニ適當シ且ツ善良ナリト認ムル所ヲ抽象シテ之ヲ講義シ會員ノ意思ニヨリテ隨意ニ筆記セシメ後本會ノ雜誌中ニ記載シテ之ヲ會員ニ分ツノ便利ナルヲ信ス而シテ講義スベキ科目ノ要目ハ家事經濟、生理衛生ノ大要、日用料理法(之ハ時ニ實習セシムルヲ便トス)書法、裁縫、漢文學(易キ方ノモノ、之ハ隨意質問ニ應スベシ元來漢學ノ書籍ハ多クノ家ニアルヿ普通ニシテ又學バント欲スレバ女子ニ必要ナル位ノコトハ其家主ニ付テ質問シ或ハ字引等ニ依テ多クハ知ルコトヲ得ルモノナレドモ實際之ヲナスコト能ハザル人ナシトセズ故ニ隨意科トシテ置クヿ便利ナリ)英語初歩(之ニ英語初歩ト曰フハ日用物品ニ記載セル横文ノ文字ヲ一寸ト識別シ字引ヲ用ヒテ大意ヲ解シ得ル樣ニナルマデ位ニテ可ナリ之ヲナサズバ將來ニ向テ實際ニ不都合ナルヿ多カルベシ今日ニ於テ既ニ然リ又小兒教育ノ上ニ付テモ必要アルベシ故ニ之ヲ加フ)又美術ノ一助トシテ挿花ノ大体ヲ談話休ニ說明シ又時々實習セシムルノ可ナルヲ信ス一家ノ床上ニ挿花アル大ニ見易キ所アルニ由ル故ニ爰ニ附加シタリ、又珠算ノ加減乘除位ヲ知ラシメ置クヰハ一家ノ利益トナルコト多カルヘシ談話ハ倫理的、道德的ヲ主トシテ勸善懲惡ノ實話宗教上法律上等因果應報ノ理ヲ主トシ並セテ歷史上ノ美談東西古今ノ節婦孝婦ニ關スル事實談ヲナレモ可ナルベシ之レ或ハ會員中相互ニナサシメ或ハ講師等ヲシテ時々之ヲナサシムルモ可ナリ凡テ人ハ道德堅固ノモノモ時ニ或

ハ不知ノ間ニ破ルヿアリ故ニ制裁アレバ其制裁ニ由テ眞心ヲ刺激シ發揚スルヲ得ルヿ多シ故ニ善ヲ進ムル一方ノミニテハ不可ナリ惡ヲ懲スノ制裁アルヿヲ要ス法律上ノ談話ノ必要ナル此ノ故ナリ孝婦ノ談話ヲナサシムルモ亦此ノ故ナリ經濟ノ必要アル所以ハ外國ト比較シテ論スベシ之レ外國カ今日(例ハ英等ノ如キ富強ニ至リシ所以ハ之ヲ小ニスレバ個人ノ經濟其宜敷ヲ得タリシニ因ル結果ニシテ國強カランヲ欲セバ先ツ經濟ナルベシ今日ハ富メル國ハ強國ニシテ古ハ強國ハ富國ナリシ如キ差違アリ其因テ然ル所以ヲ說クノ必要アリ又會員相互ヲシテ恐クハ知合トナリ親密トナラシムルタメ常ニ其座席ノ順序ヲ變更シ親キ者ノミ常ニ一所ニ寄ル如キ傾ヲ避ケシムルヲ要ス(書籍ヲ一定セザルト雖ドモ參考書ノミハ講師之ヲ指定スルヲ便トス)

備ヘ付クベキ書籍、雜誌ノ種類

是等ノ書籍雜誌ハ多クアルベシト雖ドモ之ニハ其等ノ標準々則トナルベキモノヲ示スヿトナサン

書籍

家事經濟書　理化學ノ應用ニ因ル日用ノ物品ニ關シテ記載セルモノ　生理衛生ニ關スル書　女禮式書

挿花書　料理法書　裁縫、縫取、押繪ニ關スルモノ

育兒教育書　漢文學ノ書　一家團欒ノ樂ヲ記セルモノ

歷史(日本、支那　朝鮮歐米印度)　外國語學初歩ノ書(會話、文法、修辭學其他)　博文館百科全書　歌學ニ關スル書

和文書　かなつかい教化書　婦女ノ鑑トナルベキ人ノ傳及ヒ其功德ニ關スル書　倫理道德ニ關スル書

植物學及ヒ其栽倍法ニ關スルモノ　養蠶法、織方、染方等ニ關スルモノ

雜誌

科學ニ關スル雜紙　經濟雜誌(凡テノ種類)

節婦其他稱奬スベキ人ノ事蹟等ノ記載アル草紙

家庭紛亂ニ基因スル弊風害毒等ノ實例アル雜紙

運動法ニ關スルモノ　　理化ノ應用ニ由リ發明セラレタル

諸國斬新ノ記事アル雜誌　　文學上ノ雜誌

太陽女鑑等ノ如キ種ノモノ

此他多々アル可シト雖ドモ要スルニ當時流行ノ小說的雜誌ヲ除ケル外ニ於テ道德宗教風俗言語習慣文學（詩歌誹句ヲモ含ム）其他日用百科ノ科學雜誌ハ大體ニ於テ不可ナシ、小說的雜誌等ノ如キハ害多クシテ益少ナシ

會員ノ心得粗要領

本會々員タルモノハ本會規則ヲ遵守スベキハ勿論茲ニ揭ゲタル會場ニ揭クベキ教訓ノ辭ハ堅ク之ヲ守ルベシ婦德ノ重ズベキヿ輕擧ノ行ナキヿハ假リニモ忘ルベカラズ常ニ禮節ヲ重シ長幼ノ序ヲ正シクシ假リニモ高慢ノ風アル可カラズ會員ハ相互ニ愛シ智識ノ交換ヲナシ各其進歩ヲ計ルベシ之レ實ニ本會ノ目的ニ協ヒタルノミナラズ之ヲ大ニシテハ國家ニ對スル婦人ノ義務タルヿヲ忘ルベカラズ

人ハ萬能ノモノニアラズ彼ノ能クスル所我之ヲ能セザルヿ多カルベシ而シテ此ノ長短ハ年齡ノ如何ニ關スルモノニアラズ年齡ト學文智能トハ或一程ノ度ニ達シタル以上ハ全ク別物ナリ我彼ヨリ年長ナル故ニ彼ハ知ラザル所ヲ問フハ恥トナスガ如キハ謬レルノ大ナルナリ　又彼ハ年長ナレバ我ニ劣レル所アリトテ彼ニ慢ナルモ亦復謬レルノ甚タシキモノナリ年長者ヲ敬スルハ年齡ノ故ヲ以テ敬スルモノニシテ學術ノ如何ハ問フ所ニアラズ恰モ父母ヲ敬シ兄ヲ重ズルガ如キト同シキナリ其人ノ學術上幼者ニ劣レル所アルハ會々教ヲ受クル能ハザリシナリ故ニ習ハバ直チニ同等ニ知リ得ルモノナリ故ニ年齡ト學文技藝トハ此ノ點ニ於テ別物ナリト曰フナリ　又同理ニテ己ヨリ幼キ者ニ物ヲ尋ヌルモ亦タ之ト異ルヿナク決シテ恥トスルニ足ラズ古諺ニ習フハ一時ノ恥ニシテ習ハザルハ終世ノ恥ナリト曰ヘリ宜哉其意ノアル所知ルヘギノミ

多クノ場合ニ法テ女子ハ學問スレバ其有樣髮形言語等ニ至ルマテ尋常人ト變リ何トナク生意氣ノ風ヲ生スルヿ多シ如此ハ善良ノ風俗ニテアラズ、女子ハ何處マデモ女子ラシク穩和柔順ニシテ言葉丁寧ニ禮義正シク淡白ナルコソ奧床シキ心知スレ本會員ノ心得可キコトハ之ヲ第一トシ家ニアリテ常ニ習ヒ覺ヘタル所ヲ行ヒテ終首一貫セルコソ願ハシケレ

其他父母ニ孝養ヲ盡ス可キ等ノコトハ言ヲ俟タズ又夜間故ナク外出スル如キハ不可ナルヿ勿論ノヿナリ又タトヘ故アリテ外出スル時ト雖ドモ暗夜ニ限ラス燈火ヲ持タザル如キハ又不可ナリ又無用物品ヲ求メ或ハ分限ノ奢ヲナスガ如キハ大ニ愼ム可キヿニシテ貯蓄ノ心ナキモノハ野蠻ノ域ヲ脫セサルノ弊風タリ是等ノコトハ熟考シシ一々愼ムベキヿナリ

會費ノ徵否及ヒ其數額

會費ハ高キニ過グレバ廣ク會員ヲ募集シテ本會ノ目的ヲ達スル能ハズ何トナレバ家計裕ナラズシテ本會ニ入會セント切望スル者アリトスルモ會費ノ點ニ於テ入會スル能ハザル如キ者或ハナシトセス左レバトテ又全ク徵集セザレバ本會ノ出費多クシテ永ク維持スルヿ困難ナルベシ故ニ會費高カラズ中等ニシテ成ル可ク多ク會員ヲ得德風ト智識トヲ廣ク地方ニ及ホシ其地方ノ教化ヲ助ケザル可ラズ之レ會費徵集ノ必要ナル所以ナリ會費ハ月々月初メニ徵集シ出席ノ有無ヲ問ハズ徵集ス而シテ會員ノ望ニヨリテ或ハ數ヶ月分ヲ前納スルモ妨ゲナシ、會費ノ徵集ハ人ヲ派シテ徵集スルヿ會計上多クノ場合ニ於テ便利ナルベシト雖ドモ會員ノ大部分ハ常ニ出席者ナル時其人々ヲシテ持參セシムルヲ便

トスルヿモアルベシ此場合ニ於テハ會員入口ヲ一方ニ定メ其入場口ニ會計所ヲ設ケ入場ノ節必ス納付スル樣ニスルカ便利ナリ而シテ會費ノ額ハ十五錢以上卅錢位トス（一ヶ月）之ハ地方經濟上ノ程度ニヨリテ異ルモノナレバ豫メ確定シ難キモ如何ニ生活ノ程度高キ所ニテモ卅錢ヲ超ユルハ不可ナリ之レ前ニ言ヘル理由ト幷ニ一家ノ經濟上不都合ヲ來シ從テ會員ヲ少ナカラシムルニ至リ終ニ會ノ不振ヲ來タスニ由ル先ツ大概ノ場合ニ於テハ十五錢ヨリ二十錢位ヲ可トス全ク徵集セザレバ何人ト雖モ容易ニ入會シ（勿論小學校卒業以上ノ女子及ヒ一家ノ主婦ニシテ）善良ノ風俗ヲ害スルノ結果ヲ生ズルニ至ルベシ之レ一家ノ主婦ト曰ヘバ極端ヲ言ヘバ車夫ノ妻モ亦其名ヲ尊稱シテ入會ヲ望ムモノナキトモ言ヒ難シ之ノ如キハ他ノ會員ニ對シテ愛情ヲ害シ得策ニアラザル可シ會費ヲ徵收スレバ之ヲ以テ本會ニ必要ナル書籍雜誌器具等ノ必要品購求ノ助ケトナリ又教師招聘ノ一助トナルベシ此會費ノ殘餘アルアラバ年ニ一回位ツヽ大會ヲ行ヒ（會費ハ平常ノマヽニシテ既ニ殘リ居ル金額ヲ加ヘテ）得ルノ便アリ又時ニハ會員一同手ヲ攜ヘテ郊外散步ヲナスコトモアリテ可ナリ之ヲ附加シテ言フナリ

會頭及ヒ役員ノ推擧及事務要領

會頭ハ其地方ノ高等ナル女學校（女子師範學校、高等女學校等ノ如キ若シナキ時ハ小學校長等ノ中ヨリ推撰ス）等ノ如キ平常女子ノ教育ニ關係シ經驗アル人ヲ以テスルヲ可トス多クノ會ニ於テハ或ハ名譽アル人ヲ以テシ或ハ官位高キ人ヲ以テ之ニ任スルヿアレド如此ハ有名無實ノ會頭ニシテ會頭ノ外ニ經驗アル副會頭ヲ置クノ必要ヲ生ズ之レ唯タ大衆ニ失シ實際ニ無職ノ役員ノミ多キハ得策ニアラズ又置ク必要モナシ之等ノ名譽アル人等ハ名譽會員中ニ入ルベキモノトス役人少ナクシテ事務迅速ナル實際ニ見ル所アリ、會頭ハ其名ノ示スガ如ク本會ノ事務ノ一切ヲ監督シ改良スルモノナレバ經驗アリ手腕アル人ヲ（ナキ時ハ成ルベク之ニ近キ人）可トス而シテ會頭ノ推撰ハ名譽會員及ヒ通常會員中ヨリ是等諸種ノ要件ヲ條件トシテ具備セル人ヲ會員ノ無記名投票ヲ以テシ最多數ヲ得タル者ヲ以テ之ニ任ズ記名投票ノ法ハ開票ノ際ヲ顧慮シ私上ノ種々ノ關係アルモノアル時ハ眞ノ適任ハ認ムル人ヲ撰ブヲ憚ル如キ結果ヲ生ズルコトアリテ不可ナリ無記名ニハ如此コトナシ會頭トナリタル者ハ本會ニ關スル一切ノ事務ヲ監督シ改良スルコトヲ之レ勉ムルヲ要シ時々幹事會ヲ開キテ會事ヲ議ス會頭ノ任期ハ二年トシ再撰ヲ妨ゲス會頭ノ任ヲ二年トセルハ短キニ失スレバ會頭其責任ヲ重セス從テ會ノ事ニ熱心ナラサル結果改良等ヲ謀ルノ念少カルベク又長キニ失スレバ或ハ一旦善カラント信シテ推撰シタレ氏案外不適當ナリシモ長年月ヲ經ザルハ他ニ適任者アルモ其人ヲ推撰スル能ハサルノ不便アリ而シテ以下ニ述ブル幹事ノ任期ハ一ヶ年ナル故其上ニ立テ其指揮監督ヲ行フ會頭ノ任期ハ之ヲ長ク（幹事ヨリモ）ナシ置カザレバ幹事ノ變ルト共ニ會頭モ共ニ代ル如キ時ハ常ニ新シキ幹事ト新シキ會頭トヲ持ツ如キニ至レバ事務ノ迅速ト宜敷トヲ欠クコトアルベシ故ニ二ヶ年トセルナリ、臨時ニ會頭ノ欠席シ又ハ會頭欠ケタル時ハ幹事中ノ年長者ヲシテ之レガ代理ヲナサシメ又ハ補欠撰擧ヲ行フコトアルヘシ

幹事ハ三名ヲ置キ本會ニ關スル會計事務ノ他一切ノ事務ヲ分掌セシム而シテ幹事タル可キ人ハ通常會員（即チ女子）ヲ以テ之ニ任ス之レ又會員ノ互撰ニ由リ無記名投票ニ由リ最多數ヲ得タルモノヨリ順次三名ヲ取ル若シ同數者アレバ年長者ヲ以テ任ス、任期ハ一ヶ年トシ再撰ヲ妨ゲス是等諸種ノ點ニ於ケル理由トスル所ハ前ニ會頭ニ關シテ陳ベタル所ト全一ニ歸ス、而シテ其三

名トセシ理由ハ一名ハ少ナキニ失シテ事務ヲ見ルヿ不便ナリ且ツ執務多キニ過キ職ニ耐ヘズ二名ナレバ或ハ敏腕家ノミナレバ成シ得ルヿモアルベシト雖モ之レ尋常ノ者ニ望ムベキニアラズ且ツ事ヲ議スルニ當リ議二ツニ分レタル時ニ何レニモ決セザルノ不便アリ故ニ之等ノ不便ヲ避クルガ爲メニ三名トセリ其以上ヲ要セザルナリ幹事ハ會計事務ノ外一切ノ事務ヲ司ルコト前ニ記セル所ナルガ其主ルモノハ講師招聘、書籍ノ購入蓄藏、談話、雜誌ニ關スル事務、會員ノ諸種ノ投票ニ就テ質議審査、開會當日ニ於ケル雜務ノ周旋等ナリ

本會ニ會計二名ヲ置キ本會々計上ノ一切ヲ執ラシム而シテ其上ニハ會頭アリテ之ヲ監督ス故ニ會頭ハ幹事會計ヲ總ブルナリ會計ヲ二名トセルハ金錢ノ出入ハ間違多キニヨリ傍眼物ヲ見ルノ兩眼ニ及ハザルノ理ニヨリテ二名トセリ會計モ前ニ曰ヘルト同シク無記名投票ニヨリ之ニ任ス任期ハ一年再撰ヲ妨ゲズ其任期ヲ一年トセルハ深キ理由アルニアラズ幹事ニ曰ヒタルト同樣ノ理ニ加フルニ幹事改撰ノ際ニ撰擧シ得ルノ便アルニヨル會費ヲ徴集ニ人ヲ派スル時ハ臨時ニ人ヲ雇ヒテ之ニ命ス會計ハ本會一切ノ出入ヲ執ルモノ故時々幹事ト會シテ本會金錢ノ出入ト其必要トヲ打合セザル可ラズ然ラザレバ出入ヲ償ハザルノ結果ヲ生シ本會ノ維持ニ困難ヲ來スヿアルベシ

此他例會毎ニ臨時委員數名ヲ設ケテ幹事ヲ助ケシム而シテ其方法ハイロハ順ニテ一回毎ニ各別ノ人ヲ以テ之ニ任ス其カクスル所以ハ會員ヲシテ悉ク會ノ事ニ與サハラシムルガ爲メト幹事ノ欠席會計ノ欠席アリシトキ等ニ此等ノ人々ノ中ヨリ之ヲ補ハシムルノ便アルト會員悉ク會ノ事ニ與カルノ結果本會ノ事業ニ熟心セシムルガ爲メナリ會頭欠席ノ時ハ幹事中ノ年長者ヲ以テ補フ如ク會計、幹事ノ欠席ノ際モ亦委員中ノ年長ヲ以テ之ニ任ス而シテ先ツ會計ヲ前ニシ后幹事ニ及ブ其理由幹事ハ他ノ委員ノ補助モアリ又在來ノ幹事二名モアルニ由リ會計ヨリ補助者多ニヨル

會員中互ニ遵守スベキ規約ノ條項

節操ヲ重スルヿ

人ト交ハルニハ信義ヲ旨トシ長ヲ敬シ幼ヲ愛ミ導クベキコト

嫉妬ヲ愼ミ言葉ヲ少クシ從順隱和ナルベキコト

會員ハ緩急互ニ相助ケ相救フベキコト

長者ノ命ハ背カザルコト

人ニ接スルニハ禮節ヲ重ンジ輕々シキ擧動アルヘカラザルヿ、又高慢ノ風アルベカラサルヿ

父母其他長者ノ許ナクシテ濫リニ外出シ又事故ナクシテ夜間獨行シ又外出ノ際燈火ナクシテ歩行スル如キコトヲ愼ムベキコト

身分不相當ノ奢ヲナスコト（飲食衣服等ニテモ）無用ノ贅澤品ヲ買ヒ金錢ヲ消費スルヿヲ愼ムベキヿ

飲酒喫煙等ハ必スナスベカラザルヿ

諸事節約ヲ旨トシ萬一ヲ慮リ蓄貯ノ必要ヲ忘ルベカラザルヿ

朝ハ早ク起クベシ夜ハ遲クマテ起キ居リ無用ニ時ヲ費スコトナキヲ要ス

身体ハ常ニ清潔ニシ又家屋内外ヲモ清潔ニ掃除スベキヿ

日常新ニ覺ヘタルコトハ之ヲ實地ニ施シテ試ルヘキコト

外出スル時ハ其至ル可キ所ヲ家人ニ告ゲ外出スベシ又外出先ヨリ濫リニ寄道等スベカラザルコト

濫リニ他人（知人等ヲ指ス）ノ家ニ寄泊スルコトナカレ

途中ニ於テ會員互ニ會シ又ハ遇ヒタル時ハ常ニ長幼ノ序ヲ亂サス禮儀ヲ重ンズベシ、又本會々員トシテ恥ツベキコト女子トシテ恥ツヘキコトハ一切之ヲ注意シテナサヾル樣心掛ケベシ

會員ハ互ニ注告シ其注告ヲ入ルベシ惡シキヿハ直チニ改ムベシ
人ヲ使フ者ハ目ヲ掛ケテ使フベキコト
虛言ハ勿論大禁物ナリ
知ラザルコトハ知ラズトシ就テ學ブベシ見ヘザル可ラズ
諸事家内ニ於テ隱シダテスベカラズ若シ如此コトアレバ一家團欒ノ樂ミヲ破ルニ至ルコトヲ忘ルベカラズ
此他學問、裁縫、挿花、料理法等何事ニ由ラズ女子ノナスベキコトヲ稽古スル者ハ其道ニ從テ怠ルベカラザルハ勿論ノコトナリ
此外本會々員ハ本會規則ヲ遵守スベキハ又勿論ノコトナリ
本會々員退會セント欲スル片ハ其理由ヲ認メ保證人ト連署(又印アル者ハ連印ノ上、保證人ハ必ス捺印シテ)本會事務所ニ差出スベシ本會ニ於テハ協議ノ后之ヲ許ス事故ナクシテ濫リニ退會スルヲ許サズ、又本會ニ於テ退會ヲ申シ渡スベキ理アリト認ムル者ハ本人ノ望ノ如何ニ保證人ニ向テ其理由ヲ告知シ退會ヲ申渡ス、一旦退會シ又ハ退會ヲ申渡サレタル者ハ同時ニ會員タル資格ヲ失フモノトス、但シ會費ノ未納アル片ハ退會后ト雖圧之ヲ徵集ス
此他本會ニ備ヘ付ケアル書籍目次ノ開會マテ會員ノ望ミニヨリヲ貸與スルコトアルベシト雖圧期日ニハ必ス一旦返却スベシ
退會者ニシテ若シ書籍等ヲ借用シ居ル片ハ直チニ返却スベシ
若シ本會ノ會名ヲ一言セバ本會ノ目的ヲ表會ス爲メ其主旨ノアル所ヲ其マヽ取リテ婦人智德奬勵會トシ又會本ナル字ヲ其上ニ加フルモ可ナリ(終)

八月五日兼題

夕立

天

もの丶ふの馬のりならふならし野に
　きほひてかゝるゆふたちのあめ
肥後國菊地郡城北村　佐々小琴子

地

いわしひく海の小ふねのすゝしけに
　ぬれつゝかへるうらのゆうたち
名古屋市裏門前町　木下鶴子

人

夕たちにしつかのきはゝにきはひぬ
　ゆきかふひとのおまやどりして
群馬縣多野郡吉井町　臼田のふ子

(秀逸六首)

こまの背に負ひたる荷物かたへのみ
　ぬらしてすくろゆふたちのあめ
名取正代子

はけしくもかゝろさみれは風はやみ
　よそにすきゆくゆふたちのくも
椎野鋭子

ちり舞ひしみやこ大路もゆふたちに
　しづまり果てゝすゞしかりけり
大谷津峯子

なるかみのおさもさたねてゆふ立の
　あめのみそゝくのぎのすゞしさ
田代絨子

すゝしさを月にゆつりてゆふたちの
中澤よの子

くもはいつちへふりゆきにけん

夕たちのしつくにおもふなよたけの
葉すゑにそよくかせのすゝさ　　宅高松子

（以下原稿到着順）

立ちよりて宿るかけなき野わき路に
うきくもかゝるゆふたちのそら　　田山芳子

一しきりふりてのあとのすゞしさに
またるゝものはゆふたちのあめ　　北原すゑ子

ゆふ立のくもやさわくさみねしまに
はやをさまれるぬれみさりかな　　榎本照子

舟びとのこゑのみもれてなつの日の
にはかにくもる和歌のゆふたち　　根田よし子

夏の日のかさのみどりもしばしにて
あしなみはやきゆふたちのそら　　稲見きょ子

なる神のつゝみかれてやくろくもの
ひきさきもれてゆふたちぞふる　　根田さだ子

かきくもりおどろ〱となる神の
おともはけしくゆふたちのふる　　中島登美子

ゆふ立のなごりつゆけき木のまより
すゞしくのほるつきのかげかな　　西宮しづ枝子

はるかなる高ねのかたもひとむらの
くもにかくるゝゆふだちのそら　　服部倫子

夕たちのあめの名ごりにおくつゆの
ひかりすゞしきにはのたまさゝ　　仁保基子

ひとしきりふりて晴ゆくゆふたちの
なごりのかぜぞいさごすゞしき　　徳永萬壽子

ひとしきりふりてすきゆくゆふ立の
はれてすゝしきつゆのたまゆら　　山代由子

かた袖をぬらしていそぐたびびとの
あとになりゆくゆふたちのあめ　　佐々有隣子

ゆふだちのあめには笠のかひもなし
はれてまたほすころもでのやま　　溝口貞子

庭のおもの木々になこりの露見ねて
すゝしくすぐるゆふたちのあめ　　前川琴子

たへがたきひるの暑さもわすられて
すゞしさまさるゆふたちのあめ　　山口ひろ子

めきしまの蟹の笘やはいり日さして
たまもうらわにゆふたちのふる　　有信やす子

吹く風もかたへすゞしとおもふまに
やがてふりくるゆふたちのあめ　　青木たま子

なるかみのとゞろきわたる聲やみて
はるゝもはやきゆふたちのあめ　　田島まさ子

さして行くたび路にふれる夕立ちの
はれまをかりのまつのしたかげ　　根岸登美子

夕たちのまだはれなくにやまの端は
さま〲にほふにしのかけはし　　神村たか子

夕たちのふりしゆふべはすゝしさに
しばしはなつもわすれけるかな　　森このゑ子

ふしのねはさやかにみねて時のまに
すそ野をはしるゆふ立ちのくも　　鎌田嵜代子

ゆふたちに水はまされりなるかみの
つくりましけんにじのかけはし　　戸倉信子

みたらしのあたり清めてすきぬらん
たゝすのもりのゆふたちのあめ　　日高かず子

なる神のおとはのやまにくもかけて　　大橋鍬子

いまやふりこむゆふたちのあめ

仰き見れは不盡の高ねはゝれなから
すそのはかりにゆふたちそふる　大橋伊與子

くさも木もみさりますなり夕たちの
すきしなこりのつゆをおく野は　森田さく子

あかねさす日は西やまにさしなから
このわたりのみゆふたちそふる　鴨井貞子

あつさゝへよそになかして杉の戸の
のきはすゝしきゆふたちのあめ　岡本蔦乃子

山さ見ねしくもはきほひて足ひきの
みねをこねくるゆふたちのあめ　岡本松野子

時ならぬあられさみせておさたかく
ふりしきるなりゆふたちのあめ　友澤たけ子

天くもにたつやかけるさあやしみて
みるまに落つるゆふたちのあめ　友澤しつ子

かなたには入日のかけもさやかにて
のきはすゝしくゆふたちのふる　植原さし子

さほやまは雲さわくみゆゆふたちの
ふりこぬ今日の暑くもあるかな　宮尾あい子

今までのあつさはいつこ過きてけり
あつさをあるふゆふたちのあめ　松村りつ子

降りて來し雨にぬれつゝころもをは
入るゝひまにもはるゝゆふたち　松村きよ子

つかの間に秋をおぼゆるゆふだちの
あめこそなつはうれしかりけれ　篠田圓子

なる神のおざもはけしくうきくもの
過くるあさよりはるゝゆふたち　牧兼子

なましひに憂かる暑さのまさりけり
はつかにすきしゆふたちのあめ　瀬貞千代子

夕たちはいつれのさゝやさわぐらん
なるかみさほくおさのみぞする　和田德子

時の間にあつさなかしてゆふたちの
名こりすゝしきのきのたまみづ　石川類子

なるかみの音にきほひて降るならむ
あら〱しくもすぐるゆふたち　石川樂子

ゆふたちのすきにし庭はつゆしけく
あまきるあめのふりしそおもふ　石川久子

いなつまのひかりすこくもなる神の
あなさいふ間にはるゝゆふたち　石川南江子

なる神のくもおそろしさおもふまに
わがまごにいるたきのしらたま　久代さく子

なる神のおささきたてゝすゝしさを
一さむらくたすふゆたちのあめ　野中朝子

かなたには入日のかけのみねながら
のきはをくらくゆふたちの降る　槻竹子

なつの日のにはかにふれる夕たちに
ゆきかふ人はかさもさりあへす　長澤いゑ子

風はやみそらかきくもりふるあめに
のきのたまみづたきさなりぬる　池澤天與子

大江やまいくのゝかたにくも見ねて
ゆふたちわたるあまのはしたて　西川順子

夕たちのすぎしくさばのつゆの上に
つきさへさしてすゞしかりける　高橋天留子

見るかうちに空かきくもりなる神の　阪本榮子

おともはげしくゆふたちのふる

なるかみの音もおそろしと思はぬは　岡田春子
あつさをながすゆふたちのあめ

もみぢばも色をそむらんふゆたちに　石川よし子
とよはたくものみづにうつれる

夕たちのあめふるごとに我がにはの　石川たな子
もみじはいろをそめてきぬらし

はやてかせ吹くかとみれば里わきて　萩原章子
はしりすきたるゆふたちのあめ

はしためかほしゝ衣をとるはくまに　片山常子
はやふりすきぬゆふたちのあめ

おとろ〱かきくらしたる遠の山に　小笠原花子
ゆくあしみえてゆふたちのふる

夕だちのはれまをにほふ日のかげに　穎川智加子
うつくしよしとせみもなくなり

風わたるこずゑのせみのこゑたえて　羽田三緒子
のきはすきゆくゆふたちのあめ

夕たちのあめにあつさやながれけん　田代艶子
ふみよむまとはなつとしもなし

にひた山うきくもさはぐゆふたちに　富田とも子
とねのかはみづはやにごりけり

木々の葉に露をのこしてゆふたちの　千石粲子
すゝしきかぜになつぞわするゝ

ふく風もすゞしくなりぬけふこそは　駒澤まつ子
ゆふたちすらしやまもとのさと

なるかみの音羽のやまにくもさわき　佐久間正子
けしきをかへてすぐるゆふたち

笠やとりせんすへもなく降りいでゝ　佐久間俊子
またそてぬらすゆふたちのあめ

ぶりそゝくあさよりはるゝ夕たちの　椎野ぬき子
しつくをはらふにはのまつかせ

夕たちもいつかとやまのみねこえて　椎野秀子
すゝしさのころまつのしたかせ

ひかけさす峯のまつかせふきそへて　椎野藤子
ひとむらすきぬゆふたちのくも

ひとむらのすきゆく雲にあめはれて　椎野清子
たもとすゝしきみねのまつかせ

やま一重こなたははれてゆふたちの　小池まさ子
よそめにかゝるそらのうきくも

瀧つせのゝきばにかゝるこゝちして　深尾千代子
すゞしきものぞゆふだちのあめ

しばらくはなわ手のまつと思ふまに　財田富子
わがそですぐるゆふだちのあめ

ひと通り降るかと見れば雁がてまた　稲原蓋子
くものはれゆくいふたちのそら

すそ野にはゆふだちすらし虹みえて　山田稲子
いり日さすなりみねのまつばら

ふきなびくのきの小笹にたまおきて　佐藤やすゑ子
すゝしくはるゝゆふたちのそら

鳴かみのおとそへやみぬかはつらに　竹村竹里子
やとりすゞしきゆふたちのあめ

なつみひの夢おとろかすゆふたちの　竹下季子
すゝしくけふもふりいてにけり

夕だちのそゝぐのきばのくれたけに　坂本光子

夕だちのはげしかりけるそら晴れて　すゞしさそふる日ぐらしのこゑ　松尾富美子

ゆくりなく雨きほひ來てゆふにはに　なごりすゞしきにはのくさむら　松尾せい子

夏の日のにはかにくらのみだれきて　すゞしくそよぐつゆのたまざゝ　輕部謙子

ひささわく市のちまたもゆふだちに　いりひさしつゝきほふゆふだち　永井さい子

なるかみの音おそろしさおもふ間に　しはしつけくなりにけるかな　清河照子

さきのまにげしきかへてなる神の　わがまどにいるたきのしらたま　友永卒子

むら雲のきほふさみねしお夜そらに　こゑさゝもにもきほふゆふだち　吉弘周子

火くるまに足もおくれてゆふだちの　さごろきわたるなるかみのおさ　吉弘新子

なる神のこゑすさましくゆふだちは　いづくのささにさはいそぐらん　那須昌子

阿蘇山のひさむらくものたちまちに　みるよりはやくふるのやまみち　中山常子

すぎさりしうしろの空ははれぬるに　くづるゝみればきほふゆふだち　黒田明子

ゆふ立のこのさとのみやふりしきる　いこはでぬれしゆふだちのあめ　黒田美津子

一そゝぎのきのしづくのたきつせに　かなたのささはあかくもにして　かたへはれゆくゆふだちのあめ　松橋輝子

富士のねはあらはに晴ていちはやく　田子のうらわにかゝるゆふだち　虎口資子

はたゝがみあめよりさきに耳そこに　なりこそひゞけゆふだちのそら　佐々富枝子

くま本のしろにゆふ日はてりながら　たくまのはらにゆふだちぞする　下田龜子

なかくにふりて暑さを添へにけり　しろしはかりのゆふだちのあめ　上原のふ子

此處まではふらむけしきは見ゆれ共　こゝろにかゝるゆふだちのあめ　村上操子

ゆふたちの涼しきあめにたへがたき　あつさをしばしわすれはてけり　田村多豆子

なく蟬のこゑもしばしはたゆにけり　ゆふたちすくるやまもとのさと　丹下花子

わがせ子は何處ゆくらんゆふたちの　あめはむかひのやまにかゝれり　高石登代子

八月五日兼題

家庭のたのしみ

天　長崎市西山七十一番戸　日高かづ子

たのしみは、春の野邊、秋の山路とかぎりなけれど、折ふしのうつりかはるにうつろはぬたのしみは、むつましき家庭になむありける。たとひ銀の

衣をまとはず、山海の珍味に飽ずとも、足はぬをたれりとしりて、あまりあれば、世に捨てられし幸なき人にわかち、大和島根の正しき道をふみ分けて、木枯寒き冬の夜は、父母はらから打つどひかこむ火桶に、櫻炭の匂床しき、古へ人の教をきゝ、貞女孝子の物がたりを、よみもし、きかせもし、水無月の涼しき夕には庭におり立ちて、しける夏草と共に、心のしこ草つみ捨て、清き泉に蚊遣火のいふせき思をなかし、いつるもいるも、心の月のくもりなく、花の笑眉のちることとなければ、一家おのつからたのしともたのし。さてはかしこきあたり、祝日祭日は、いふも更なり、今日は父君、あすは母君の誕生日、はた、たれかれのと、其の日〳〵にまこゝろ赤き飯かしき、祝の盃くみかはすほど、幼き子らの悦ふ聲さへ、家の内にきこえて、けにかまびすしきは、またなき家庭のたのしみにこそ。

地

長野縣北佐久郡布施村　中澤千野子

世にむつまじき家庭ばかり、樂しく美しきはなかるべし。何事も心のまゝなる人の上にも、家の風絶えずふきすさみなど、花も香らず、月もてらず、況して、美衣美食何かあらん、彼の黄金に富める人々の、別莊に海水浴、あるは何の山、くれのいでゆと、夏の暑も白浪の、よそめ樂しく見ゆるものから、さるきはにこそ、中々に潮干に見えぬ沖の石の、かはくまもなき袖の露、世をうみ渡るも多しとかや。さるをみるめわびしき里人の、照る日にやかれ田草ひき、あるは蠶飼ひに、日もすがらいとまなき中にも、親はらからへだてなう語りかはして、大舟のいと頼みありげなる、さしもはげしき暑さへ、心地すゞしう思ひなさるゝに、いとながゝりし日もくれ過れど、清き小川に、一と日の汗を流しつゝ、日頃の心づくしのいちしろき、夕顔棚の花の本に、うち集ひ、うらなう語り興ずるに、吹く風もへだてなく、ひるの暑も忘られぬる心地よさ、そすもる風の涼しさも、心の苦をばはらひかねたる人々と、何れかまことの樂しみなる。思へば、富めりとて、貴しとて、家の治らざらんには、いかで樂しき事も、うれしきこともあるべき。まづしとて賤しとて、たゞ家の内和やかに、むつびくらすこそ、世の幸の極みなりかし。

人

廣島堺町一丁目　瀬良千代子

春は花に遊び、秋は紅葉を尋ね、四季折々の面白き所に隨ひ、一家相携へて行樂せんは、樂しから

ざるにあらざるも、こは眞の家庭の樂しみにはあらざるべし。況んや、物見遊山に、華美を盡さるゝ富貴の家内には、常にいまはしき波風の荒ること多しといふに於いてをや。家庭の樂しみは、只一家の和合にあるのみ。一家睦ましくありてこそ、花も樂しかるべく、月も賞せらるべけれ。されば、夏の家庭に在りても、少なからぬ用を費し、大磯の海水浴、箱根の湯治に、表向きの一致和合は、何にかせん。夕べ凉しき折、一日の業を終りたる一家の、さゝやかなる庭に、床几置きて、父なる人の横はれるを、娘ならん、團扇もてあふぎつゝ、傍に稚兒に乳房含またる母と、いとおかしく笑ひ語ふ樣の、如何に樂しくすがくしく見ゆるよ。嗚呼、打とけたる心の外には、家庭の樂を作す手段の、一もあらじかし。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

朝は鷄の聲に起出て、今日の教子にさとすべき、修身の女禮式をしらべ、夕は教室に、明日の、生徒に教ふべき縫裁の運針法を考へ、さりとり心をくばる。入相の鐘を聞きてよりは、父母姉弟と、一盃の酒をくみかはし、沃沽砲戰に、名譽の戰死をとげられて、英勇の名を、天下に轟かしゝ海軍中佐服部君を稱へて、母君の

軍船矢なみつくろひもろこしの
海のあだなみきりはふりけん

とうたひたまふを、陸軍第一補充兵の弟がききて、

武士は矢並つくろひもろこしの
陸のしこくさかりはらひてん

と舞ひかなづるも、家庭のたのしみのひとつなりかし。

篠田圓子

まなびやにありて、諸の人とうちきそひつゝ、物學びなすは、今更いふまでもなけれど、家庭にありても、又これに劣らぬたのしみはあるはのぞかし。まづ第一に茶の湯、生花など、いと床しく、又時としては、はらからと糸竹のしらべも、心晴々として、實に云ひ知らず。或はたらちれの、みそばに侍りて、たちぬひの業いそしみつゝ、母君の、いまだ年若におはし給ひし頃の事や、文の上にて解し得ぬ、古の事ども、委しう問ひたてまつるなど、おのづから、親子の深き情もあらはれて、いとたのしき限りにこそ。

宇高松子

わが知れる翁の「何にせん玉の臺もこもむしろ心安きにしくものぞなき」、とよまれし歌こそ忘られぬ。實にや高臺に月を賞し、錦帳のもとこそ花をめづれはとて、常々波風荒き家庭にありて、こゝろ平ならさらんに、いかでか樂しかるべき。よし身は、賤しくとも、家内睦ましく、苦樂を共にし、互に相助け相導きて、業を勵み誠の道にいそしむ人々、春は手をたづさへて野山に遊び、秋は破れし軒端にまとひして、こゝろくまなくめづる月の花の樂しみこそ、實に淸く樂しきものゝ限りとはいはんなれ。何ぞ徒に富貴榮花を羨むにたらん。たゞ願はしきは、平和なる家庭の樂になん。

阪本榮子

月花は、折にふれて、ふさはしき樂しみにはあれど、又時としては、心をいたむる種ともなりぬべし。されば、和氣みち渡る家の内に、

朝夕慈愛深き父母の、うるはしき御顔を拜し、はらからはしたしく、むつまじく月日に至るまで、おのがじゝわがつとめをいそしみ、むつまじく月日を送るこそ、まことにこよなき樂しみなりけれ•況して都へ物學に出玉ひし兄君姉君などが、夏の休暇にて歸り來玉ひ、一家打つどひて、何くれと益ある事ども語り合へば、おのづから、言の葉の花も匂ひて、もろ人の暑さに苦しむ夏の日も、何となく涼しき心地せられて、いかに樂しく覺ゆるよ。さるを家の内絕えず、浪風立ちさわぎて、和せざれば、如何に高樓をかまへ、綾にしき身にまとふとも、いかで樂しき事あらんや。實に月よりも花よりも、はた富貴よりも、樂しきは、家庭の和樂にこそ。

深尾千代子

都にすみて日ごとにあらたなる事を見きゝし、花月をめでゝは、三十一文字に言の葉をつられ、春は花見、夏はすゞみにとてありくなども、家庭のたのしみを取り、また田舍にありては、朝夕にきよらなる空氣を呼吸し、四季折々の草木をつちかひ、養ひもて、花さきみのるをはたのしびとせるなど、おのがむまく〱なるもをかし。そも家の内に病めるものあらば、がゝることをなすとも、いかでかたのしかるべき。老いたるものは、わかきをいつくしみ、わかきは、老いたるかたにしたがひ、苦樂を共にして、日々の手わざもこゝちよくすませ、主婦たるものは、よろしく衣食住につけて、衞生の道にかなへるやう、心して一家だんらんのたのしみをはかりてこそ、げに家庭のたのしみいでくるなり。

内田はる子

貴賤によらず、世にたのしみはいと多かれど、そが中にも、別けてたのしと思ふは、あたかも春の花咲きたらん如く、和氣滿ち充てる家庭にぞありける。たとへ身は富貴に生るればとて、父母はらから、己がまに〱心たがひ、親は子の惡しき習はしにそまる事ありとも、いさゝか心にもとめず、またこれをいましめさとして、誠の道に導かんともせず、されば、子も親を親とも思はず、ます〱惡しき事のみ見習て、己が思ひのまゝにふるまひなどしたらんには、家の内いつも荒き波風たゆるひまなし、そがために、つひに身をも家をもほろぼすべき、おそろしの禍を引き起す樣の人々も、廣き世にはあまたあるとかや。さるを貧家に生るればとて、子たるものは、よく子の本分をまもり、父母を敬ひかしづきてそがみこゝろを休め奉らばやと、よろづに心用ひつゝ、己のが力の及ぶかぎりは、つとめて孝養怠らず、兄姉弟妹皆心を一つにして、互ひに助けあひつゝ、雨につけ、風につけ、はた月雪花のながめをも、まづしき中にもへだてなう、いと睦ましやかにながめ暮さんには、富家の亂れし、家庭よりは、なさ〱まさりて、實にたのしからん。されば、世の人々、皆このこゝろがけあらまほしきことになん。

輕部比佐野子

家庭の樂しみは、各々心にのぞむ所、さそは、甚の身ほど〱につけて、相同じからねば、いふも更なる事なりかし。山里に、淋しく住むわが身にも、なほ樂しみ淺からず、一つにはからき浮世の風の吹き渡るとも、家庭の枝もたわゝにふき亂だされざる樣、萬事に心ずけ、長く香はしくたもたせ、此の日の本の日に月に榮えゆくらん樂しみは、いはでもあるべし。この樂しみは、月花のながめにもまさりてとぞ覺ゆる。おもひよりたるまゝを、ひとつふたつかくなむ。

松尾せい子

凡そ、家庭の和樂ばかり樂しきはあらじや。夫は妻をあはれみ、妻は夫を敬ひ、家事をなさめ、祖父母の心もなだらかに、兄弟爭さならず、姉妹爭はず、身に恙なく、業さるこそうれしけれ。

淺く火桶の團居も、暑さを凌く夕顔棚の下すゞみ、心ゆるやかなるこそは、たぐふべき方もなく、野分身にしむ秋の夜の月は、さやかに影澄みて、雲も障らぬ心地こそすれ。さるにても、互に短きを罵り、長きを羨やむやからうちよりたる、おのもく、薄氷をふむならん。如何に多くの財ありとて、何樂しかるべき。かれもこれも大かたは、主婦たる者の責なりとかや。おのれの誠をつゐとして立たんには、などか、家庭の和樂の保たれざることやある家をなさむる人、はた、そを助くる人、こゝろすべき事にこそ。

螢　　福原壽美禮子

風そよく庭の木末の露とゝもに
こほれてとふは螢なりけり

御眞影むかへ奉りし時　　中澤千野子

明らかに治まる御代のみ惠はかゝる深山のおくまでもすめらみことの大みかけむかへまつろひ賤か身もたふときみまへに君か代を祝ふ今日こそかしけれ
學ひの庭に集ふ子よ大みみまへに朝な夕つとめいそしみすめらきの御國の母の大御言御言かしこみあわれ身を深山かくれの埋れ木とたへすくちせぬ名をあけて世をし人をもてすらへき玉の光をそへよかし
なすかしき學ひの庭の撫子よ
大御惠を露なわすれそ
御惠の露の光りにまなふ子は
雫もほたるもなにたのむへき

木野尋常小學校に奉職して　　佐々有鄰子

今日よりは花うゑて[illegible]ん

なしへのにはのやまとなでしこ
裁ぬひにこゝろただしくはこぶ針は
くにのはゝともなるべかりけり
今年の七月ばかりの水洪のいとあはれなるありさまを見て　　仝人
田の面みな海となりたるおほみづに
ひとすくひふれたれかこたふらん



至急廣告

本社發刊の『國光』『女鑑』御愛讀の諸君中御轉居の節は往々現住所のみ御通知相成候に付取調上甚だ困却且つ行違ひ遅延等の不都合を生し爲めに御迷惑相掛け候事も有之候間將來は**現**御住所**前**御住所とも詳細に御通知被下度此段廣告致置候

國光社雜誌部

國光、女鑑に關する御照會、御通知、御送金等は以後國光社雜誌部宛に御願申上候

社告

女鑑毎月五日、廿日、發行

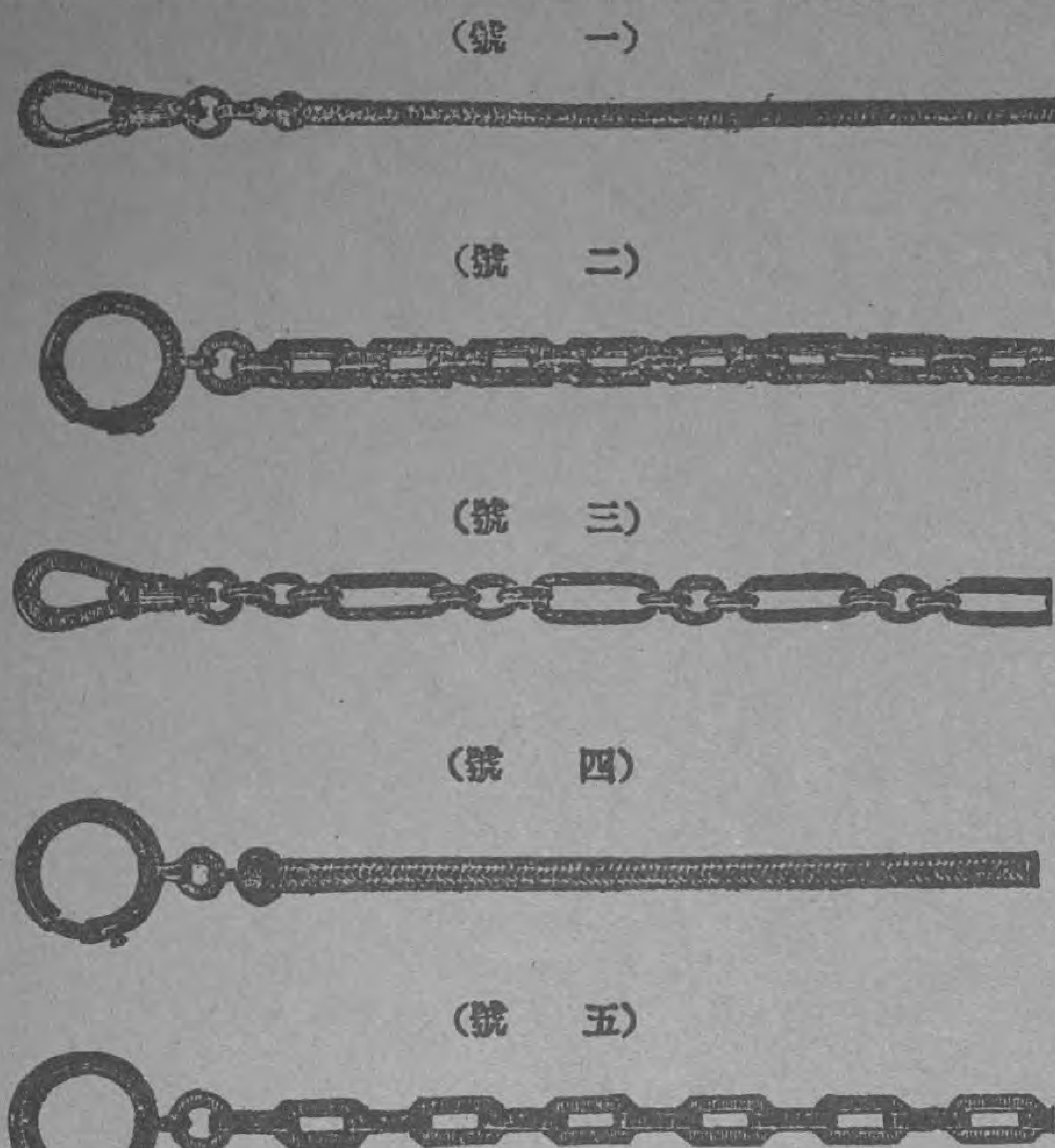
定價	一冊	拾錢
	六冊（三ヶ月分）	五拾五錢
	十二冊（半年分）	壹圓
	送料	全國無遞
代金	通貨又は郵便小爲替、銀行爲替及通常郵便にて御拂込の事拂込は、郵便爲替、拂渡局は東京新富町郵便受取所、受取人は東京築地貳丁目廿一番地國光社宛、郵券代用一割增	
領收	別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料又は端書封入の事	
照會	編輯上に關する件は「東京市京橋區築地二丁目二十一番地國光社編輯部宛」◎會計上に關する件は東京京橋區築地二丁目二十一番地國光社雜誌部宛照會は返信用切手封入若くは往復葉書にあらざれば回答せず◎未納税の來書は一切受取らず	
廣告料	一行（五號活字廿三字詰）	金二拾五錢
	半頁（一行三十詰）	金六圓
	一頁（二段六十行）	金拾圓
	料金は前納、位置は申込の順により組み込む	

明治三十三年八月四日印刷
明治三十三年八月五日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衞
印刷人　東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木亘雄
發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　特（電話番號新橋八八）國光社

（明治二十四年八月四日内務省認可
明治二十五年三月十二日遞信省認可）

白色輕金時計鎖發賣廣告



●	壹號	價一圓九十錢
●	貳號	價一圓六十錢
●	參號	價一圓七十錢
●	四號	價貳圓
●	五號	價一圓五十錢

白色輕金ハ一名輕金トモ云フ（アルミニユム）ノ事ナリ白金（プラチナ）ト同シ光澤アリテ重量ハ其四分一ニ過キズ金屬中ニテ最輕キヲ以テ此名アリ

◉白色輕金ハ其價頗ル廉ナレトモ凡ソ金屬中ニテ酸化セザルモノハ黄金、白金ト此輕白金ノ三種アルノミ

◉白色輕金ハ製作ニ困難ナリ然トモ學理應用ノ結果今日ニテハ自由ニ製作セラレテ美麗ナル時計鎖ヲ造リ出ス事トナレリ

◉此鎖ハ歐米諸國ノ上流社會ニテ殊ノ外ニ行ハレ遊獵又ハ旅行ナトニ專ラ用ヒレラテ我國ニモ漸ク船載シ來リ現時ノ一流行トナレリ

◉サレトモ在來ノ品ハ洋服用ノミナレハ本堂ノ創意ヲ以テ和服用ニ適當スル品ヲ製作セシメ此度コレヲ發賣ス

一此鎖ハ代價甚タ廉ニシテ品位甚高シ
一裝飾ノ上ニ於テ白金ト優劣ナシ
一重量頗ル輕ケレハ携帶ニ至便ナリ
一時計ノ側ヲ傷クルノ患ナシ
一和服ノ帶ヲ損ズルノ氣遣ナシ

本堂態々歐洲ニ此鎖ヲ注文シテ製作セシメタルハ輕白金鎖ノ特色ヲ愛顧諸公ノ御實驗ニ供センカ為ナリ

◉製作ノ精良巧妙ナルハ御實視アリテ知リ玉ヘカシ

◉御購求ノ上ニテ實地ノ便益ヲ證シ玉ハヾ本堂ノ微衷空シカラスシテ幸甚ナリ謹言

東京市京橋區尾張町貳丁目拾六、拾七、拾八、拾九番地
電話番號新橋三百三拾三（長距離加入）

時計寶玉類貴金屬
美術品各種及銃砲商

天賞堂

天賞堂出張所々在地
（●東京市神田小川町●横濱市●名古屋市●大坂市●廣島市●熊本市●長崎市●小樽臨時）

（東京市京橋區築地二丁目廿一番地國光社印刷所印刷）